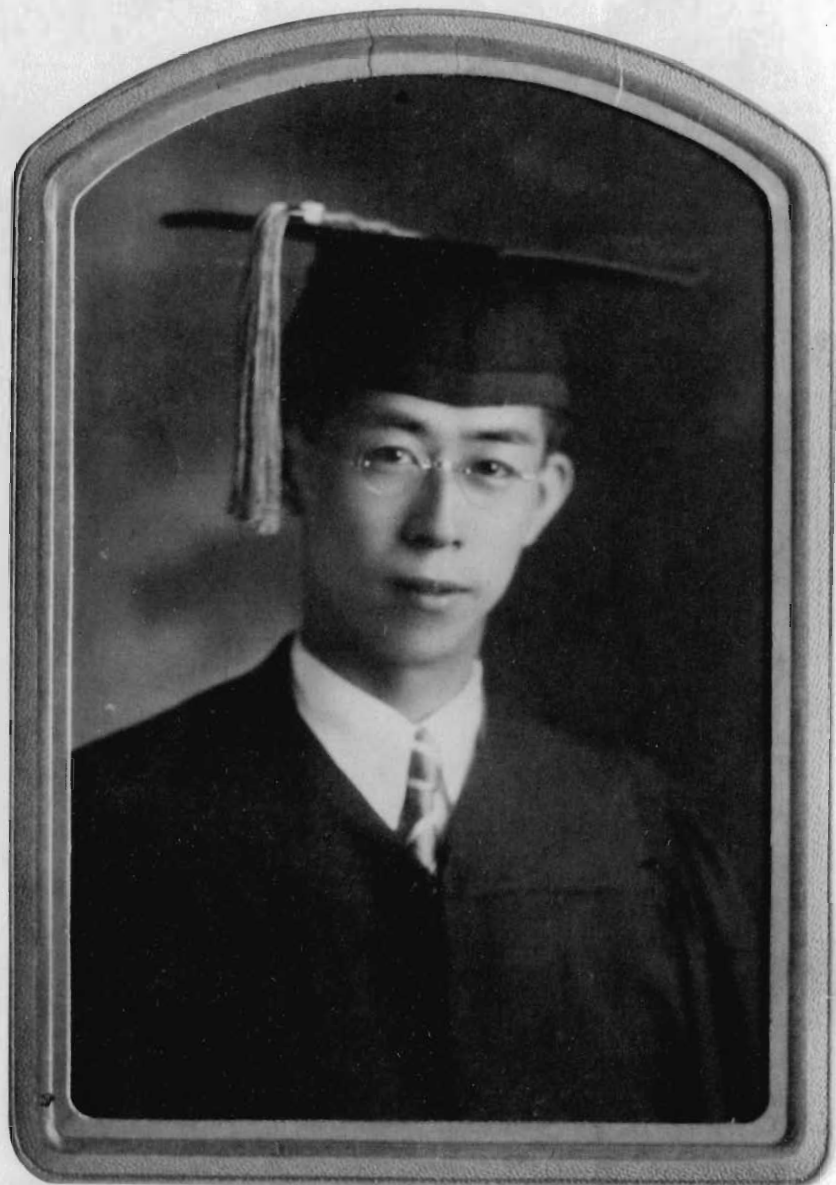


夕
映

夕
映

The Evening Glow.



age 23

June 10, 1930

On graduating from Indiana University,
Bloomington, Indiana, U. S. A.

念紀業卒學大ナアヂンイ 日十月六年五和昭
歳 三 十 二

Akira Ohoka

明 岡 大



age 1

歲 一



age 4

歲 四



age 3

歲 三

Akira Ohoka

明 岡 大



age 5

歲 五



age 13

歲三十



age 7

歲 七



Mr. A. Ohoka

On graduation from Kobe Higher Com. College,
age 22.

代時業卒商高戸神
歳二十二



A. Ohoka,
of Kobe Higher Commercial College,
age 21.

代時徒生商高戸神
歳一十二



age 23

August 18, 1930.

日八十月八年五和昭
歲三十二



age 23

April 26, 1930.

日六十二月四年五和昭
歲三十二



A. Ohoka, (right)
Jan. 25, 1931.

At International House, N. Y. C.

テ於ニスウハ・ルナヨシナータンイ青紐 日五十二月一年六和昭
(端右) 明 岡 大



A. Ohoka (left)

May 3, 1931 at Van Cortlandt Park, N. Y.

外郊青紐日三月五年六和昭

テ於ニ園公ドンラトコ・ニアヴ
(端左) 岡 明 大



A. Ohoka (Sitting)

In front of Columbia University, N. Y. C.
on April 20, 1931.

テ於ニ學大ヤビムロコ 日十二月四年六和昭
(下) 明 岡 大

5.5.1.1

友同君 最も偉い人間
 最も平凡な人間
 予の来て
 喜ぶ来て又
 友の来て
 教育 潮
 遺傳 思
 人松
 新 何盛元
 政 爲
 1917/1929
 有下付
 1929
 心
 書
 下

Scrblings by some of Akira's school mates at their gathering shortly before his sailing for America.

on 19 July, 1929

書セ寄念紀ノト友親テ=會別送日九十月七年四和昭

INDIANA UNIVERSITY

School of Commerce and Finance

To all to whom these presents may come, Greeting:

By vote of the Faculty and with the consent of the Board of Trustees, Indiana University
hereby confers upon **Akira Ohoka** who has complied with
all the requirements of the University and has successfully completed the studies
prescribed for graduation in the School of Commerce and Finance the degree of

Bachelor of Science

IN COMMERCE AND FINANCE

with all the rights and privileges thereunto appertaining

In Testimony Whereof, this Diploma is signed, sealed with the Seal of the University, signed
by the President of the University and by the Dean of the School of Commerce and Finance, and attested
by the Secretary of the Trustees.

I gave at Bloomington, Indiana, this _____ day of June 19__

William L. Bryan

W. A. Rawles
Dean of the School of Commerce and Finance

John H. Craven
Secretary of the Trustees

The Centennial Years — 1931 and 1932
NEW YORK UNIVERSITY
GRADUATE SCHOOL OF BUSINESS ADMINISTRATION

A. WELLINGTON TAYLOR, Dean

90 TRINITY PLACE, NEW YORK

April 27, 1932.

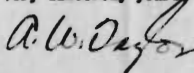
Mr. H. Ohoka,
184 Rikyu-mae-machi,
Suma-ku, Kobe, Japan.

My dear Mr. Ohoka:

I take great pleasure in informing you that at the request of the faculty of the Graduate School of Business Administration at its last faculty meeting it was voted to recommend your late son, Akira Ohoka, for the Master of Business Administration degree, granted posthumously. It is expected that his name will appear on the commencement program and his diploma will be sent to you.

It pleased me very much that this action was taken by the faculty on their own recommendation and as a recognition of the esteem in which your son was held by them. The officers of the University have heartily approved of the faculty action.

Very sincerely yours,



A. W. Taylor
feh



即此四折各年六月攝影
大同破柱手

略 歴

原籍 長崎縣南高來郡島原町一千百四十番戶

士族 大岡 破挫魔 長男

大 岡 明

明治四十一年一月二十二日生

大正十四年三月 大阪府立北野中學校卒業

同年 四月 神戸高等商業學校(神戸商大の前身)へ入學

昭和四年三月 同校卒業

同年七月卅一日 渡米、インヂアナ州アルミントン市インヂ

アナ大學に入學、商業及理財學を修め、昭和五年五月卒業、「バ

チエラー、オブ、サイエンス」學位を授與せらる

昭和五年 九月 ニューヨーク大學大學院に入學、商工經營學

を收め、昭和六年五月卒業

昭和六年七月十日 ニュージャージー州オシアン、シチー滞在中偶

々病に罹り、直ちに同市アトランチック、シヨアー、ホスピタル

に入院、加療せしも藥石効なく、同年八月六日午後五時半(日

本時間八月七日午前七時半)急性肺炎の爲め不歸の客とな

る、享年廿四歳

昭和六年九月八日 遺骨春洋丸にて横濱着、九月十一日告別式を

午後四時より五時まで、大阪市北區下寺町二丁目正泉寺に於

て舉行す

昭和七年三月廿二日 郷里長崎縣南高來郡島原町本光寺に遺骨を

埋葬す

戒名 清涼院徳山明洋居士

昭和七年 四月 紐育大學々長テラー博士よりM.B.A.(マ

スター、オブ、ビジネス、アドミニストレーション)の學位を追

贈せらる

追憶篇

目次

手向草	森下清三	3
再び明君の靈に	同上	8
君への追憶	茅田恭兄	10
大岡君を憶ふ	河村政一	14
故大岡君を偲ぶ	小島豐	18
大岡君の追憶	松本勳	21
大岡君を憶ふ	大塚碩夫	34
中學時代の明君	湯淺恂一	39
大岡君を追憶して	芳村佐助	42
親友明君を偲ぶ	松本寅一	53

明君との紐育生活	八幡昇	68
學友明君を憶ふ	大村文治	75
學友大岡君を偲ぶ	萩原喜作	80
同	鈴木定吉	85
明君を偲ぶ	藤森豊和	88
明君の思出	福島敬三	90
大岡明氏を偲ぶ	岡田直廉	96
ブルームントンの大岡明氏	塚口漸	102
大岡明君を偲ぶ	木村喜逸	106
明君と私	小野武三郎	110
明君を憶ふ	吉川蕃三	113
明さんの思出	原翫之助	115
明の靈に誥ぐ	父	118
明の靈前へ	母	130

御靈に捧ぐ	澄	子	137
埠頭に立ちて	政	子	146
しのび草	秀	子	150

弔詞篇

弔詞	川田長兵衛	159
同	凌霜會	163
同	趣味會	163
同	趣味會	163
御悔	橋爪與作	167
同	茅田恭兄	165
同	上田金作	168
同	横手	170
同	岡島美行	172
同	上田清一	174

同	秋山真造	175
同	豊田恭三	177
同	上田源三郎	178
同	松原肇	180

遺稿篇

渡米日記	故大岡	185
我が家	同	221
秋の夜	同	222
十四歳の春	同	223
高商生活を終りて	同	224
ホノル、見物	同	227

書簡篇

河村君へ	故大岡	233
同	同	234
同 (英文)	同	237
森下君へ	同	239
同	同	243
スミス先生へ (英文)	同	246

雑篇

米大陸二千哩自動車旅行記	松本寅一	251
(大岡明兄に御伴して)	父	258
亡き骸を迎へて	大岡破挫魔	262
あとがき		

追
憶
篇

手 向 草

森 下 清 三

大岡明君が Ocean City の病床に淋しく永眠されてから早や八十日に近い日が経ちました。北國なれば時雨する今宵暖い火を抱きながら懐しい君の生前の事共を誌して一篇の手向草と致します。

明さんと相識つたのは筒臺に花咲いて君が入學の年私が本一の時で、私を當時芦屋に在つた君が御内の後園のコートに導いたものは君が同窓の友小野君であつた。この時から始まる六年間の交友を回顧して見ますと旅の思ひ出が點々珠玉の様に吾等の友情に絡んで居る事に氣が附いたので茲にそれをまとめて追憶のよすがと致します。

君の豫科私の本一——今から思ふと微笑ましい程若かつた——互に相識つて間もない頃學校からの歸り同じくする阪神電車の車中で

筒臺四年の生活は思ふに受け容れの生活であるべきであつて即ち一面全國の

俊秀に伍しての勉學の生活であり更に一面正に修養の時代である。外に向つて散ずるよりも他日の爲に内に向つて豊かに積み重ねるべき時代である。深く採り廣く求めねばならぬ。先人に聽くべきは結論ではなく、それに達する過程である。それには何よりも努力が肝要である。自ら努めて見聞を擴める事が大切だ。―例へば旅行なんかは一番いゝ様に思ふ。

こんな事を君の意見を聞く暇もなく獨り先輩顔して語つた恥しい思ひ出をこの一篇の前置とします。

第一に思ひ出す旅はその年(十四年)の秋尼崎汽船の船だつたか浪切丸といふ内海通の船の新造祝に十月三十日の休を當てに企てられた寒霞溪行きの時である。私は明君の誘を受けて日華製油の方々と同行した様に覺えて居る。神戸で乗船しばらくは甲板に月を眺めて居たが夜半の寒さに堪え兼ねて満員の Cabin に入りその一隅に辛じて二人の席を得る事が出来た。その夜君はよくよく眠かつたと見えて遂に人々の間に小さく身を縮め私の胸に倚りながら寢てしまつた。時々眼が開くと「君濟まないなあ」と言ひながら又眠に落ちて行つた。「イ、よ寝給へ」と答へる自分もその時は大分怪しかつた。

島の紅葉は未だ早かつた。二人は一行の人達と離れて四望頂に上つたのだつたが思へばこの島の高所こそ吾等二人の友情の無形の記念碑が打ち立てらるべき處となつた。濶然と開けた内海の風光を見下す頂の草の褥に臥して清風萬里流れる雲を仰ぎながら二人は若い感激の躍るまゝに將來必ずなすところあらむと約したものだつた。而して誓ひし君既に亡く追悼の筆執る吾に今秋風のみ肅條。

在學中明君はよく旅行をした様に覺えて居る。御土産に昆布の御菓子を呉れた北海道樺太の旅又長崎方面の旅にも出掛けたと思ふ。然し吾が印象に深い第二の旅は君が本一、私が本二の夏の支那旅行の事である。その夏君は上海から滿洲に向ひ私は傘一本を頼りの身輕さで大連から南に向ひつゝある一日私が旅順に遊んで幾多の砲壘の廢墟を弔つて大連に引返すべく白玉山下の停車場に足を踏み入れた時恰度大連からの到着列車のデツキに見た姿は明君その人ではないか。吾等は手を振つて暫し無言相擁して驛前の茶店に這入つて一杯の Coffee を傾けながら南と北とに湧いた二つの白雲が期せずして旅順の空に相逢ふ奇遇を如何に喜んだ事だつたらう。會談半時間許りで又各の途に別れたのだつた。そ

の後九月に入つて學校で顔を合せると此の時を語り合つてよく奇遇奇遇と笑つたものだつた。

旅と言へば君の渡米は畢生の大旅行であつたと言へる。神戸を出る時のあのほゝゑましい面持に誰が今日の命數を讀み得たらう。あの時私は本當に君の留學を羨んだと同時に、日本の社會が日に新しい人材を要求する時、實際の爲の理論を究め併せてアメリカの實狀を審にして來る事を切望した。向ふに渡つた後の君の努力は想像の外にあつた様だ君自身が自分の好成绩に驚いたといふ事も更に一年間の滞在延期を考へ出した事も皆君の精進を裏書するものと思ふ。この勉學の傍君はよく私を省て呉れた。私が下宿で淋しかつたら留守宅へ遊びに出掛けたらどうかとも言つて呉れた。私は君のかうした好意を感謝すると共に他國に在つて華かな留學の蔭に言ひ知れぬ苦心を重ねる君をどれ程いとほしく思つて居た事だらう大いに慰め大いに勵し度いと思ひながら盡し得た事は誠に鮮かつた。君が Ocean City の病床に肺炎の症狀一先づ治まり回復の曙光を見た日代筆ながら君が生前の最後の通信を呉れた友情に對しても實に恥しい。明君のこのアメリカへの旅は遂にまた淨土への旅ともなつてしまつた。今私は劈頭に

掲げた私の言葉と思ひ合せて何だか非常に君に濟まない様に思へてならぬ。

靜に思へば君は本當にイ、男だつた。君には眞率と和氣堂に滿つるといふに近いものを持つて居た。又處々に確い結節を見せて素直に伸びたところは正に竹の様に氣持のいゝ男だつた。その君の努力と才能が凡て蕾の中にもぎ取られぬ故に君は實に惜しい男だつたと思ふ。書き來つて小豆島の高きに旅けるやさしい誓を思ふと一掬の涙なしには居られぬ。君があ約を冗談だつたと取消して呉れぬ限り之は今私の大きな精神的な負擔となつて居る。而して君はもう之を取消す事も出来ぬ。だが私は未だ若いから充分この負擔を負つて立たう。私の出来る限りを君との二人分だと思ふてやる決心だ。今少し雌伏の状態に在るがやがて活動する日には亡き君の鞭鞭を祈つて止まぬ。

明君の追憶を辿れば尙限りないがもうこの邊りで筆を折らう。然し御愛育多年大きな御力を君に注がれ、その最後の二年やがて業成つて歸へられる日を刮目して待たれた御兩親初め弟妹の方々の御痛嘆はどうだらう。あゝ生きて居ればあれもこれとも思はれるに違ひない。こゝに至つて私にも涙許りである。合掌

再び明君の靈に

森 下 清 三

昭和四年夏七月、神戸港頭風靜かに烈日波に漉々たりし日、君はサイベリア丸の客となり莞爾としてアメリカ遊學の途に上りぬ。

「健在なれ」「さらば」と交す言葉も終らぬ中惜しむ別れに引く紐の早くも盡きて白き布振る君が姿はやがて渺々たる霞の中に入りなき。

かくて最後の握手尙掌に温く、別離の言葉は今尙耳に新なるに春秋二度吾等が頭上に去來し星霜二年を過ぎぬ。

この間君はインディアナ大學に學び次でニューヨーク大學に移り苦心研鑽の業遂に成ると聞きて故國の吾等ひたすら歡會の日を待望しつゝありたりき。

然るに今夏七月半飛電來つて君が病篤きを傳へ、八月七日電波再び濤を越えて君が訃を傳へぬ。

噫、天帝何ぞかく悲情なる、君は齡廿四、未だ若く可惜有爲の資を抱きて遂に異境

の鬼籍に入りぬ。

君よアメリカの土地の廣きに行く道を失ひたるか、今幽明境を異にしたる君を偲べば、

わがゆくて雲井はろかに道つきて

道の中らに獨なる

の感に堪えざるものあり、君も亦幽界に在りて之が同感に肯かむか。

生者必滅、會者定離、老少不定、愛別離苦、諸行無常、今覺者の言冷鐵の如くにして吾に熱淚の溢るゝあり、世に眞の悲哀は人目を忍びても尙之を抱き温めんとすとの言誠に吾を欺かざるを知る。

この度君が御兩親の愛慕の心凝りて君が同胞の追憶を集め知友の思ひ出を摘みて追憶の文集を編み給ふ、今稿二、三披見するに君在りし日の温容髣髴として眼底に浮び歡晤亦耳にひゞき來る。噫、なつかしき君哉、かくて君は御兩親の愛情を受けて茲に永生の形を得ん。

今日吾北海の岸より來りて須磨なる君が館に在り。孤影悄然、君が遺品を撫し思慕を天涯の君に寄す。

今宵夜暗くして星影寒うこの窓邊に風吹きやまず。
君よ來りて吾と一夜の歡晤に入れ。

(昭和六年十二月十三日夜)

君への追憶

茅田恭兄

大岡君、突然僕等の許を去つた君は今何處でどうして居る？ 僕は君に會ひ度
い、あの人懐しい君の温容に再び接し何のわだかまりも無かつたあの筒井ヶ丘の
昔の様に語り合ひ度い、併し是非も無い君はもう呼べど叫べど歸つては呉れない
のだから、恐らく君も何處かで僕等に會ひ度いと思つて居て呉れる事だらうね。

神戸港頭サイベリア丸上のあの希望に満ちた君の笈を負ふた姿は未だにまぎ
／＼と目に見える様だ、忘れもせぬ三年前の暑い／＼七月末だつたね、それより僅
かに二年にして悲しむべき君の訃報を受け様とは、時の僕等の心中は如何に難か
しい漢字をゴテ／＼と幾つ並べたつて到底言ひ現はせるものではないよ。

明君、願れば君との親交は誠に短いものだつたね、君は芦屋、僕は住吉より互に汽
車で通學して居たのが縁となり何かで語り合つたのが君との交友の抑々の始め
だつたね、而かもそれは丘に上りてより可成りの日が経つた後の事だつたと記憶
する、それより僕は君の爲人が一も二もなく氣に入り、忽ち百年の知己として君の
親交を得たのだつたが、君も僕の様な者に對してよく心から交際つて呉れたね、今
更ながら厚く感謝するよ。

明君、君は實によい男だつた、明るいユーモアを湛へた眞面目な性格、而かも其の
君獨特の稚氣満々たる所はよく僕等を哄笑の内に啞然たらしめたりヒヤツとさ
せたりしたものだつたが、僕は何の屈託もない君の一舉手一投足が無性に好きだ
つた、僕の丘の生活の後半は大なり小なり必ず君の存在が織込まれて居ると云つ
ても過言ではないよ、僕等はよく散策に出掛け殊に芦屋川、住吉川の畔りは、河村君
と三人好んでうろついたものだつたね、微笑ましい例の魚崎の事件は未だに僕等
の淋しくも晴やかな語り草となつて居るよ、時間さへあればあの青谷の高臺を的
もなく漫策しつゝ君の好きな巨船の行き交ふ繪の様な海を眼下に眺めて、世にも
取止めのない四方山の話に時の經つのも忘れてゐた在りし昔が夢の様で懐しい

君は話す事が好きで、僕はよく十二時過ぎる頃迄君の宅で座り込んだものだが君は何時もニコ／＼と話相手をして呉れ、歸る時は常に名残惜しさうに見送つて呉れたものだつたね。

僕の無趣味に比し君は實に多技多能な男で殊に君のピアノとテニスに堂に入つたものだつたが、併し明君、君のバイオリンだけは外交辭令にも上手とは言へなかつたせ君も素直に之をよく認めてゐたつけ、下手と言へば君の碁を思ひ出すが之亦バイオリンと同様少く其人前でやれる代物ではなかつたよ、君との只一回の手合せは僕の惨敗に歸したが、それは僕が弱かつたからだ、君と歸朝後の再手合せを約して置いたが、今は永久に君の勝越となつてしまつたね。

明君君の御兩親思ひは君の常日頃の言動によく其の片鱗が伺はれ僕は私かに感心して居た事だが、君の渡米計畫を初めて僕に洩らした時の如き、當時君の御母上が健康餘り勝れられなかつたことを、非常に憂ひ靜かに述べる其の切々の情には僕は返す言葉もなく、ホロリとさせられたものだ、越へて君が彼地に渡つて後の事、御父上の御急病の飛電、君の夢を驚かしたる直後君より受取つた便りは、綿々として親子の情盡きる處なく、他に之を讀む者があれば當時の君の心情を推察し泣

かない者は無いだらう、其君が思はざるに御兩親の許を遠く離れた異境の空で獨り淋しく玉の緒の將に絶たれんとする時、君の心中果して如何ばかりだつたらう。

明君、吾々があの丘を下り各々其の向ふ所に散り去つた後互に稍もすれば交友疎遠とならんとする時、友情に厚い君は不相變よく僕を訪ねて呉れ、よく僕を喜ばして呉れたね、渡米後も月に一二回は必ず何かと消息をして呉れたね、有難う、就職戦線將に酣な僕等の卒業期折も折親愛なる河村君が不幸病の床に呻吟する身となつた時の如き、君の人知れざる心配振は恐らく河村君も未だに知らない事だらうよ、斯の様な友情の君は又感情の人でもあつたね、忘れもせぬあの思ひ出多き丘と別れる最後の日、謝恩會の幕も下りた夜、晩く阪急の終點で河村君と三人心ばかりの最後のビール杯を交した事があつたが、其時の君は日頃の君と打つて變り終始何の言葉も無く打沈みハラ／＼と清い涙を流し何時迄も立上がらうとしなかつた、其の純情には、僕も理由もなく悲しかつたよ、其の愛すべき君に僕は再び會ひ度い、が今となつては只汲めども／＼盡きない追憶による外會ふよすがもない。

明君、君が日頃話柄に上してゐた高架線も完成したよ、母校新校舎も赤松城跡に其の勇姿を現はさんとしてゐるよ、君の過去幾年見慣れた其儘の姿を止むる悠久

の六甲の翠緑を仰ぐにつけ、刻々に變りゆく麓の風景を見るにつけ、君の在りし昔の悲しくも樂しかりし追憶はアルバムと共に永久に僕等の許より消え去らない事だらう。斯くて君も僕等に對し何處かで満足に微笑して居て呉れる事だらう。

(七、四、二六)

大岡君を憶ふ

河村政一

遠大な希望を胸に海の彼方に遊んだ君も憎むべき病魔の爲に錦を飾つて歸朝する日を待ち侘びた我々を捨て、果敢なく去つてしまつた。夢以上にあつけない氣がする。

彼の死に依つて我財界―或は學界かも知れない―は少なからぬ損害を被つたかも知れない。否、恐らく被つただらう。併し私自身彼大岡君の死を悼む理由は、そんな悠長な―假令それが必然的實現性を具へて居ても―御世辭的なものではなく、君と僕との個人的交友關係に基く更に、痛切なものである。君と交つ

て以來五ヶ年此方私は君に對して少からぬ精神上友誼上の債務を負ふた。そうして僕は之に對して一度の内拂もした事が無い。完全に借りつ離しのものである。御世辭で濟まされない理由はそこにある。君の死が僕自身の胸に一種の壓迫と苦痛を支へるのも之が爲に外ならない。

君との交際は大正十四年筒臺豫科の後期に始まり、昭和六年夏君が此の世を去るまで、現世の分は終る。其間君は終始一貫僕を勵まし導いて呉れた。僕が生來の偏狹さを以て君に反抗すればする程君は一層の寛大さと温かさを以て慰撫して呉れた。

惟ふに君と僕とは生來そしてまた境遇の相違に依つて後天的にも性質が著しく異つてゐた。君は幸ひに順境に恵まれて、そこに君の應揚な抱擁力のある性格が養はれると同時にその有り餘つた愛情を外部にまで及ぼさうとする完全な餘裕を持つて居たのに對し僕は寧ろ孤獨で他人の激勵を必要とする立場にあり、君は終始能動的に働きかけるに對して僕は常に受動的態度よりとり得なかつた。君との交際が全く不圖した事から始まり而もそれが相當深く永く續いた理由は全くそこにあるものだと私は信じてゐる。所詮僕は終始君を煩はすべく結びつけ

られた様なものである。

君は僕のみならず、恐らく君と交つた總べての人が認めるだらう様に全く一點の厭味も無い極めて素直な朝らかなそして應揚な性格の持主であつた物事を視るにつけ、人を解するに當つても決して囚はれた偏狹な見方をしなかつた。君に近付く者は相手の誰たるを問はず、如何なる人たるに關せず苟もこれを毛嫌ひすると云ふ事は絶対に無かつた。快くこれを容れて決してそらす事をしない、而も相手の性格を理解する事に至つては少しも間然する所が無かつた、一例を舉げれば、僕が君の御宅に御邪魔してゐる時に他の友人が訪ねて來る事がある、元來偏狹な僕は取次の方が訪問者の名前を告げるや否や忽ち快不快の感情が顔に表はれる、併し君はそれ以前にその訪問者を我々のグループに招じ入れた結果醸し出される雰圍氣について既に的確な判断を下してゐた。君にとつて如何に親友であつても、先來者にうまの合はぬ人を招じ入れて氣拙い思ひをさせる様な事は決してしないと同時に斯る懸念のない人ならば、早速快く引込れて、其處にまた、更に賑な楽しい雰圍氣を醸成する。其の手腕たるや、全く先天的に具へてゐるもの乍ら實に敬服せざるを得なかつた。斯る次第であるから、君は極めて親しい友達が隨

分多かつた、況んや單に友人と稱すべき友達に至つては各種の方面に亘つてとても多かつた事と思ふ。君の具備してゐる斯る美點から考へて、君の意思は知らないが、君は當然學界よりも實業界に入つて雄飛せらるゝ事を大いに期待してゐた譯だつた。

豫科の時、本科の時代、三尾の遠足雲仙の旅と君に對する個々の思ひ出は綿々として盡きない、併し思ひが一度君の臨終時の心情に及ぶやその残念さその苦痛さが推察せられて思はず目頭が熱くなる、君は何故此の様な残酷な苦みを受けなければならなかつたのだらう、餘りにも残酷な運命の仕打に對して、凡俗の吾人には全く慰めの術が解らない。もとより吾々の斯る小さな努力が君の靈に通ずる筈はないが、之に依つて僕自身の胸に少々でも慰安を與へて満足して居なければ仕方がない様に思へる。

故大岡明君を偲ぶ

小島 豊

明君の一周忌が近づいた、昨夏八月突如として異國の地に逝かれた明君を偲ぶとき思慕の念切々禁じ難いものがある。

君は誠に玲瓏玉の如き稟性と温容人を魅する風貌而も恵まれた豊かな才能を享け、極めて順境な零圍氣に育まれ、幼にしては幾多の美望の的となる北野中學に學ばれ、長じては神戸商大の前身で全國に君臨せる神戸高商にその若き日の好學の熱情を充たされたのでありました。そしてその學生生活を通じて君の人格は幾多の友の畏敬と思慕の的となつた事であつた、私は多感な青年時代を君と共に學ぶ幸を得た一人でありました。

兎角すれば脱線する人の多い學生生活にあつて、毅然として學生の本分を忘れず、飽迄も若き學徒たるの熱意を有して居られた君は、内地に躡躑して小成に安んずるを甘んぜず、只一人笈を負ふて米國インディアナ大學に向はれた。この意氣

とこの熱意とは私達の等しく敬服した所でありました。

君は學生時代より人として典型的なる教養を積まれて、あの明朗な圓轉洒脫な性格は觸れる人凡てに十年の知己の如く語る事を得る、親しさを感せしめました。又君は人に卓越して趣味廣くその行く處佳ならざるものなく、豫科時代に校内のテニス大會に豫科生として只一人出場し、最後迄優勝戦に奮戦せられたのは私の腦裡に未だ新たなる處です。

君は斯の如く天稟の社交性に搗て加へて、高雅な素養と豊富な才能の持主でありましたが、又一面極めてファイティングスピリットの旺盛の人でもありました。これ等の君の性格が、彼國アメリカに於ても、大和魂の所爲者日本青年として異彩を放つたであらう事は想像するに難くない所であります。君がニューヨーク大學に轉學せられて後、日米學生協會なるものの創立に任じ、これが委員として斡旋せられし一事は如何に君が内地に於けると同じく異國にあつても人々の畏敬と信用とを享けて居られしかを證して餘りあるものと思ひます。

私達は泰西の美風を採り入れられて、益々完成せられたであらうところの君の紳士振りに接するの日を如何に喜びにして居た事か。君が御多忙中にも拘らず

屢々下さつた御便りにて君の奮闘振りを喜びつゝ、乍蔭君の前途を祝福して居りましたのに。こちらの友人達の會合には、きつと君の話が出て、昭和四年七月卅一日に神戸出帆のさいへりあ丸に元氣に張り切つた笑顔を見せて花々しく出發せられた當時を思い出しては、君の事で話に身が入るのが常でした。併し到頭僕等の君に接するの嬉さをよそにして君は逝つて終つた。今更痛惜に堪へない。

併し乍ら、君よ、誠に君の生涯は短きものではあつたが、凡々として徒らに長い生涯を送るとも、達する事を得ぬ教養と人格とを、君はこの短き生涯に於て完成し終られたのである。君の僕等に殘した快いそして強い印象は私達の生くる限り永久に僕等の腦裡に深く刻まれて居ります。

どうか君よ、安らげく瞑せられん事を。

(昭和七年六月)

大岡君の追憶

松 本 勳

大岡尊大人様

明君が逝つて早や四ヶ月にもなつたんですね。

あの時は餘りの不意打でどんなに驚いた事でしょう信ずる事の出来ない事を信じなければならぬから、幾度電話を聞き直し幾度葉書を見直した事か知れません。それでも尙半信半疑でした。その當時の眞白の夏服が黒い冬の服に變つてしまつたんですが過ぎて見ればほんとに早いものですね。

過去四年間の筒臺生活で知り得た友は相當あつたんですが其の中でも氣の合ふ友は餘り多くはありませんでした、更に共に語つて樂しみ喜び合ふ友は極く少數でした。留學して遠く距つて居ても地球の一角に居て呉れると思へば或る心安さを感じ得たのです。それに重々しい扉を突如目の前に締めつけた様にして私等を冷たい寂しい世の中に殘して旅立つたんですから、實は茫然としてしまつ

たのです。

先日は久し振りで貴下にお目に掛つて色々お慰めの言葉を申上げ様と思つてゐたのでしたが却つて新に御悲しみを深めた様なものでした。乍然私は三年昔の丘の生活をなつかしみ乍ら寫眞を見せて戴き又思出話を耳にして心ゆくばかり明君の追憶に耽る事が出来たのを此上もなく感謝して居ます。

日脚短かい冬の日の事とて御宅を御暇する時にはもう、うす聞くなつて須磨の海が異様に黒ずんで足下に擴ろがつて居りました。

歸途上筒井の明君と行きつけの喫茶店にも立寄つて見ましたが明君の英姿に接するよすがもありません、たゞ Scheiden tut weh! の感を深くする許りでした。うつら／＼と夢見心地に明君の追想に浸り乍ら電車に揺られて歸りました。その追憶の糸を辿つて浮み出するまゝ、無秩序に書きつけて見ませう。

明君とは何時から近づきになつたんでしょうか、本二の合併教室で私と隣り合つて俯向いて一心にノートを取つていたのが君だつたんですが、どういふ機會で親しくなつたのか記憶して居ません。唯自然と心が相寄つて離れ難くなつた様に思へるんです。ノートに書かれた君の字はよく試験前に私のバンクだらけ

のノートに寫されたものなんです。君の物事に緻密な町重な性格の一面がよく表はれてゐました。

君の姿の様にスラリとした肉細の字は私には自分の字の様に心安く少しの難澁さも感じないで讀めました。私は自分のノートを二度書く様な心持で君のノートを繰つてバンク埋めをやつたもんでした。私は誰よりも先に借り入れる優先的常習犯だつたのです。

君は一體 theoretical なものよりも practical なものを好んでゐた様でしたし又適してゐた様でした。限りの無い思索の世界に逡巡浮沈して次第に現實世界を遠ざかり行く態度をすてゝ生きた世界を攫んで此を解剖し着々と其の研究を積んで行く風でした。君が神戸在學中經濟地理學に興味を持つてゐたのも確かにそう云つた理由によるんでしよう。此の結果は碩學石橋教授の指導の下に我國の水産立國の基礎付けの論文となつて残つて居るのですが米國にて finance を收め更に轉じて經營學をやつたのも此の理由によるんでしよう。明君が夜遅く迄叩いたタイプライターの活字のうちには定めし掬すべき玉篇もあつた事でしょう。君の趣味は極めて多方面でした。そしてその各々に身を委ねて心から enjoy

すると云つた風でした。study すると云ふより enjoy すると云ふ態度は明君の生活のあらゆる方面に表はれてゐた様でした。

明君は我々仲間でも優れて旅行好みでした。そして私と反對に寫真も好きでした。當時私の寫真嫌は有名なもので君は常に私を評して Photo-hated man だと云つてゐました。

あれは確か卒業する年の夏だつたと思ひますが二人で北海道旅行を企てました。君は圖書館で色んな物を引ばり出して詳細な schedule を作り上げて私に書いて呉れました。君はそういう方面には非常に緻密で計畫的でした。又それだけ旅行すれば必ず得べきものを握つて歸つて來ました。

此の計畫は不幸にして愈々出發といふ前日に至つて私の持病の胃疾患の爲に行けなくなつてしまつて君の期待を叛いたんですが、君獨りで出掛けて行きました。

・ 函館が神戸海岸通りよりも立派だが食物がまづくて悲觀した話、アイヌの娘さんが寫真を撮ると云ふと刺青顔に白粉ふりわけいとも盛装して出て來た話、熊狩の鎮守祭の話等の記事満載の繪葉書が各所から私の病床に集つて暑さに戦ひ乍

ら苦吟してゐる私を頻りに羨ましがらせたものでした。

此の旅行は最初神戸から横濱迄汽船の豫定だつたので一處に海岸通の大阪商船に旅行案内を貰ひに行きました。ドアを排して外へ出ると pucker が人待ち顔にドツシリと控えてゐました。其時君は運轉手臺に顔をつゝ込んでハンドルと私の顔を見比べ乍ら色々説明してゐました——其當時から非常に自動車好きだつた様です——「君の運轉なら螺旋形に動くだらう」なんて負けず口を叩いてゐると背の高い白哲の外人が我々の肩を叩いて乗せてやるから乗れとドアを開けて呉れました。見ず知らずの外人だつたので多少氣味悪かつたのですが相談の結果乗る事にしました。

そこで同じ乗るならエラそうに乗つてやれとばかり私達は自分の車かの様にして東亞ロードを上つて行きました。此のヤンキー型の外人は東亞ホテルの前で二人を下して煙を立て、東の方へ行きましたが其時二人は顔見合はせてとても朗らかに笑つたものでした。

此の自動車熱は亞米利加に行つてから當然高まつたらしいです。便りの端によく自動車の事が書いてありましたし最後には Indiana=Ohio=New York の千二百哩

のドライヴの記事が English で書かれて来ました。歩行するさへ一種の技術を要する日本の道路とは變つて蜿蜒たる平面路を縫ふて走る愉快さはどんなでしたでしょう。運轉手免状も取つたそうですから螺旋形進行ぢやなくなつたんでしようが私は此の手紙を見た時、とう／＼自動車も本式に物になつたんだと安心しました。

君の持つてゐた廣い趣味の中でも君自身にとつて最も attractive なものは恐らく音楽だつたでせう。君自身ピアノを弾いたし丘の生活の終頃にはヴィオリンを稽古して見ようと云ふ氣も多少あつたらしいです。私達はよくお互に悪口を負けず叩いたものですが、ピアノに關する冗談が一番多かつた様です。

「君位ならまあピアノと zwanken しない方だらう」と云つて擲揄ふと「下手糞程酷評を下すもんだよ」なんて應答する風でした。

君の study すると云ふよりも enjoy するといふ態度はピアノに於て最も明瞭でした。斯云ふ態度は恐らく黒い所が少しもなかつた君の性格の反映なんですよ。隨つて好んで奏いたものは bright な Melodical な曲が多くでした。Liszt の良さは君には理解されなかつた様です。Chopin 曲よりも Mozart を Debussy より Schumann

風のを好んでゐました。Pedal に敏感な私を「米搗屋の音楽家」なんて冷かしました。

・此云ふ相異が御互の音楽觀の差異でした。此事は君自身にもよく分つてゐたと見えて音楽に苦しむのを止めて樂しむ氣分になれとよく私に勧めたものでした。

音樂會には二人でよく出掛けて行きました Jacques Thibaud の recital には Tambourin chinois に感激して歸途元町に廻つてレコードを探した事がありました。其時は見當りませんでした但其後はどうなつたでしょうか。

寶塚の音樂協會には夕方から連立つて行きました。最後に一處に聞いたのは例の Tchaikowsky の第六の Passerie でした。Tchaikowsky 獨特の沈鬱さは私等の心を壓して Cui だとか Balakieff だとかの五人の連中の國民樂建設者の比較でない事に無條件に賛成しました。

此の第六交響樂は作者が友人に當てた手紙にもある通り其製作中屢々涙を禁ずる事が出来なかつた相なんです但其れに含まれた悲哀、凄慘、興奮等の各種の感情の閃には全く感歎の外はありません。二人は此の沈鬱の影と消々盡くるなき

水音に胸を冷しつゝ、靜かに川邊に逍遙したものでした。

確か卒業する前年の五月頃だつたと記憶してゐます。Paul Kavalow の Piano recital に行つた事がありました。私は冷淡な彈奏にはやゝ反感を持ちましたが技巧の正確さには流石一流だと感心せざるを得ませんでした。

君は私の隣に席を取つて Liszt の Venezia Napoli Tarantella を頻りに感心して聞いて居ました。冷たい細い線脚が君の胸にぞう喰ひ入るのは多少私にとつて不思議でした。私は最近友人の家で同じ曲を聞きました。が此時の事を思ひ出して深い寂寥を感じました。ずつと後に Sirota の Liszt 曲を聞いた時其熱と織麗な美を持つた演奏に感激の餘りプログラムに數語を書きつけて、亞米利加に送つた事がありました。がそれも此時を思ひ出したからなのでした。

此時も二人同じ様に其の天才的な音響に酔つて優れた音樂を聞いた後憶へる一種の興奮を感じ合つたものです。

黒い淀川畔の朝日會館の建物にもさうした思ひ出が潜んで居ます。此日は連日不開とか云ふ五月の糠雨が朝からしつとりと降り續いて河邊の燈が霧の中の太陽の様に滲むで見えてゐました。

明君の留學直前の六月の或日神戸で君と待ち合せて元町をブラツイた事があります。其時残り少い出發の日迄の準備を色々私に話してゐました。しんみりと話し合つたのは其時が最後でした。

なんでも三宮のパウリスタで茶を喫り乍ら彫刻型の面長の顔を少し傾けて米國への憧憬と離別の淡い哀愁を靜かに語つてゐました。

二人は其處を出て肩を並べて C. の喜びさうな不氣味に大きい夕日を半身に受け乍ら、山手の方へ語りつゝ上つて行きました。

其當時から私の視力が薄らんで來て毎日醫者通に味氣ない日を送つてゐました。

大塚君が大岡君の出發を祝す意味で集まるから是非神戸迄やつて來いと云つて來たんですが、残念だつたが行きませんでした。

間もなく君から病氣を無理しない様に近々大阪迄行くからとの通知を呉れました。私は君の來阪を心待ちに待つてゐたんですが出發前の準備の多忙の爲めなんでしょうが、とうとう大阪で會ふ機會を失つてしまひました。どうも心残りの様な氣がします。

私の眼疾も七月中旬からどうやら一人あるき出来る様になりましたので三十一日には神戸埠頭に横付けになつたサイペリア丸の甲板に立つた君の姿を見送るべく出掛けて行きました。船の間狭な食堂には君の出立を祝ふグループで身動きも出来ない程でした。

悲壯な銅鑼慌だしく降る見送人、やがて船尾のスクリューが物凄い勢で泡を吐くと船は白い長い尾を引いて靜かに然も雄然と動き出す、誰もあの一種壯嚴とも云ふべきシーンに打たれないものはないでしょう。

紅白五色とりぐのテープを握つた君の姿がこうして私達の眼前から消えて行つたのです。海の巨人はゆるやかに一回轉して次第に小さくなつてゆきました。君はハンカチを振つて私等に應じて呉れました。私達は一團となつて消えゆく船を目の痛くなる迄見つめて立ちすくんでゐました。

此日は夏らしくからりと晴れて沖迄遠く見通せる日でした。然しそれも思へば永久に歸らぬ悲しい思出の日になつてしまひました。

私のアルバムに貼られた寫眞の一つに此日の記念の寫眞があります。明君を中心とした我々グループの甲板姿です、確か小島君が撮つたものだと思つてゐ

ます。

この日私は大塚君の肩を借りて歩いてゐました。銅鑼の響に愈々別を告げる時大塚君は「何か握つて歸つて来い」と云つてゐました。君は大きく點頭いてゐた様でした。私は大塚君の後から手を差し延べて「何時もの様にして別れよう」と御互ひに手を握り合つて分れました。

其時私は學成り遂ぐる日の夢を太平洋漂渺の浪に託して今別れ行く君の前途を心から祝福したものでした。

渡米後君は一月に一回位の割で手紙を呉れました。各角度から學生生活を觀察して君らしい緻密な筆で知らして呉れました。そしてどのレターにも十二分に學生生活を enjoy し乍ら一心に勉強してゐる様子があり／＼と見えて居ました。私が君のテニスマンだつた理由で時折アサヒスポーツを送つてやつた返禮として Colledge Humor と云ふ雑誌を送つてくれました。

此は George Bancroft だとか Dolores Costello だとか云ふ映畫俳優の寫眞迄出て來ると云ふ風に、日本の傳統的な教育とは打つて變つた自由さと朝らさに満ちた雑誌でした私は其の自由な雰圍氣の中に思ふ存分研究出来る君を羨ましく思つた

ものでした。

Bachelor of Science の Degree を得た時の手紙だったかに今後の研究の方針の事が書いてありました。

そして商業學研究の第一歩として經營學をやつて見る様な事が書かれてゐました。經營學は其誕生地をアメリカに持つて生れてから日尙淺い學問ですから Marketing の發達した亞米利加で此の研究を積むのは場所を得たものと云はねばなりませんまい。

君が New York University に在る日更に長ければ必ず見るべき研究を收め得た事でしょう。

ミヤコクラブとかでスキ焼をしたが外人仲間で好評だったと云つて來た事もありました。恐らく日本では味へない面白さでしょう。

私が君の歸朝歡迎會に是非精はしく聞きたいと前から思つてゐたのは十二月廿五日のクリスマスなんです。

私等は成程 Dickens なんかの小説によつて爐邊の火明滅せる romantic されたクリスマススを想像してゐるんですが、日本のクリスマスは正月（たゞ改曆と云ふより

外に無意味な）と云ふものに抑へつけられてまことに蠟を喰む様にヒカラビたものなんです。

星の世界の駱駝の模様の入つたクリスマスカードが君から届いた時、どんな風にクリスマススを味つてゐたらうかと思ひました。そして又英語に熱心な君が初めて本當の意味の Dickens を理解し得たらうと思つたのでした。

死ぬ前の六月頃より妙に便りが來なくなりました。何時も學校へ出す report が多くて毎日多忙だと云つて居たので恐らくそうだらうと思つて居たのでした。多病質の私にはよく理解出来るんですが病氣になると何となく大人臭い誇が失くなつて子供の様な感情に歸るものなんです。獨り海外にあつて其の敷布をなほし、其の枕を直し、其頼りなさを助けてくれるべき御兩親の看護もなくて窓邊を訪れる木枯の様に逝つてしまつたのです。「何時もの様にして別れ様」といつて別れたのに、こんな悲惨な離別になつてしまひました。私等は丘の生活によつて堅く結ばれてゐた丈に、更に少しの遠慮もない間柄だつただけに放つべからざるものを奪はれた様な悲哀と寂寥とを感じるのです。そしてどうかすると今にも太平洋の彼方から再び私達のグループに歸つて呉れる様に思つてならないん

です。

郁子の實がまた霜焼の様な赤さと紫色とに變つて來るでしょう。行く水に數畫く如しとか云ひますが、ほんとはかなく日が消え去つて又新たな年が巡つて來ましたが、明君の明眸に接し友情に満ちた聲を耳にする機會は永久に巡つて參りません。

私等は只靜かに合掌して君の冥福を心から祈りませう。

行雲千載空悠悠々

(昭和六年十二月六日夜)

大岡君を憶ふ

大塚 碩 夫

死ねば誰でも惜しまれる。大岡君も色々な意味に於て、殊に家庭的の關係に於て、全く惜しい人に相違ない。けれ共今の私には、さういつた幾分打算的な氣持から離れて、何だか、いぢらしい氣がしてならない。可哀想に、嘸淋しかつたらう。私

は唯さう思ふ。

大岡君は何故死んだ。女々しい、愚かしい感懷である。よく判つてゐる。けれ共私の心の何處かで、かうした聲が聞える。大岡君、何故死んだ。あんなに好い人間だつたのに。私には不思議な氣がする。

大岡君と私との交際は決して永くはなかつた。本科三年になつた時、始めて一緒の組になつて、私の直ぐ前の席から如何にも親しさうに話しかけて呉れたのが始めて、其の後は、來いと云つて呉れるのが嬉しくて、度々遊びに出かけて行つた。けれ共、これ迄でも一番陰鬱な氣分であつたあの頃の私と、人一倍明るくて趣味の廣い大岡君と、別に話の合ひさうな譯は無かつたやうに思ふ。それでも少し遅く行つたりすると、幾分寂しさうな顔附で、「遅かつたね、もつと早く來いよ」と云つて呉れた。あの時の人懐こさうな目ざしを私は今に忘れることが出來ない。

別にこれといふ話もなく、一時間半から時としては二時間もの間、大方レコード許りかけて、何だか濟まない様な氣がしながら歸りかけると、必ず門の所まで送つて出て、「愉快だつた、有難う」と云つて呉れる。私はそれを聞くと安心して何時も歸つたものであつた。

卒業してからも、神戸に出て来る度毎に、會社に小島と私とを訪ねて来て、渡米の計畫が着々具體化して行く様を話して呉れた。一緒に午飯を食つて、三人で居留地をぶらついてゐると、色々な話が出る。「インディアナには日本人がゐないから行くんだ」と大層氣の強いことを云ふかと思ふと「日曜には女の子を誘つて教會に行かねばならないつて、本當か、おい」と眞面目に心配してゐたこともあつた。何も恐れない、けれ共物事を馬鹿にすることを知らない、善良な大岡君であつた。入學許可狀、寫眞、バスポート、船のスケヂュールと、持つて来て見せる物も次第に時日の切迫を示して、七月の末遂に神戸を出帆した時、私は大岡君にあれ程知人の多いことを始めて知つた。輝かしい眞夏の陽の下に、家族の方々始め、多くの先生方友人達から投げるテープを持ち切れない程の束にして、幾分上氣しながら愉快さうに笑つて立つて行く君を、私も心から喜んで送つたのに、今では却つて淋しい思ひ出になつた。

向ふに行つてからも、屢々手紙を寄越して、彼地での生活を巨細に知らせて呉れてゐた。それが昭和六年の五月頃から暫く途絶えたのを、皆訝りながらも、若しや歸つて来るのではなからうかと思つた豫想が、突然の訃報に裏切られた時、友人の

誰もが暫くは本當にしなかつた。「おい本當か」と問ふ言葉の中に、私は「嘘であつて呉れ」といふ果敢ない希望の調子を聞いた。それを私は片端しから「本當だ」と證言して歩かねばならなかつた。

昭和五年二月十三日附で呉れた通信の中に、

「……去る一月半の事でした。『父病氣直に歸國せよ。』の電報を受けたのは、一時は全く途方にくれましたが幸經過良好のため歸國は見合す事になりました。試験前ではあり、こんな辛い思をしたのは生れてはじめて。然し先日、電報では殆ど回復したさうで、やつと安神した次第です。最初歸國の準備並にプログラムをたてゝゐたのを實行する様になつてゐたら明日（二月十四日）横濱に到着するでせう。何だか思ひだす度に氣が變になつていけません。後略」

又三月廿八日附の手紙の中に、

「父も御蔭であの大病が案外早く治り、此の頃では全く元の元氣を回復した由、大いに喜んでゐる次第です。痔の出血とは判明したものゝ肺炎の経過が氣になり、あの當時を思ひ出す毎にゾットする。實際あんな苦しみは生れて初めてだつた。」

と書いてゐる。親思ひの彼だった。異國の空の寂しい死の床に在つても、自分の自重の不足から死ぬことを御両親に相濟まぬと、幾度も繰返しながら死んで逝つたさうだ。

好い人は早く死ぬといふ。私には何だかそれが本當のやうに思はれる。豊かな家庭で不自由なく育つても、聊かの放縱さも、我儘もなく。唯明朗に、圓滿に、北九州の人間らしい利かぬ氣はあつても、自由な振舞ひの中に決して無理な我意を通すことをしなかつた大岡君。新聞の連載小説を見て、こんな醜い人情の世界もあるのかと云つて驚いてゐた、人を疑ふことを知らなかつた大岡君。私はもつと生かして置き度かつた。もつと人生の幸福を味はして見度かつた。

家庭的な關係に於て、性格に於て、教養に於て、志向の自由さに於て、富に於て、總ての環境に恵まれながら、而も年若くして異境に淋しく病み淋しく逝つた友の生涯は、その最後が餘りにも思ひがけないものであつただけに、私には何だか美しい悲劇のやうに思はれる。そして又私自身に取つては見果てない夢から急に醒めた後のやうな氣持がする。さうした氣持の、ほろ苦い後味を噛みしめつゝ、そして何處かの隅に隙間の出來たやうな自分の心を見詰めながら、取り止めもない繰言を

書いたのが此の文である。

(昭和七年六月)

中學時代の明君

湯 淺 恂 一

その昔六稜の星章を戴いて毎日元氣一ぱいに遊び戯れた頃のあの紅顔の少年竹馬の友、明君も終には空しく幽明界を異にするに至つた。北野中學より神戸高商へ、大岡君と僕とは偶然にも、否寧ろ偶然と云はんよりは全く奇しき因縁の羈を以て縛られたかの如く、その境遇を同うし、前後九ヶ年間かゞやかしい青春時代に於て學びの庭を同じうしたのである。竹馬の友であり、莫逆の友であつた。

中學時代より以來すべての點に於て二人は良き意味の競争相手であつた。勉強に於ても互に勵み合つた。負けず嫌な君はこれは自分に不得手だと思ふと全く一心不亂徹底的に勉強したものらしい。僕の方でも負けてはゐない、之に對抗して出来るだけ勉強する。お互にこの調子で進んで行つた。

學科の中では數學が最も明君の得意なものだった。これは万事に几帳面な性質の然らしめた處だと思ふ。

一方語學の方では數學程の得意さは最初無かつた様に思はれた。然し例の負けず嫌な君の勉強によつて忽に級中一二を争ふ上達振りを示した。之は全く君の徹底した勉強に依るものと思はれる。爾來高商時代に於てもこの努力は繼續され全くすばらしい語學の天才となりきつたのである。

よく二人でテニスをやつた。その頃明君の家にテニスコートがあつたので學校から歸るとすぐ鞆をほつぱり出してテニスをやつたものである。尤も僕は到底明君の敵ではなかつた。當時から硬球をやつてゐた明君はよく親切にコーチをやつて呉れた。何でも構はず思ひ切つて力まかせにと云ふコーチだが、軟球の様には硬球は飛んで呉れない。忽に隣家の庭と云はず、屋根と云はず球は四散し大岡君も僕もボール拾ひにへトくになつて家路につくのが例であつた。

海が近かつたので海水浴も盛にやつた。一夏殆んど一日も缺かさず海に通つたこともある。雨降には仕方なし傘をさして海岸に出てあちこちと海草を採集しては家で標本に作つたりして無聊を慰めた。

明君の提言で登校前の一、二時間を自轉車で芦屋の天神さんのお社まで往復したこともある。尤も之は約半月ばかり繼續した様に記憶してゐる。

明君のたくましい右腕は全くテニスのためで左右比較してその差異に驚ろいた程である。高商時代の友人間にはスポーツマンとしての君は餘り知られてゐないかも知れないが全く隠れたるスポーツマンであつた。

いつぞやの故人を偲ぶ友人の集ひにも同君の健談が話題となつた程同君の健談は我々友人間に有名な逸話として残つてゐる。中學時代より同君は常に胃擴張を訴へてゐた。

全く君は體軀こそさして堂々たる程ではなかつたにせよ、健康そのものであつたと云へる。

最近交遊こそ疎遠ではあつたが、二人がどこかで落ち合へば必ず互の胸襟を開いて語り合ふ程のむつまじい友情であつた。

相共に業を卒へて社會の第一歩を踏み出すや、君は更に螢雪の功を積まんが爲海外遊學の途に上つたのである。雄々しくも異郷に遊學の途君を東京に迎へて健康を祝し、その行を盛にしたのも今は空しき嘆きの種となつてしまつた。

在りし日の同君の健康を思ひ出して書き綴るにつけ堪へ難き悲みを感じずには居られない。

君の華々しく歸朝の曉こそ、互に更に／＼深き友情を以て相共に扶け合ひつゝ、その昔語り合ひし前途の光明に向つて進まんとせしも今はよしなき悔の言葉にならうとは。

地下の靈よ、翼くは永久に變らぬ友情を以て一脈魂と魂とを貫き賜はんことを

(昭和七年六月)

大岡君を追憶して

八幡市 芳村 佐助

大岡君の逝去！實に晴天の霹靂であつた。

いきなり大きな鐵棒で思ひきり頭を殴られた様に呆然なす所を知らなかつた。

「間違ひだ、そんなことがあるものか」是が第一に口を衝いて出た言葉である。

「何だつてそんな馬鹿々々しいことがあるものか。」憤怒に似た氣持で強く／＼

否定した。

然しふと氷の様なものが冷くすゝつと全身を馳け廻つて、何かしら恐しい不安が身を襲つた。と急に臉が熱くなつた、それはやがて居ても立つても居られない激しい不安に身を包まれ乍ら猶虚報なれかしと只管神佛に祈る弱い／＼心に變つて行くのであつた。

あゝ然し今は唯果敢くも在天の聖靈の冥福を涙と共に祈り續けるのみである。故大岡君の事を思ひ乍ら何か一小文を記さうとするとあれやこれやと餘りにも多くの事柄が走馬燈の様に腦裡に繰繰げられ、何から初めてよいか解らない内に終に涙が先に立つてしまつて筆をとる事が出来なくなつてしまふのである。

又假令如何程思慮を練つたとて故人の崇高なる人格宏汎なる趣味溢るゝ如き純情は到底記し得るものではない。而も猶敢て作つた此拙文がせめて玉に傷つけるの弊丈なりとも免れ得たならば實に望外の幸であり又其丈で私から故人に對してなし得る何よりの供養となるものであると思ふ。

天氣のよい暖い日には休講の時を見計つて「ノート」と「シート」を片脇に、二人でよく散歩したものであつた。

關西學院の上を東に行き「カナデアンスクール」の裏門に添つた道や神商の運動場に添つた道、又は關學のプールと言はれた小さな池の畔等、大袈裟に言へば二人の足跡を印したとでも言へる所であつた。其して落つく所は背後に摩耶六甲の連山を負ひ前は神戸港を俯瞰し得る青谷の堤や其前の廣い空地であつた。斯ういふ時には大岡君の豊富なる話題は次から次へと盡きる事なく續いたものであつた。

ふとした折に私が少し「ヴァイオリン」を練習してゐる事を話したら、ピアノと合奏したいから是非一度遊びに来る様にと言はれた。偶然にもどちらも好きなき曲は「ドボルジャック」の「インディアラメント」であつた。大岡君の話は何時しか此名曲に落ちて行つたのである。

例の様にポツリ／＼とゆつくり語り出される口調に次第に熱が籠つて來て、あのきりつと締つた濃く太い眉毛の下で黒く澄み切つた瞳は次第に夢見る如く口調さへ或ひは訴へる如く或ひは憾むが如く、何時の間にやら相手の私迄が知らず／＼の裡に其夢の中に浸り込んでしまふのであつた。

次第に滅亡の悲運を辿りつゝある亡國の民「インディアン」が軟かい月光に

包まれ酒に酔ひ痴れ躍り狂ひ乍ら、猶其苦しみを忘れ得ない悲痛なる心境等がまざ／＼と眼前に彷彿し、息苦しい迄に強く／＼胸をつき歸途猶胸の塞がる思ひで黙々として阪を下つたのである。

其れから數日の後當時芦屋に在つた大岡君の家に遊びに行つてピアノを聞き實に感嘆の聲を禁じ得なかつたのである。

大岡君は單に樂譜を見て「キイ」を打たれるのではない。其ピアノを通じて此の夢を見續けられるのである。單に編曲者の心境を現はされるのみでない。進一歩！此メロディーを通じて自身を此夢の中に入つて居られるのである。

其が假令數百年前の出來事であらうと將又萬里を離れた異境の人情風俗であらうといやしくも一編曲として現はされた以上其は少くとも演奏中の大岡君に取つてはまさ／＼と眼前に展開される明かな夢であるのだ。

否！自分自身も一箇のプレイヤーとして共に喜び共に悲しみ共に躍つてゐられる露堂々たる一大現實であるのである。

藝術は不滅である、而も是等不朽の名曲は大岡君の様な偉大な藝術家に依りて人の魂に觸れ其洗禮を受けつゝ益々顯現せられ乍ら後世に傳へられるのであら

う。

又二人でよく将棋を戦はせたものである。然しどうしても私が劣つてゐた一枚落して貰つても平盤でやるのと同様僅かな所で負かされたものである。ちり／＼と根氣よく押寄せて來られる所殊に大切な一手になつてちつと考へ込まれる時恰も全盤を呑込まれる様な觀のする覇氣満々たる所常々温厚なるに似ず大なる壓迫感さへ受けたものである。

其後度々遊びにいつたが或天氣のよい日庭園に出た事がある。そして邸内にテニスコートがあつたのを見て早速試合を初めた。

私は元來スポーツは餘り上手な方ではないが唯一藝として此テニスだけは好きであつた。中學校三年生の時から筒臺生活中の楽しい思ひ出としても友人とゲームを闘はしたものである。其れなのに矢張り遙かに及ばなかつた。

今迄室内の人と思つて居た大岡君に「スポーツマン」としての血の流れてるのを驚異の眼を以て見敬服して引下つたのであつた。

殊に勉學に於ては斷然光つて居られたと言ふ丈が蛇足である。

大岡君が洋行の話をされたのは學年試験終了の日であつた。例の空地の所で

手頃の石に腰かけて試験を濟ませた疲れと氣安さとに、ぼんやりして足下の枯草を靴先で弄び乍ら取止めのない話をしてゐたのであつた。

僕ひよつとしたら洋行するかも知れないのだがね、と突然改まつた口振に吃驚して「洋行？ 外國へ行くのか」「うん若しかしたら、いや多分行くだらう」と其から米國遊學のプランを話し出された。

時代は日進月歩である。雄々しく生れた昭和の新日本が新人を要求して止まぬ時、凡ゆる點において畏敬して止まぬ我が大岡君が洋行されるのは實に萬人の等しく慶賀する所である。私は此の壯舉を羨ましく思ふと同時に心底より喜び成功を祈つたのである。然し行先が日本人の少い地方だと聞いた時何だか胸がひやりとした。尤も日本人の間に伍してゐては語學に於ては勿論其他研究上日本化されて充分所期の効果を擧げる事が出來ないとの事を聞いて成程とは思つたが然し不安と危惧とは猶去らなかつた。「君！ 大丈夫かと」問返した時「なにつ、一生懸命にやつて見るよ」とあの濃いきりつとした眉毛をきつとあげられた時、凜と澄み切つた瞳が射る様にきらりと輝いた。

所信に向つて邁進するや威武屈する能はず、富貴濫する能はざる底の不屈不撓

の大信念と萬難來るもひるむ事なき不退轉の大勇猛心とが打つて一丸となり一抹の精氣となつて眉宇の間にすーつと流れてゐつた時、私の身體はびりつと電氣を感じた様に緊張したのである。

卒業式の翌日私は吉野丸に乗込み愈々歸郷の旅路に就いたのである。一人デツキの「らんかん」にもたれて大勢の送迎の人々を眺めてゐると、何だか淋しさが胸に迫つて來ると後から「やアー」と言ふ聲と同時にボンと肩を叩いた人があるはつと思つて見ると其れこそ懐しい大岡君ではないか。

船の時刻等は誰にも知らせなかつたのに。餘程急がれたと見えて額には汗さへにちんでゐた。「前から來て随分探してゐたよ」と言つて差出されたのはネクタイと「ドリゴ」の「セレナーデ」の樂譜とであつた、私は涙ぐましい感激を以て熱い此の友情を迎へたのであつた。

在學四年間殊に物に感じ易い青春時代を過した、此の神戸の土地は嬉しいにつけ悲しいにつけ思ひ出の種として私の生涯に於ける恐らく最も華かな一頁となり追憶の繪巻物の中に繰擡げられる事であらう。而も此の大岡君の厚き情愛は此繪巻物に一入燦然たる光輝を添へるものとして將來此時代を想起する度

毎に益々深く愈々明かに浮び出る事であらう。

次第に細り行く思ひ出深き神戸埠頭に立たる、懐しき大岡君へ手許に残つたテープを高く差上げて別離の語を叫んだ時、其昔遊學の爲故郷を後にした時の哀感に倍した切ない愛惜の情が胸に迫つて來たのであつた。

其れから私は九州に歸り御多分に洩れず就職に奔走してゐた時突然手紙で八幡を通過するとの通知があつた。早速驛まで行つて無理に下車して頂き二人で近くの小山に登り濛々たる煙を見下し乍ら神商歌を歌つたり麓で買った果物に舌鼓を打つたりした。米國行が確定したとの事も此時聞いたが前に感じた様な不安も危惧も起らず安心して見送れる心地がしたのである。

それから大岡君が持つて見えた寫眞機で互に撮影し合つた。其時僕のネクタイがゆがんで居るとゐつて結んで下さつた。當時未だ結び方を知らぬ僕がでたら目にやつてゐたのである。

其の様子が丁度子供が母親から着物を着せて貰う様な恰好であつた。所が、このお母さんも未だ充分手に入つてゐないらしく途中まで來ると是は可笑しいぞと言はぬ許りに首をひねつて自分のを解いては結び直し此に倣つて又やり直す

といふ具合で終に首を「アーン」と前につき出し續けた此のやんちや子供の方が遂にしびれを切らしてしまつたのである。

今でも時々此處に登つて當時をしのぶ時微笑を禁じ得ないと同時に、もう二度と逢ふ事の出来ない亡き親友の面影がはつきりと思ひ浮べられ愛慕の情がひし／＼と胸に迫り終に堪まらなくなつて何時しか涙が溢れるのである。

其時わざ／＼神戸から持つて來て頂いた大岡君の寫眞は今猶机の上に飾つて朝夕祭つてゐるし、當時寫したお互の寫眞は後で送つて頂いたのである。

午後二時の汽車で八幡を立たれた。「御機嫌様」「左様なら」を繰返し乍らハンカチを振り合つた二人が神ならぬ身にどうして此が最後の別れにならうと想像し得たらう。斯んな事になるのだつたら、せめて一こん／＼み交してゐたものを返す／＼も残念な事をした。

洋行後の大岡君とは度々通信した。元來僕は友達との通信は大抵葉書で済ませたのであつたが、大岡君には不思議に材料が多くて却々盡きず十數頁に涉つたのも珍らしくなかつた。楽しいにつけて失敗したにつけ先づ浮び出るのは大岡君の懐しき温容である。俗間所謂「思ひ出す様ぢや思ひが薄い」の通り思ひ出

さうにも眞實忘れる時がなかつたのである。そして常に筆無精の私が一度書き出すと次から次へと數日に涉り、此間又起つた事が附加へ度くなつて却々完結しなかつたのである。又大岡君からも度々頂いた英文のもの等友達と協議して讀んだのもあつた。

洋行後の大岡君は高商在學中折に觸れ時に當り示された圓滿なる人格天賦の才能の片鱗を遺憾なく發揮せられたかの觀がある。

即ち二十三歳を以て、インデアナ大學を卒業し、二十四歳を以てニューヨーク大學の卒業試験を濟ませ、残るところは「マスター、オブ、ビジネスアドミニストレーター」の學位獲得の爲め論文起稿の仕事のみであつた。

又大岡君は在學中より社交方面にも相當活躍され日米學生交歡會を有志と圖りて發起し研學の餘暇を有利に利用されたと云ふことである。

大岡君は平素から凡て物事に對し熱心で規帳面で嚴格であつたが在米中も同様で、留守宅は勿論友人知人等にも勉めて通信を怠らず其往復は一目瞭然と日記に記載しありしと云ふ。又日誌は渡米後一日として之を廢することなく日々の坐臥行動及び所感を詳細に記入し金錢出納の如きも一仙の微に至るまで詳細に

收支の記入を怠らざりしと聞くに至つて益々同君の人格をたゞへざるを得ない。抑々大岡君と私と知合になつたのは本科三年生の時であつた。其は私が病氣で二ケ年遅れた爲で而もほんとに交際をしたのは六月頃から翌年三月迄の短日月であつた。それに私に無くてはならぬ人に思はれたのは「ゼミナル」が共に商業地理であり、趣味が同じであつた事にも依つたであらうが其にも増して大なる原因は大岡君が温き愛情と何物をも包容し得る大きな性格の持主であつた事である。是は單に私一人のみではない。恐らく凡て大岡君を知る人が一樣に感ずる事であらう。

人生僅か五十年といふ此の短き人生の半ばにさへ満たずに大岡君は眠るが如く従容として逝かれた。桐一葉落ちて天下の秋を知る悲痛なる淋しさである。

親友大岡明君を偲ぶ

松 本 寅 一

故大岡明君と私が相識りましたのは今から丁度二年半ほど前昭和五年秋の暮の事でした。當時紐育の日本人會の主催で、私達紐育日本人留學生の招待會が催れました。參會する者約百五十名餘異郷の空での赤毛布の愉快な話や故國の懐しい憶ひ出話に花が咲いて和やかな空氣が爆發する笑聲に快く打震へてゐました。やがて隱藝といふことになつて種々の愉快な珍藝が飛び出し、座はいやが上にも益々賑合つて來ました。そこで武骨者で藝なしの私も思はずつり出されて、長崎は肥前ノ國の産と名乗り、故國に在りました當時の素朴な學生氣質に返つて、かの頼山陽が吾が南國の大自然を稱讚した次の詩を吟じたものです。

雲耶山耶吳耶越

水天髣髴青一髮

萬里泊船天草灘

煙橫蓬窓陽漸沒

瞥見大魚躍波間

大舶當船明似月

ところが之を吟じ終るや否や、一人の貴公子然たる年若き學生が、さも懐しそうに私のもとに走り寄つて来て感慨深げに斯ふ申します。「私も兄と同郷の士大岡明と言ふ者ですが只今兄の詩吟を聞きつゝ、嘗て別府に行く時又島原から熊本へ船で天草灘を渡つた當時の情景を想ひ出して言ひ知れぬ壯大な氣分に打たれました。此の詩はあの天草灘を實によく詠つてある全く感激に堪へない。」とて堅く私の手を握り「矢張り何處に在つても九州男兒は溢るゝが如き意氣と熱とに燃えてゐる。」と感動的に語りました。やがて彼は紙片に自分の住所を「紐育川岸五百番國際會館第三〇八番宅大岡明」と鉛筆にて走書して他日を約して別れて行きましたが、實にこれか後日私の無二の親友としての寢食を共にした大岡明君その人でした。この招待會があつて數日後、私はふと當夜の大岡君を憶ひ出して國際會館の彼の宅を訪れてみました。ノックをしたら應じ扉が開いて、數日前の大岡君が飛出して来て大變喜んで迎へて呉れました、四個ほどの熟し切つたオレンヂを新聞紙にのせて私にすゝめ、自分もバクリ乍ら懐しい長崎の思ひ出話しなどをやつたものです。長崎と言へば私達にとつて何となく懐しくもあり、又心強くも感じて、私と彼との交りはまだ大して深くはありませんでした、二、三ヶ月

の中には二人の間には最早十年の知己よりも親しい深い友情が湧いてゐたのでした、たとへ數十年の交友をなしてゐても相互の心と心がある一致を見出さない限りは、眞の親友となることは困難ですが、私達二人は僅か二、三ヶ月にして、心の結合に依つてそこに親友愛の眞理を見出しました。以來私達の交友は益々深くなつて行きました。或時は彼の室に宿り、同じベットに寢を共にしながら、將來の計劃や抱負について語り會ひ、彼は實業界に私は政治界に大いに雄飛せんと堅く誓ひ合つたものです。或時私は腹痛のために二日ばかり床についてゐました。折柄電話のベルが鳴るので、腹を押へて電話口に出て見ると、明かに大岡君の聲で、「困るじやないか君、今君が倒れたら俺は一體どうすればいゝんだ！」と切りに鼓舞して呉れました。その彼が反對に私を残して早く他界せられたのを考へますと、全く感慨無量です！

大岡君はかねてから日米親善の爲め日本學生會を創ることを企んでゐました。その努力は遂に報ひられて、昭和六年一月十四日、最初彼と知り合つた因縁深い紐育日本俱樂部に於て、紐育日米學生會の發會式を擧げる事になりました。純な學生を通じてこそ始めて日米親善の實を擧げることが出来る、時代は今や若者の手

に移らんとしてゐる國民外交の秋である、純真なる學生こそこの國民外交の全權大使であらねばならぬ、といふので大岡君は自ら米人學生側を奔走あつせんしてよく彼等を取持ち、そのスマートな接待振りには彼等米人學生間に非常なる好感を與へました。

會は日米兩國の國歌に始まつて種々兩國音樂の交換等をなし、和氣暖々たる中に、夜の十二時頃この盛大なる會を閉じました。續いて三月に第二回日米學生會を開催し、更に第三回を経て第四回目は米國學生側の招待するところとなりました。會を重ねる毎にメンバーも増加し、愈々我が日米學生會の意義を發揚し會は益々盛大に赴きつゝありました。この事は實に全く純情なる大岡君の偉大なる努力の賜物であつたのであります。

昭和六年四月に大岡君は自動車を購入し、夏の休暇を利用してアメリカ大陸自動者旅行を劃てました。見ればそれは單に自己の享樂の爲のみでなく、一はインヂャナ大學時代の恩師並に親友に會はんが爲めと、又それを機會にアメリカ各地の主なる大學を見學し、尙機會があれば出来るだけ各集會に於て講演し、日米親善の一助たらしめやうといふ宏大な抱負を考へて居つたのであります。愈々六月

初旬私達は紐育を出發しました。旅行の模様は別項の旅行記を御覽願ふことにして只、こゝには大岡君の人格を物語る旅行中の二つのエピソードを語り度いと思ひます。

既に一、二ヶ所の田舎町を訪問して親善の交歡をなし、私達は更に車を進めてオハイオ州のシンシナター市に向ひつゝありました。

最初私達紐育出發當時一人の外人がシンシナター市まで合乗りし度いと言ふので快く承諾して同市までその外人を同乗せしめました。

愈々同市に着いたので彼をそこに下車しこゝまでに消費したガソリン代を三人分擔とし其の三分したものを一つを彼の外人より受けとり（これは始め合乗りする時の外人提案の約束だつたのです）また後日を約して別れました。

かくして約五哩餘も運轉した頃でせうか、大岡君は突然私に「さつきの三人分擔の割當は計算を間違へて、彼の外人から二十五仙餘分に取過ぎてゐる」と言ふのです。「さうか、しかし何れ後日彼氏には逢ふ事があるだらう、其の時にしたらどうか」と私は相談しましたが、彼は頑として聞き入れず、「俺はたとへ一錢でも取つてよくない金は取りたくない、否一時間も持つてゐたくない、氣持が悪いんだ」

と言ふので、私達は早速引返へして行つて彼の外人に會ひ、先刻計算違をして二十五仙餘計に貰つてゐた事情を説明して返濟しました。外人もこの大岡君の純情な美しい心に打たれて感激に堪へぬ面持ちでした。

更にまた歸途ニユーヨーク洲ポートジョウ町に着いた頃、自動車に故障を生じたので、近くで修繕を頼みました。其の修繕費十弗と言ふので、大岡君は丁度小金の持合せがなく五十弗紙幣を出しました。處其の修繕職工は「今は釣銭がないので貴方が紐育に御歸りになつた後、小さくなつてから送つて下さいと私達の氏名住所もひかへず申しました。大岡君はこの職工の言葉に非常に感動し、「一労働者にして斯くも旅行者を大膽にも信用する、吾等は少なくとも相當の教育を享けた者であるに拘らず、まだ完全に人を信用することは出来ない。全く慚愧に堪へない」とて歸紐後早速十弗支拂ふところを十二弗程送つたのであります。

これら二つの旅行中のエピソードは一見些事の如くにして、實は彼大岡明君が如何に聖き神の如き美しくしき心の持主であつたかを雄辨に物語つてゐると思ひます。實際彼の姓名にも現れてゐるやうに、大岡山に光り輝いてゐる明月のやうに清らかな涼しい心の持主でした。

私達は二千五百哩の長距離自動車旅行も愈々明日を以て終りを告げる、明日は愈々紐育に歸着するといふ時、大岡君は私に「この旅行の終りを飾る爲めに、あの得意の頼山陽の詩を吟じて呉れ」と申しました。そこで私は歡んで求めに應じ聲高らかに吟じたものです。

すると「今度は俺が一つ立派な杜甫の詩を教へるから、これを一つ吟じて呉れ玉へ」とて紙片に書いて呉れましたのは、

春望

杜甫

國破山河在 城春草木深

感時花濺淚 恨別鳥驚心

烽火連三月 家書抵萬金

白頭搔更短 渾欲不勝簪

私は自動車の中でこれをまた高々と吟じました。大岡君はこの時何とも言へぬ深い感慨に打たれたる様子で謹聴してゐました。今から考へますと、この時のこの詩は彼が私にそれとなく與へた惜別の言葉のやうに感じられて涙をそゝられずには居られません。

私達は思ひ出多い愉快なる永の自動車旅行を終へて愈々紐育に歸り、ロングアイランドにて大岡君と別れ夫々の宿に歸ることになりました。時は丁度黄昏時でありました、今迄一緒に楽しく旅行をして來た爲めか、彼がニュージャーシのオーシャンシティーに向つて一人で歸つて行くことは、何となく淋しい相に見えましたが、思ひなしか別れを惜しんだ風情が彼の眼光に表れてゐたやうです。

それから一週間ばかりの中に二三回大岡君から通信がありました。中には寂寥を感じるといふやうなことも書かれてありましたので、私は返事に「淋しい時には洋々たるあの頼山陽の詩を吟せよ、詩を吟する間は何とも言ひ知れぬ愉快な気分になるものだ、そうして吾々は意氣を鼓舞しなければならぬ。お互に異郷の地に在つては健康こそ唯一の武器である、何物をか摺むまで邁進しなければならぬ吾人にあつて、尙更健康と意氣と熱とが必要である」といふやうな事を書き送りました。其れから二日して病氣危篤の至急電報に接して愕然としました。取るものも取り敢へず大急ぎで馳けつきましたが、途中どうか何かの間違ひであつて呉れ、ばい、と神に祈りつゝ、若し本當であつたならばと考へては言ひ知れぬ不安に驅られて居ても立つても居られぬ氣持でした。やつと夜半の二時頃大岡

君が入院してゐる町に着きましたが、夜中なのでどうすることも出来ません。全くいら／＼した氣持ちで夜の明けるのを待ちました、翌朝やつとの思ひで病院に訪ねる時は何時となし足の重みを感じるのです。大岡君は病室のベットに靜かに横はり、眼には多量の涙さへ浮べて居りました。

「この位の病氣が何だ、氣を落すやうな意氣地のないことでは駄目だぞ、それ君の兼ての意氣と熱とを以て徹底的に病魔と戦へ。病魔を征服するんだ。それが今の君の爲すべき總ての責務だ、病は氣なりといふ、一切は氣力だ。」と私は彼を元氣づける爲め、一段と聲に力を入れて語りました。大岡君は軽く頭を動かして感謝の情を表はしてゐました。

時は丁度眞夏のこと、て焼付くやうな暑熱が、健康な私にも激しく感ぜられるので、彼の病態が如何に苦痛なるか、想像せられて、全く氣の毒に堪へませんでした。何とかして、安穩に養生出来るやう、ひたすら彼の心を慰め、また旺盛なる氣力を養ふやう、勸告しましたが、それでも足りないやうな氣がして總ては祈りだと思ひ毎夜専心神々に祈り續けました。十日ばかり看護してゐる中に病狀幾分良好となり、この分なれば大丈夫だと醫者も言ふので、諸般の都合もあつて一時私は紐

育に歸ることにして同地に居る學友荻原喜作氏に萬一病勢重くなるやうな場合は大至急報を打電して呉れるやう頼みました。歸紐後毎日彼の病氣を氣にし乍ら心配して居りましたが、四五日経つても別に變つた様子がないので、これでは病氣も順調に快復しつゝあるのに違ひないと幾らか胸をなで下しました。ところが計らず六日目に病重しとの至急報に接し殆んど色を失はんばかりに驚いて飛行場に駆けつけましたが、嗚呼！同地行の飛行機は丁度飛去つた後でしたので更に自動車を停車場に驅つて將に發車せんとする汽車に飛乗りました。汽車は出来るだけの速力で走つてゐるでせうけれ共、まるでムカゼが匍つてゐるやうにのろくさく思はれてなりませんでした。

やつと向ふの町に着いて病院のある町に駆けつけた時は太陽も既に没した頃でしたが先づ宿より出て來た友人荻原喜作氏の悄沈せる面を見てハツとして思はず叫びました。「容態はどうか？」……「君遅かつた！」「えッ!!」私は事の意外に思はず手に持つたスーツケースを取落し、そこに茫然自失してしまひました。

嗚呼余は三十歳にして始めて眞の友を見出したと思つたのに斯くもはかなく別れてしまふとは何と言ふ不幸であらう。私は今までこの大地に力強く立つて

ゐたのは大岡君と二人して立つてゐたからだ、今私は其の一方の支柱を失つてぐらくぐと眩暈を感せずには居られなかつた。前途が眞闇になつた感じがしました。

頼山陽の詩によつて結ばれ、杜甫の詩によつて別れて行く、私達の運命は或は餘りに詩的であるかも知れないが、詩的であることによつて告別の歎を幾らも慰さめることは出来ない。それでもまた告別式の當日靜かに眠れる彼大岡君の靈前に進んだ時私は思はず彼の杜甫の詩を吟せずには居られませんでした。

國破山河在 城春草木深

感時花濺淚 恨別鳥驚心

心の中に靜かに吟じて行りましたが、嗚呼如何せん、永の眠りに落ちてゐる彼からは、「あゝよかつた、もお一度やつて呉れ」と言ふ聲も聞かれず、只友人知人達から贈られた花束に香の煙の靜かにたなびいてゐるだけでした。

顧みれば大岡君は日米親善の爲めに各大學を訪問し、實に二千五百哩に餘る大講演旅行の結果、歸紐後僅か一週間餘にして、惡むべき病魔に襲れるところとなり遂に彼の最後の奮闘も空しく昇天してしまつたのであります。斯くの如く彼は

死を堵して日米親善の爲めに闘つた。世の中にはよく自己の爲したる行爲をば世間に吹聴する者がありますが彼はたとひそれが悪くないことであつても、かゝる賣名的宣傳は斷然排して潔しとしなかつたので、只ひそかに人知れず兩國の爲めに生命を堵して居られたことを、或は生前の彼の氣持ちに反すかも知れませんが、私はこゝに明かに廣言したいと思ひます。

彼は更にまた負けず嫌ひの熱血兒でありました。昭和四年九月インデヤナ大學に入學し、昭和五年六月拔群の成績を以て同大學を卒業し、この間僅か十ヶ月にしてバチエラー、オブ、サイエンスの學位を得、白人學生を驚かしました、同年九月には更に紐育大學の大學院に入學し、これまた翌年五月、大學院で最も困難とされる大學院卒業の口頭試験に最優等の成績を以て及第され美事「マスター、オブ、ビジネス、アドミニストレーション」の學位を受ける資格を獲得せられたのであります。只この時不幸にして病魔に襲はれ卒業論文を残して他界せられたのは誠に遺憾の極みであります。

斯くの如く彼は幾多の米國學生の間に伍してペンを以て戦ひ、我が日本人留學生の爲めに萬丈の氣焰を吐いて居りました。彼の意氣と熱と才氣とは等しく米

國學生の驚異とするところでありまして、彼の死を聞かれた紐育大學院長テラー博士も非常に其の死を悼み、幾多の米國學生を凌げる彼の英才と人格とを惜しましました。そして同大學院長テラー博士によつて特に卒業論文を提出せずとも、大學院の卒業試験に最優等の成績で合格し且つ論文の Outline 提出済の故を以て同大學に於る「マスター、オブ、ビジネス、アドミニストレーション」の學位を特に追贈することを本年四月同大學教授會に於て満場異議なく決議したのであります。これを以てみましても彼が如何に他の數多の學生に秀でゝゝあたかゝ窺はれると思ひます。

而も彼は單なる秀才ではない、彼は又九州男子特有の意氣と熱との持主であつたればこそ僅か一ヶ年半の間に二つもの大學を卒業され、そのみならず一方に於ては日米親善の爲めに意義深き日米學生會をも組織されたのであります。實に彼は偉大なる精力の持主であつたとも言はねばなりません。

私は斯くの如く敬服すべき大岡君を失つて未だ歌はずして死する多くのミルトンや、未だ現れずして逝く多くの若きカーライルがあることに想到して、全く底知れぬ深い感慨に打たれずには居られません。

彼と私との間には二にして一なる將來の雄大なる計畫が企圖されてゐましたが、彼は私を只獨り取殘して他界してしまつた。私は全く前途の目的が暗い幕に包まれたやうな、目的の尖端が切斷せられた様な思ひがしました。

然し私は彼の生前の意氣と熱とを享け繼いで殘された仕事の彼の部分迄も大いに活動しなければならぬと深く覺悟して居ります。

嗚呼！ 一切は夢のやうです。昨年日米學生會に活躍された當時の大岡君のあの活氣に充ちた晴やかな面影や、朗らかに談笑せられたあの音聲が、今猶眼につき耳に残つて、眼前に彷彿たるものがあります。何故夢ではないかと不思議に思はれることも幾度あるか知れません。嗚呼！ しかし遂に彼の潑刺たる現實の姿は見えない。呼べど歸らぬ永遠の旅に、彼は旅立つてしまつてゐる。

俊敏なる大岡君！ 君は常に優秀なる成績を以て彼地諸大學の首班を占め、品性に於ても學問に於ても、更に又運動社交に於ても常に吾等の指導者であり、模範的人格者であつた。やがては一世を卒ひるやうな大人物となつて御兩親の名を現はし、故國の名譽を高め、永く後世に其の大事業を傳へやうという堅い鐵石心の下に、着々實現への過程を辿りつゝあつたのに、一朝計らずも病の犯すところとな

り、偉大なる抱負を持つたまゝ、御兩親の膝下を去り、御弟妹を後にし、君を唯一の頼りとしてゐた親友を残して覺めぬ永遠トッの眠りについてしまつた。一切は涙である。

盡きせぬ涙である！ 「大岡君、大岡君！」と僕は一つの仕事する毎に何時も君の名を呼び續けるであらう！

あきらめの岸によせんとあせれども

よせてはかへす我が思ひかな

この度故大岡明君の追悼集を御編輯なさるに當りまして感慨そぞろに禁ずる事が出来ず詩によつて結ばれ詩によつて別れを告げた不思議な縁を思ひ、生前の故人の片鱗を寫して草場の蔭に靜かに眠つて居られる親友明君の英靈に謹んで此拙なき一文を捧げます。(昭和七年五月記)

明君との紐育生活

學友 八 幡 昇

皆様の内には明君が紐育御滞在中宿泊された國際會館が如何なるものであつたかは既に御承知でありませう。

同館の定例に火曜日のお茶受けと云ふものがありました。夜の九時から十時半迄です。此のお給仕には同宿の白い娘さん達が二三十人交代に勤めて居りました。毛色は變つても異性であることに違はないのですから我々日本男兒も欣喜して出席すべきでありました。併し當時の日本人は勉強家ばかりで常連として出席する者はほんに數える丈でした。

此の夜當館には珍しい小柄ではあるが高雅な一日本青年を見受ました。之がお茶をついで渡す娘さん達と談笑する有様はなか／＼鮮なものでした。私は此時迄に同館に住んで三年目まるで日本人を代表すると自任して居た者が此の強敵出現には全く壓迫を感せずには居られません。之が今から思ふと明君であつたの

です。強敵云々はたはむれと致しこれまで孤影悄然邊りに氣を配らねばならなかつた身には何よりの援軍です。それで直ぐ近付きになりました。

當夜はそこに居合はせた誰彼に引合せました。其中にベルシャの友達も居ました。彼は明君に「友あり君も亦東より來る樂しからずや」こんなことを申しました。今それがどんな英語であつたか思ひ出せません。それから彼は傍に居た妹や妹の友達にも紹介して居りました。それから私は明君に君は近頃見えた様だがその英語は日本の何處で稽古されたかと尋ねましたら明君はインデヤナの大學を卒業して來たとの返事でしたから成程と頷いたことです。當夜は附近に毛色の變つた友達も居たことで自分等ばかり勝手な話も出來ませんので、専ら英語を使ひました。併し以後何時の間にか兩名は日本語を話さない約束を致しました。

それから數日して學校が始まりました。私は金融を専攻して居りましたが附隨課目として經營學をやらねばならぬ命令を受けました。而も二課目修めねばならぬとのことで大に悲觀して居りました。一體私は横着物で研究室でコック／＼圖面を引くなどは餘り好まないのです。それに其内一課目は夕方五時半から七時半までと云ふのですから直更面白くありません。

併し命令ですから止むを得ません、新學期の初日此の時間に出席して見ると明君も来て居るのです、而も此の時明君の話では經營學ばかり四課目を取つて居るとの話でした、道理で以後宿舍の部屋に餘り見受けませんでした。思ふに明君は研究室で講義の大半を整理されて居たことでありませう。

其翌朝八時から九時までは新進ボーゲン教授の經濟學史でしたが此の教室でも亦明君を發見致しました。幸に之等二教室には兩名以外に同邦學生が居なくて何よりでした。

と申しますのは先程申しました様に兩名の間に日本語を使はないと云ふ契約が出来て居たからです、而も此の罰則として日本語を話した場合には互に支那料理をおごると云ふことでした。

これはなか／＼の重荷なのでして、一人の場合は四、五十仙で濟む食事も日本語を話した場合には二人分でも支那料理ですから正に二日分の生活費です、油斷はならない。兩名の教室に聞かれて恥しい日本人が居なかつたことは幸でした。

此の同盟は後に商大出の藤井君が加はつて三角同盟になつたが、藤井君とは支那料理の制裁はなかつた様に思ひます。

或時惡友の内に兩名の密約を知る者があり、こいつが二人の居る前で突然明君に日本語を話しかけて困らせました、後で明君は彼の惡戯を知つて頭をかきました、而し之は例外にしようとして再三固辭しましたが義理難い明君は到々支那料理の義務を履行しました、今思ふと胸がつかえるのです。

それから間もなく明君は自動車を買ひました。皆様よ、明君が自動車を買ったからと云つて攻めてはいけません、自動車には種類があつて上は何萬圓から下は古で二、三十圓のものもあります。明君のはシボレーの箱型でしたから二、三十圓ではありますまいが何れ松本君一派が推薦したものでせうから或は思つたより安く買えたのかも知れませぬ。

明君の説明に依ると夏休暇はあれで米國中を旅行し歸りは何處かで賣拂つて來ると云ふことでした、詰りガソリン代丈あれば旅行出来る譯で汽車より遙かに安くつく、更に利益はこれのみに止まらず明君は自動車内に寝起し食事は野原の草をもやして作ると云ふのですから結局五本の指さえあれば旅行出来ること云ふことになります、明君の經營學が理論的である如く自動車も亦理論的でした。

只理論と並行しなかつたのはあの中のエンジン丈でした、あれがなか／＼云ふ

ことを聞かず其度に玄關近くに居た筆者が呼び出されたものです、會館は丁度坂の中程にありましたから皆で其自動車を坂の上まで押上るのです。そこで方向轉換をし今度は反對に坂下に向けて手を離すのです、こうしますと車は徐々下降し途中からエンジンは活動を始めることになるのです、併したまには一度で成功せず二、三回此の坂を押し上下することもありました。

明君と前後して富士資本家も自動車を買ひました、之も矢張り押す方の口でしたが車庫の都合とかで郊外に越し危い處で勞務奉仕を避れました、私も二臺の車を毎日押して居ては體が續きません。

それから色々のロマンスがあります、之を一切略して、却説私も歸國の時期が迫りました、本年五月初め明君に此の事を漏らすと先生しきりに止るのです。夏休を何處かで一處に勤め其金で歐洲を廻らう、仕事は松本君に頼んでやるからと云ふことでした、併し私は滯米四年に於いて歸心矢の如くです、それに糧食が盡きました、萬事窮すです。

そこで心惜くも東西一時離れることになりました、思えばあれが永劫の別れでした、若し明君の忠告を入れて何處かに止まつて居たら何か盡し得たこととせう

返す／＼も終生の恨事です。

而も明君は去り行く此の不實者に心からの別宴を張つて呉れました、場所は紐育の郊外バンコートランド公園、會する者は松本氏以下五名です。問題の自動車も此の日は雑作なく動いて晴着の服を汚さずに済みました。

目的地に着くと各自明君のサンドウキツチを握つて林間を逍遙し思ひのまゝ半日を過しました、馳てこれも飽いて再度自動車に歸り林間を出て暫くハドソンの河岸を下りました、後轉じて東に屈れ山手の紐大校庭に車を乗り入れました。

此の日は五月と雖もはだ吹く風は薄ら寒かつたのです、が校庭の櫻は將に満開で坐ろに故國の春を思はせました、此處で圖書館を背影に明君と二人同じカメラに入りました。

併し此の寫眞が出来る頃私は既に南の國ルイジヤナを経て加洲に向つて居りました。

明君に就て申述べることは甚だ多いのですが紙面も無限には許されて居りません、又私の拙筆では到底よく寫し得る處でありませんが此の邊りで一先擱筆致しませう。

最後に一筆残し置き度いことは明君の紐育大學に於ける成績拔群であつたこととです。これは數多い邦人學生中稀であつたと思ひます、此の成績表は確かに遺留品中にあること、思ひますから私の言葉が虚言でない證據に是非本集に載せて頂き度い、尙非凡の才は學業のみに止まらず明君は音樂をよくし詩文を草すること到底筆者等凡庸の追従し得る處でありませんでした。

何時の頃であつたか次の如き和歌を見せられた様に記憶します、周圍に左様な風流者ありとも思えませんが明君の作に相違ありますまい、異國の情味ゆたかな歌ではあります。

日の當るサイドウォークを毬ひとつ

ころがり來るも我の行手に

まろび行く毬見やりつゝ高窓に

頬赤き娘獨り笑ひゐる

x

明君よ、君が歸國の時は新家庭を持つて大に御馳走すると云つた、新家庭は持つが君はもう好きな支那料理も喰べては呉れまい。

今宵は徹宵此の駄文を作る、文は駄文でも到底支那料理どころの比ではない、明君よ靈あらば來りて受けよ。(昭和六年十一月卅日)

學友明君を憶ふ

米國紐育市リヴァサイド・ドライブ五百番地
インターナショナルハウス六百三號室

大村文治

最初に大岡兄の知遇を得ましたのは一昨年秋の初方だと心得てゐます。まだハドソンの河邊には毎夜夕涼の人々の多かつた一夕國際館で挨拶する機會を得た非常に靜かな勉強家らしい青年が故學兄でありました。

中西部の大學から市内ニューヨークユニバーシティの商科に來て、マスターのウアークをするのだとのことでした。私自身はロンピヤ大學大學院の政治科にゐますので専門が異なりますのと、一週に數日私は新聞社の編輯室に立籠らなけ

ればならない境遇にありますので、同じ家に住んでゐ乍ら餘り屢々談笑する機會を持ちかねました。専門的の意見の交換とでも申しますか、につきましては、日本の金輪解禁について故學兄から種々と細密な説明——理論上及び實際上の——を御聞きし、一度共產主義研究中の友人と行懸り上『米國に於ける資本主義文明は第三期に到達し急速に崩壊の段階にある』との題にて否定に立つて討論しました後本問題について愚見を申し上げた記憶があります。其他の故兄とのコンタクトは主に一口に申しますと、極軽い社交的のものでありました。期日等の意識が明瞭でありませんが一度綺麗な米國人の若い婦人を紹介され、確か故兄が中西部大學生活時代の御友人だと聞いた様です、其婦人は紐育市見物に出られたものゝ如な印象をうけました。若し暑中休暇を紐育市で暮すことになりましたら、ゴルフの御伴をしたいものですがなどと話されたことも耳に残つてゐます。

御勉強中御活動なされた社交方面のことや其他のことに關しては前にも申し上げまする如な關係から餘り存じ上げてゐません。學年末に近づいて多少御健康を害されてゐるかの如に御見受けしました時保健のことについて立ち話しました、それから間もなく、追々學年度も近付いてるが幾分か健康にも障りそうだし

マスターの論文だけは暑中休暇後完成する段取にした云々と話された言葉をお聞きしましたのが、私との暑中休暇前の終りのコンヴァーセッションで、『中西部に自動車旅行をしてゐました。明日はアトランチックシティに友人と納涼地へ出掛けます、又休暇後には紐育へ戻りますが、このインターナショナルハウスに宿泊することになるかは申上げ兼ますが、お逢ひする機會は勿論あると思ひます』ハウスの東口のクラ、モント街上の焼けつく思ひのする歩道で握手しましたのが暑中休暇の日も大分経てゐた頃で、不幸にして、故兄の元氣な姿を見、希望に満ちた親しみのある態度に接しました最後の機會として數へなければならぬことになりました。

又數週間を経ました休暇中の一日夕方新聞社からインターナショナルハウスにかへりますと、確か岡村學兄だつたと存じます。野村證券の藤井兄から大岡氏がアトランチックシティで入院せられた由の電話があつたとのことで御見舞の電報とか手紙とか二三で協議しました末紐育市メトロポリタン美術館東洋部に審査員として勤められ、當ハウスに同棲してゐます石澤正雄氏と私と二人が次の日曜日御見舞に出掛けることになりました。休暇中ではありましたが、岡村、石澤

兩兄以外には日本人の宿泊者で故兄を知つてゐる友人は居合せなかつたと思ひます。

是又時日を失念しましたが——私共がお目にかゝりまして其次の日曜が來ない中に亡られた報に接しました——石澤兄とアトランチック、シテイに参りますと、十數哩隔てた閑靜な町の——勿論海邊ですが——病院に御靜養中だとのことで教へられるまゝに田舎電車の便で病院所在地に参りまして、其處此處と二三ヶ所尋ねる中に病院を見付けました——同封します一葉のスナップは、故大岡學兄の御發病から最後まで保養されました病院の正面海岸に面した方で、當日撮りましたものです。故兄の病室は中央で二階の裏側の極々靜かな部室でした。

受付から看護婦に案内されて病室に参りましてスヤ／＼眠られてゐるかと思つてゐると、大分衰へた風で直に話しかけられました。様々の雜談の中に病院が閑靜でよいことや日本綿花の方々が非常に親切にして下さるので萬事心置きなく保養出来ることなどを語られました、涼しくなつて新學期の始る頃までには御元氣になられることは受合ひでせう、お互に又一勉強させよう。と病院を退るときにいさめましたつもりの私共の言葉には御返事を聞き得ませんでした。

石澤氏と歸途の汽車中で普通避暑客の影が此の天下一の納涼地から薄らいで行く頃までに大岡學兄が退院される運になれば幸だが、と談り合ひました。

數日後ペンステーション近くの新聞社の編輯室で御永眠の電話を受取りました。

ブロードウェイの葬儀社からロングアイランド火葬場へのお伴を以て故大岡明學兄と私との一年に満ちません友交は有形上の一頁をクロスしなければならぬことになりましたが、私の記憶の中の在米中の學友としては……いろいろの派手な形容詞を連ねます程華かな米國生活をなされたかは存じませんが、私の知りました故兄の米國學生活は充實した——内的にも外的にも——ものであり、故學兄を知る者の印象の中に「立派な學生」として存在されることを確信します。

學友故大岡明君を偲ぶ

東京市小石川女子商科學院にて

萩原喜作

私が故大岡明君と知合になつたのは紐育大學の商業哲學の教室であつた。其の後數科目を一緒に學び、彼の秀才振りには日本人間は勿論米人までも驚嘆させた程で、殊にコーネル教授の經營學の如きは最高點の成績にて私達日本人として彼を持つた事を一つのプライウドと感じた。彼は非常な日米親善家であつた、彼の骨折りで、私達數人のものが日米學生會を組織して、日本俱樂部又は其の他二、三ヶ所に會合を見東西の趣味を融合した、親しいパーティーは今更思ひ出の一つとなつて居る。夏季休暇を利用して何處へか實地見學に行き度いと彼の希望に依り、私と共にオーション、シュテーの日本人商店に元氣よく勤めて居つた。二週間程の後不幸病床の人となり、サンマス、ポイントの病院に約一ヶ月間入院療養に勉めたが遂に藥石其の効なく他界をされた事は、將來あるうら若き彼の心事を察し、私の片

腕をもぎ取られた悲しみ、遠き故國の兩親の心情を御察した時悲しみは込み揚げ此の一週忌の接近に際し一層追憶の意を深ふする次第である。秀才にして將來を囑望された彼の他界は單なる私的損失でなく、社會的損失大なるものと思ふ。彼は又非常に親に孝行心厚く、入院中も常に兩親に心配を懸ける事を何より心痛して居られた。そんな點より何事も自分で處理して行くと云ふ固い決心は最後迄強く動いて居つた事は事實であつた。健實にして温厚なる美點多き彼の友情に結ばれた幾多の友人の内、松本寅一君、ケネデー君、インタール、ナショナル會館を代表して、大村文治君等の病中來訪せられた事は、特に喜ばれた様であつた。又橋爪さん御夫婦、日本綿花紐育支店の方々、好國さん御夫婦等の御厚情なる心盡しに對しては本人は勿論友人としての私も少からず感激して居つた。

私は故大岡明君が病床の人となつてより臨終迄及ばずながら御世話をさせて戴いた關係上當時の模様を簡單に書いて一週忌追憶文集の一頁を故人の靈に供へたいと思ふ。丁度海岸に於てさへ随分暑い七月十日の朝突然彼が卒倒したのに驚き、當市で名醫のドクター、ヘーンズ氏の診断の後、直ちにサンマス、ポイント病院に入院したのであつた。サンマス、ポイントは當オーション市より入海を距て

凡そ三哩、静寂なる海邊にして風光明媚、裏は丘と言ふ程の丘にあらざれども樹木に富み、前は大西洋に通ずる入海を距て、オーション市を眺め、左は遙かにアトランティック、シュテイ、右は長蛇の如き棧橋を水面に流してケープメイに通ずると云ふ處、周圍は廣く二階建の大きい白い建物、誰が見ても病院と氣付くであらう。西洋の庭の特長である、直線美と云ふか、男性美と云ふか、綺麗な芝生の中に整然と草花が植へてある、其の真中を定木で切つた様にコンクリートの門が真直ぐ病院の入口に通ずる、兩側の芝生の中に幾つかの墳墓器は上空に圓形を描いて朝夕散水をして居る、獨り芝草のみでなく入院中の人々も甦る事と感じた。綺麗な玄關を恐るゝ入ると看護婦が丁寧な微笑を浮べて挨拶をする、今日は如何ですかと尋ねて、今日は少しよい様です、今日は體温が高い様です、今日は氣分がよいとか悪い様です、と毎日卒直に答へて呉れる看護婦の言葉を氣にしながら病室の前に立つて室内を覗くと、或る時は全く静かに、或る時は囁言の様に静かに看護婦と話して居り、そふかと思ふと聲高々に取り留めもない事をペラ／＼看護婦に話し掛けて居ると言ふ様に其の變化は激しかった、丈、戶外に於て様子を覗つた丈で電光石化の如く私の頭へ閃いた。静かにハンドルに手を懸けて病室に這入つ

て行くと、オー萩原君よく來て呉れた、と言ふ彼の聲はさも嬉し相に、而して疲れた顔一ぱいに笑を浮べて握手を求めに差出す手は何時も震へて居つた。其の歸途二日に一べん位はドクター、ヘーンズ氏の宅に立寄つて容體を伺つて居つたのであるが彼は決して私を悲觀させなかつた、時期の問題で徐々に必ず快復すると云ふ樂觀説である。二十日程後も病體思はしくないので、紐育日本綿花支店の岡田氏が巖本ドクター同伴にて急行し、診斷を受けた處に依れば決して樂觀を許さない、と云ふ、巖本ドクターの説に吾々は大に驚いた。日本綿花會社の方とも打合せて各方面への通知とか、萬端遺漏なき様協議すると同時に、毎日彼の快復を神に祈つた。が不幸にして體温は益々嵩じ、華氏百二度から百五度半位を上下して居る。そんな時病院へ行く際は何時もあまり感じない、ポード、オークを焼付ける、炎天にもフラ／＼する。オーション市よりサンマス、ポイントに通ずる、入海を貫く電車は實に風光明媚で、長蛇の如き棧橋はケープメイに通じ、浮世の苦を外に天佑を氣どる人等の釣舟は三々五々、涼風窓に吹き入つて心地よきを常とすれど、今の私の物思ふ身にはそんな事は私の五感に通じない、百五度を越えてベットの上面にもだへる彼の姿を思ひ浮べて、ぼんやり窓際に寄りかゝつて居るのであつた。

八月六日の朝病院へ駈付けた時彼の體温は急に低下して殆んど平温に近かつたが、なほも取り留めもない事を口走つて居る様子の唯ならぬに驚き遺言でもと夫れとなく最後の希望を聞き糺したが『俺は未だ大丈夫だよ、其の内考へて置くよ』と云ふ様な事を洩して間もなく意識を失ひ物言ふ力さへなくなつてしまつた。其の時は日本綿花の方も來て居り、共に悲壯の悲しみの内に只々神にすがる計りであつた。度々の醫者の注射も効なく憐れ二十四歳を一期として同日午後五時半永き眠りに就いた。

彼れの無念や推し測られて暗涙に咽ぶ外は無かつた、彼が温厚にして健實なる學友として、私の片腕を失つたと言ふ私事のみならず、公人として將來を囑望されて居つた若き學徒、吾々日本人としてブラウドを感じて居つた彼の秀才、今更彼の他界を惜むの情切々禁する能はざるを覺ゆ、爰に此拙文を綴り聊か當時を偲ぶの一端に供し敬しく故人の英靈を弔ふ次第である。(七、五、五)

學友故大岡明君を偲ぶ

東京市小石川女子商科學院にて

鈴木 定吉

急激なる氣候の變化？生活狀態の變化からか、又は外國の苦學生活に疲れたものか知りませんが、私は七月九日淺間丸で歸國早々健康を害しまして昨夏は小田原の知人の家で不活潑なる生活を過してしまひました。

『九月の十二日晚夏の陽も箱根山にかくれ、少し氣分も良いので暫らく振りに海岸でも散歩しようと、小さい古い門をくゞつて三步あゆみ始めました。急に夕方の郵便箱に心を惹かれて再び引き返して見ますと、長い間米國で見慣れてゐたルーズベルトのスタンプに私の直感に動かされ其差出人を能く見ると、自分が在米中の親友大村君からの手紙早速開封して見ると、大岡君が八月六日アトランティック市にて、亡くなられたと云ふ、同君の大岡君に對する實に真情の籠つた歎きの手紙でありました。あまりの驚きに啞然とした私は其手紙を手にした儘力の無

い足で小暗き自分の一室の机の前に黙座し、亡き學友が在米時代の其の生活を想起し、私の聯想は聯想を重ね、自分の若き昔憶れたあの高山樗牛の謂つた、『人間は在る人さへ忘するゝものを亡き人を忘するゝは人の常である、眞に忘れる事の出來ないのは僅かに二、三の肉身の者のみである』と言ふ言葉まで延ばされ、そしてこの樗牛の言葉を疑ひ、遂に此の言葉は信じられない、信じてはならない、否、信じては學友に濟まない、自分は永遠に亡き學友のあの高潔なる人格の持主である事とあの偉大なる智識の持主であつた事は忘れないであらうと深く自分の心に強められた。そして亡き學友を慕ふと同時に外國の地に於て長男を喪はれた御兩親の心持ちを自分のその如くに考へた。

思へば君を初めて知つたのは自分がコロンビヤ大學に遊ぶ時、紐育大學のコーネル博士を慕ひて夜間の講義を聴く爲に紐育大學のワシントンスクォアの校舎の六階のマネーデメントセミナリーの室であつた。而も自分はコロンビヤ大學の方の講義の都合で二三週間後れてこのクラスに出たその最初の晩であつた。向つて正面の椅子に、中肉中脊で色の白い顔に、ロイド眼鏡をかけて眼光人を射る底の一日日本人を見出した。

クラス後外國生活をする日本人としての一條の挨拶をして、それが大岡明君なることを始めて知つた。其の後お互のメージュアコースが同じであつた爲か、コーネル博士のマネーデメントの原論のクラスに、又クロバ博士の原價計算の講義に、その他オフイスマネーデメントに、タイムスタデイのクラス等と同じクラスで顔を會はせてゐた。やがてお互はお互をよく知り合ふ様になり遂にはお互の室をも毎晩の様に訪ね合ひ、或る時は二時三時まで議論に花を咲かせ、或る時は紐育の百二十五丁目の爺さんの店に支那飯を食ひ、又或る時は靜かに日本に在る家庭の話なども語り合ひ共に將來の問題にまで立入つた事も幾度かあつた。

君の人格者であり、頭腦の明晰であつた事は君を知つた人の間に餘りに好く知れ過ぎてゐるので今自分は多くを語らないが、年長の自分は君に教へられた所が随分多かつた。君がコーネル博士に提出した勞銀制度の論文は同博士の非常に賞讃を得、日本人である君をあつたクラスで第一位の席においた事は現存される博士が一番よく君の頭腦を知つておられる筈である。君が紐大卒業の時優等の成績であつた事は決して偶然の事ではない。然るに謙遜であり好學の士である君は、自分が歸國する時に、『大岡君君も僕と一緒に歸國したら、どうか』と、大に勧め

だが、君は、自分の如き貧弱なる勉強ではまだ自信がないから國の兩親の許しを得て、何としても今年だけは在米研學を続け度いと云つて譲らなかつた。そして最後の別れの日にインターナショナル、ハウスのあのアウトサイドの階段で、それでは『大岡君、僕は歸國するよ、今後一年間を壯健で、來年横濱の埠頭でお互は元氣の顔で會はうではないか』と堅い／＼握手を交へて別れたあの時の希望に満ち／＼た君の笑顔を自分は永遠に忘れる事が出来ない。何うして忘れる事が出来るようか？

(七、五、八)

明君を偲ぶ

千葉縣佐原町にて

藤 森 豊 和

私の明君と知り合ひになりましたのは、松本寅一君を通じて、紐育インターナショナル、ハウスに於てとあります。知遇僅かに一ケ年位であつたかも知れませ

んが唯今でも百年の知人を失つた如き感があります。非常に温厚な且つ熱情に充ちた聰明な同君を失つたことは私共の仲間同志としても又、日本國としても甚だしき損失であつたのであります。

誠に賢き者は短命であるのか知れませんが、同君の事業は永遠に消へ去ることには無いと信じます。そして又同君が發起者である日米相互の學生クラブも途中にして終つたことは殊に残念であります。氏の事業は今尙俱樂部のメンバー一人々々に覺へられて居ります。そして之れは必ず實を結ぶ時が来ることを信じます。ハーター、アンダーソン、及びインディアナ州立大學の諸先生の間に未だ語り傳へられて居ります。インディアナと云へば小生も、ゲンタツキーに居つた關係上同君のことを能く聞いて居りました。青葉の美しいインディアナの大學を訪ねることは氏の希望であつたようですが、あの遠い道をドライブすることは非常に疲れる旅でありますので紐育にて一所にドライブして居るときも、御注意申上げて居つたのですが、知らないうちに旅立つたと云ふことを電話で知つて驚いた次第です。その外ヴァンコートランド公園と云ふ紐育郊外の遊園地其他へ、ピクニックに行つたり、バドソンの岸を遠く遊んだことなどが思ひ出されます。

日米學生會は多く日本人俱樂部に行はれましたが種々な歌のうち「この道」と云ふ歌を非常になつかしがつて居られましたが一緒に、ピアノを弾きながら練習したり、劇「地藏」をやつて白人共を笑はせるなど皆夢の様であり又昨日の様であります。

斯る有爲に充ちた快活男子を、而かも紐育大學を好成績で出られた明君を失はれたことを、もう一度回想すると同時に數々のことを申上げて諦らめ得ざる明君の英靈を慰めたく存じます。(七、五、十五)

明君の思出

在米國オベリン大學

福 島 敬 三

當米國に參りまして以來明君には都合二回御目にかゝつて居ります、一回目は一昨年の暮小生が明君を紐育に御訪ねし、丸五日御厄介になり、二回目は明君がオ

ベリンへ來られ二日間行動を共に致しました。神戸高商在學中は明君は小生より一年上級だったので同君とは御交際する機會を得ませんでした、只一回明君の日本出發前愛隣會館に於て相知り、互に留學の意志あることを披瀝し合つたのです。其後時折スミス教授より明君の御噂を承つて居りましたが、翌年夏愈々小生の希望も具體化し、明君の跡を追つて當地に參りましたときは同君は既にインディアナ大學を卒業更に紐育大學で御勉學中でした。其頃から漸く明君と交通を始めましたが、同年の暮クリスマス休暇を利用して愈々明君を紐育に御訪ねすることにしました。

小生が紐育に到着致したのは丁度クリスマスの前日だったと記憶して居ります、當日明君は態々グラントセントラル停車場まで迎へて下さり、同君の宿所インターナショナルハウスに御案内下さいました。そこで明君の御斡旋で小生も五日間同所に宿泊することを得その間、明君は小生の爲めに市内の有名な建築物、公園、自由の女神像等色々御案内下さいました、當時は未だ今日のエムバイアス、テートビルが完成して居ない頃で、クライスラービルが世界最高の摩天閣として誇つて居たときでしたが、我々は其クライスラーの頂上にある展望臺から暮れ行

く紐育市を一望の中に見下しながら大に氣焰を上げたり又感傷的なことを云ひ合つたりして、二時間程過しました。青白く光つて流れて居るホドソン河とイースト河の間に、夜のマンハッタンは益々其明るさを増し、ブロードウェイからの眩きばかりの街燈が無数の「ネオンサイン」が赤青白、あらゆる色どりを見せて狂ひ廻つて居るのを我々はじつと凝視して居ました。

又自由の女神像では内部に螺旋狀の狭い梯子段があつて丁度額の所まで上れるやうになつてゐるのですが餘りに窮屈な梯子段なので明君は「自由の女神だと云ふが餘り自由でもないね」と頗る意味深長な冗談を云はれたことを記憶して居ます。

當時は明君は非常に元氣でした、一日小生が少し頭痛がすると云ふと「餘り君を引張り廻し過ぎたかな」と云つて笑つて居られた程でした、兎に角紐育では明君の御蔭で小生も何不自由なく市内を見物することが出来、オペリンへ歸る際は心から同君に感謝したことでした、其時明君は次の夏日本へ歸る途中オペリンへ立寄ることを約されました。オペリンへ歸つて間もなく小生は盲腸炎をやり手術の結果が思はしくなかつたので退院してからも教室へは餘り出ず、一週五時間

のクレヂットでその學期を過しました。かくて六月半より暑中休暇となり夏期大學までにはまだ間があるので稍々退屈して居た矢先、コロンバスから發した明君の電報を受取り同君がオペリンへ來られることを知りました、かくて其日の午後明君は其友人松本君と二人で、スマートなセダンをドライブして當地に着かれました、そこで我々は再會を祝し大に語り合ひました。聞けば兩君は紐育から米國南部諸州をドライブして廻り、明君の母校インディアナ大學を訪ねての歸途當地オペリンに立寄られたのだそう、米國には今一ヶ年間御滞在とのことでした、その日は三人でキャンパスの草の上に寝轉んで話したり、近郊を散歩したりして過ごしました。明君は依然紐育で御目にかゝつたときと何の變りもなく元氣潑潑に見受けられましたが長時間ドライブしたので相當疲れたと云つて居られました、その夜兩君は自動車旅行者のためのトゥリスト、ルームに一泊されましたが翌朝早くクリーヴランドの知己の方に會ひに行かれると云ふので小生も一緒に明君の自動車に乗せて貰ひ、クリーヴランドまで御供しました。午前中はその御知合ひの人の家で過ごし午後同家を辭してユークリッド、ビーチ、パークに参りました、此公園はエリー湖に面した水浴場で、丁度紐育のユニアイランドを小さくし

たやうなものです。中には種々の娯樂場があり、日曜などは雑踏で身動きもならぬ處です、我々は茲でローリング、コースター（猛烈な勢で起伏した軌道を走る櫓）に乗つて子供の様にはしやいだり、又堤防の上に腰を下して湖上を傳つて來る涼風に身を曝しつゝ談笑したりして愉快な半日を過ごしました、西の空を眞紅に染めた夕陽が、エリー湖上に沈む頃、明君達は愈々紐育に向けドライブを續けることになり小生は此處にて兩君に別れ單獨にてオベリンへ歸ることになりました、公園の入口で「ぢやあ又逢はう、元氣にやり給へ」と互に勵まし合ひ固き握手を交して別れたのですが之れが我々の最後の別れにならうとは誰れが想像し得ませうか、それ程に明君は元氣でした、健康體でした、明君の夕陽に照らされた明るい微笑が未だに小生の眼に残つて居ます。

小生に映じた明君の印象としては先づ頭腦明晰、理智の人と云ふ言葉が浮びます、その言語動作が要を得て判然として居ました。自動車の操縦振りも實に巧く常に細心な注意を拂ひつゝ、而かも敏捷に市中の雑踏中を自由自在に操縦して居られました。

クリーヴランドで元氣な明君と別れて以來不幸にして同君の消息を知ること

が出来なかつた故か同君の亡くなられたことが全く嘘のやうに思はれてなりません、或は長途のドライブによる疲労と猛烈なる暑氣とが御病氣の原因ではなかつたかと今更御氣の毒に存じます。

神戸高商時代から俊才と仰がれて居た明君を我々在米日本學生から失ふことは返すくも残念に存じます、御家族皆々様の御心中無かしと御察申上ます。

然し乍ら考へまするに子弟を外國にやると云ふことは一つの冒險であることは確かです、而してやるからには土地人情風俗習慣の相違による危険は十分覺悟の上と存じます、此危険を冒して米國に雄飛し僅か一年でバチエラーの學位を得、二年目には紐育大學の大学院で専攻された明君の成績優秀は日米學生間は元より、學校當局者から充分に認められて居ること、御座いますから、人事を盡して天命を待つた明君も以て瞑するに足ると存じます。（六、九、十二）

大岡明氏を偲ぶ

在紐育 岡 田 直 廉

今は亡き大岡明氏、少壯有爲の才を抱いて、空しく大西洋岸の一寒村、ソーマスポイントのアトランチック、シヨア、ホスピタルにて不歸の客となられた同氏の靈も今は故山に歸られ、御両親並びに多くの御弟妹の御手厚き御回向の内に平和な眠に就いて居らるゝ事であらう。凡ては歸らぬ過去。だが同氏の病床に最後迄、微力の能ふ限りを盡して來た私としては、氏の不幸を以て世に謂ふ人生無常の一夢と諦め去るには餘りに深い數々の印象が胸裡に刻まれて居る。私としては殊更痛惜を新にする様な當時の追憶には觸れたくないのであるが、異郷に於ける突然の御不幸のため御臨終にも逢はれず、永別の御言葉さへ親しくお聞きになる事の出來なかつた御両親、御家族並びに御知友の方々に致て當時を物語る事は私に負はされた悲しき義務でもあり又私自身よりの氏の靈に捧げる手向草ともならうかと思ふので茲に私が最後の御見舞した時の事に就て記す事にした。

昭和六年八月二日、電話を以て病院に明氏の容態を尋ねた所、昨夜患部をX光線で寫し取つた爲か體温も昇り徹宵苦しまれたとの話であつたので翌朝一番の汽車で御見舞に行く事とした。

八月三日、朝病床を訪れた時には熱も下り、左程に衰弱の様子も見えず私の見舞を大變に喜んで言葉少くはあるが四方山の話がされた程だつたから私も幾分安心したのであつた。丁度家内が携へて來た米にてお粥を炊ぎ、日本食を調理して進めた所喜んで食を攝られた、食後數時間熟睡されたが午後に至り體温昇り時々胸に手をあてゝ苦しみを訴へられるのを見て、私は主治醫一人では心許なく感じたので、紐育より巖本醫師及び一流の専門醫ドクター、スミスを招聘する事にした、兩氏共明朝一番の飛行便にて往診される事になつた。

八月四日、昨夜は當地宿泊の事として病院退出、折柄避暑中のバンストライテン夫妻を訪問し座談の内に明氏の病狀を語つた所、非常に同情し滋養物に關する色々の注意等細々とせられてゐた。で同氏の勧めにより病院に命じて濃い鳥のスープを作らせ、今朝の食事に進めた。容態は外見昨夜よりは良好に思はれたが私の心は依然重苦しい憂に沈んでゐる。明氏も之を察せられてか突然私に向つて

聞かれた。

「岡田さん、私は危篤の状態なのですか」と。
私は暗然としたが

「明君、それは中々の大病には相違ないが大丈夫癒ると醫者が断言してゐるから安心して下さい。只貴君に望む所は落膽の爲自身で病氣を悪くしてしまふ様な事のないやうに、唯その一事だけです。」

力めて平然と斯く言つたものゝ萬一を慮つて極く遠廻しに私は言つた。

「其れはさておき、今日御父上に貴君の容態を知らせやうと思つてゐるのですがその序に何か御傳へする事は有りませんか」

「何もありません、只色々心配をかけて濟まぬと一言付け加へて下さい。」
そうして靜かに目を閉ぢられた。暫くしてからであつた。

「岡田さん、私に最近の世界經濟状態を話してくれませんか」

私は此の突然の質問を受けて、尠からず意外の感を抱いた。何故ならば私は當時迄純理の研究に熱心なる若き學徒としての明氏を知るのみで、後にも述べやうと思ふ様な財界の動きにも多大の興味を持つてゐられた實際家としての氏の一面

を少しも知らなかつたから。折柄世間はフーパー大統領の戦債モラトリアムで一時的ブームに煽られた直後の事であつた、私が其等の事情を簡単に説明して上げた所。

「今日スチール株は幾何してゐますか」との質問
「八十六弗です」

「大分上りましたね、生絲は如何ですか」
生絲も同様戦債モラトリアムの影響で其日最優五百六十圓程で大分の値上りである事を述べた。

「左様ですか、何れにしても生絲の高いのは日本の爲に大いに結構な事ですね」
斯様な雑話を交してゐる内に、經育より前日約束の巖本醫師並びにドクター、ミスが來院せられた。かねてよりの主治醫インクセツクト氏も立會の上、ミス氏の診察を受けられた。で三醫師が別室に立去らうとした時、明氏は當初より非常の信頼を置かれてゐた巖本醫師を呼び止めて更に再び同氏の診察を自ら要求せられた。かくして後三醫別室に集り各自の意見を發表したが、何れも衷心遺憾ではあるが病は既に時日の問題に迄進んでゐるから手當の下しやうもなく、打續

く高熱にも關らず身體の衰弱比較的少き爲め今週中は先づ大丈夫ならんも奇蹟の惠與なき限り快復の見込なきは是非なき次第なりと告げられた。此時の私の落膽と驚愕はどんなであつたらう。心の底からこみ上げて來る悲みで實に胸も崩れる思がしたのであつた。

私は其の夜此の病人を置いて歸るに忍びなかつたが手離しかねる用事も積つてゐるので週末再び來る事にして心を後に残しつゝ氏の許を辭し去つた。

噫、然し之が最後の御見舞となつてしまつたのであつた。

八月七日に私が行く豫定ではあつたが何としても氣掛りなので富永利夫君を煩はして病床に付添つて貰ふ事にし同君が八月六日朝訪れた時には既に意識も明瞭ならず全く危篤の状態に在つたが其でも辛じて御臨終に間に合ふ事を得たのは今以て私のせめてもの慰めとする所である。

かくして明氏は永の眠に就かれてしまつた。洋々たる前途と非凡の資質とを惠まれ乍ら料らざる病に殞れてより僅か二旬終に亡き人の數に入られてしまつたのである。

生前の明氏に就て私が了解してゐた所は氏が學問的向上心に盛な明敏なる青

年學徒であつたと云ふ事が全部であつた。

インヂャナ及び紐育兩大學の教授連も將來有爲の學徒としての氏に望む所多きものがあつた様に人の噂にも聞いてゐたからである。

然るに其の後學友松本君の直話に依つて、氏の學問に精進される態度の人一倍立派であつたのも確かであるがそれは氏の半面を知るものである。

氏の興味は同時に活きた實業界にも注がれてゐたので常に研究の對照を活社會の動きに求め、學理と其の應用とに不斷の研究を怠らなかつたのだと云ふ事を知つて、私は一層感心させられたのである。かくてこそ、私に意外の感を抱かせたその病床に於ける御質問も初めて合點が行く次第である。

今夏インヂャナ大學の舊師訪問の旅を企てられた際にも、ゼネラルモーター、レデオコーポレーション等の持株の利潤を以て自動車を購入せられ、松本君と共に遠くインヂャナ州迄ドライブ旅行をされたとの事であつた。

明君將來の目的が學者としての方面に在つたか、將又實業家としての活躍にあつたか私は知らなかつたがその何れの場合であつたにせよ、學者的研究心と實際的才腕とは氏の將來を立派に大成せしめた事であつたらうと思ふと其の夭折に

對しては實に惜みても惜みても尙足らぬ感がするのである。(昭和六年十月)

ブルーミングトンの大岡明氏

テキサス州ダラス市にて

塚 口 漸

一九三〇年二月二十四日紐育へ行く途中でインディアナ州ブルーミングトンに立寄り、インディアナ大學在學中の大岡明氏を訪ねた。それまでに數回手紙の往復はして居たがまだ會つたことは無かつたので、どういふ人だらうと汽車の中でいろ／＼想像しながら行つた。尤も非常に几帳面な行届いた人といふことは手紙で判つて居たし、また屹度大岡さんの氣性を受けて非常に真直ぐで親切な人だらうと思つて居たが、會つて見たら全く其通りで、大岡さんの若い時分には屹度此通りだつたらうと思はれて非常に懐しく、トテモ初めて會つた様な氣持がしなかつた。

小さな町で貸自動車が見附かるかどうかと心配して居たが明氏がチャント用意して居て呉れた爲め大變都合だつた。晝食までにまだ暫く時間が有つたので直ぐに大學に行き圖書館に案内された。小さいけれど古い大學だけに中々良く整つてると思つた。それから構内のカフェテリアで澤山の學生に混り晝食をしてるところへ打合せてあつたと見へ、明氏が非常に親しくして居られる若い教授が來られ、同じテーブルで食事をしながらいろ／＼明氏を賞められ、またいろんな話を聞いた中に、今度フォードを買つたからこれからはインディアナポリスへ自由に行けると其教授が曰はれたのを憶へてる。明氏が病氣をおして遠距離の自動車旅行をされたことなどが悪かつたと、亡くなる前に紐育の人に聞いたが、或は此自動車で此教授と旅行されたのでは無いかと思はれ、此教授とは餘程親交あつたものと思はれる。

晝食後、校庭内を一巡りして下宿に案内された。主婦が直ぐ出て来て大に喜んで呉れ、明氏のことをまるで自分の子供の様に賞めちぎつて、いろ／＼自慢話をして行つた。亂暴なアメリカの學生に馴れた主婦には明氏の様な温厚篤學の君子は餘程珍らしく、また有難かつただらうから、自分の子供の様に可愛がるのは當然

と思つた。

明氏はお父様の病氣のことを非常に心配して居られたので、色々其ことについて御相談有り、僕は日本からの便りなど詳敷聞いた結果、心配されない様いろ／＼話をして置いた。

それからこゝは此夏までに大體片附くから、紐育へ行きコロンビア大學にでも入りたいと曰はれるので、それまでの休暇中には非一度ダラスに來られ、棉のことを一通り見て置かれる様勸めて見たが今一つ氣乗されなかつた様だ。以前に研究科目の一つとして棉のことが調べたいから材料が欲しいと曰つて來られて送つたことが有つたので、紐育へ行かれるまでにダラスへ來られて實地につき研究されたら、良いと思つたのだが、恐らく其後他の方面に研究が進んで、紐育行の決心をされたものと思ふ。

何しろ外に日本人の居らぬ田舎町で勉強には持つて來いだが、如何にも淋しうに見へ、餘り勉強ばかりして神經衰弱になつたり、からだをこわされはしないかと心配になるので、呉々も健康を第一にされる様繰返し注意したが、此點は自分でも氣が附いて居たらしいし、又其内に紐育に行き、日本の學生と一所にならねば

餘程空氣が變り、心配は要らぬだらうと思つて安心し、其内汽車の時間になつたので停車場まで送つて貰ひ、紐育かダラスで再會を約して別れた。ホンノ三時間ほどの訪問だつたけれど、僕は非常に愉快だつたし、明氏も喜んで居られた様だつた。

其後一向消息無く、一年後の去年三月僕が紐育に行つた時には非常に忙しかつたので、よう訪ねず、無事に勉強を續けられてることのみ考へて居たところ、其後間も無く、突然紐育の店から明氏重患といふ電信で非常に驚かされ、數日後にははや亡くなられたと聞き、まるで夢の様で信じられなかつた。之れを書いて居る間にもブルーミングトンで會つた時の面影がチラつき、亡くなつた人とは思へぬ。短時間の印象だが前にも曰つた通り、實に眞面目で、温厚で、親切で、學究的な人格者だつた。將來學者として立たれるか、實業界に入られるか、どちらにしても立派な人になられ、アメリカでの熱心な研究が役に立つだらうと大に期待して居つたのに、運拙く夭折されたことは返す／＼残念に堪へぬ。明氏もさぞ無念だつただらうが、今はキット平和な天國で幸福な月日を過ごして居られることだらう。我々がアクセク働き乍ら同氏を惜んでるのを案外に思つて微笑して居られるかも知れぬ。

一九三二年三月八日。此土曜に發つて紐育に行く。日曜には想出多いアルーミングトンの近くを通ると思ひ感慨無量の裡に之れを認む。(七、三、九、記)

大岡明君を偲ぶ

大阪北野中學校教諭

木村喜逸

明君の追懷録を編輯するに當つて聊か思出を書き記して其の一編に加へて頂くことに致します。

明君が私と交渉を持つやうになつたのは君が北野中學校に入學せられた大正九年四月で、それから同十四年三月卒業せらるゝ迄五ヶ年の間主として私が英語の指導を申上げた譯です。君は私が今更申す迄もなく資性謹直にして温良且つ物事に非常に熱心でありましたので在學中先生方一般から常に愛せられ賞讃せられて居りましたのみならず級友一同からも愛せられ尊敬せられて居つたので

あります。一番年少であつたにも係らず人格が圓熟して居つたが爲め一般中學生に有り勝ちな茶目とかやんちゃとか粗暴とか云ふやうな風は微塵もありませんでした。従つて今明君の中學時代の逸話でも書かうとすると殆んど其の材料に苦む次第です。先達而も明君と同期の卒業生が數人遊びに來られました際にも明君の話が出て其中の一人も明君の追懷を書かうと思ふが材料が無くて困るとの話でした。そこで私は例の冗談を言つて笑つたのです。いくらでも逸話の材料のあるものは無事息災でどうも思ふやうには行かんものだ。そして君等のやうにと附け加へたかどうかは今はずきり記憶して居りませんが此の數人は誰であつたかは明君の靈はよく御存じです、多分あの時も明君は涼しさうな眼元に微笑を湛へて私達の會話を聞いて居られた事と存じます。

そんな譯で君は中學を卒業する時には既に立派な紳士として、の人格が完成されて居つたやうに思はれます。卒業後直に神戸高商に入學されましたが君の篤學心は年と共に益々熾烈になつて單に机の上の研究に満足されず休暇毎に北海道、樺太或は支那方面に迄足を延ばして實際的視察研究を遂げられ、昭和四年三月優秀なる成績を以て同校を卒業されました。其後尙渡米して研鑽を續ける事に

なりました際中學時代の學業證明書を米國の大學に差出す必要から數回御目にかかりましたが其時にも御自身の渡米を喜んで居らるゝ半面には當時健康勝れざりし母堂の事が大變氣に懸つて居らるゝやうに察せられました。君が御兩親に對する孝心の厚き事は私は豫てから感服して居りましたので君の心中を充分忖度する事が出来ました。

君が渡米せられたのは昭和四年七月下旬でしたが私は丁度其の月廿一日に神戸發大洋丸で生徒を引率して上海方面に行く事になつて居りました。明君は態々大洋丸船上に私を見送つて下さいました。そして今度洋行せらるゝに就いて新に御求めになつたと思はるゝ立派な寫眞機で記念撮影をして呉れました。その寫眞は君が渡米の後君自身がロサンゼルスにて撮影せられし小影と共に郵送して頂きました。船が愈々出帆と云ふ時に明君は岸壁から數條のテープを小生に投じて其一端を持たしめ船が徐々に岸を離れ始めるやテープを切るまいと細心の注意を拂つてそれを手繰り出しつゝ別れを惜んで呉れました。やがて君の赤誠を表象するやうな赤いテープが盡きて仕舞ふと今度は純白のハンカチフを取り出して力の續く限りそれを打振つて居るやうに見えました。私は之が永久の別

れでもあるかの如く思はれて目頭が熱くなり眼のうるむのを抑へる事が出来なかつたのです。そして明君の姿が見えなくなる迄甲板に佇んで岸の方を見詰めて居つたのです。實に此時の光景は今思ひ出しても萬感胸に迫るを覺えます。所が不幸にも此時の豫感が當つたとしても申しませうかこれがほんとうに明君との永久の別れとなつて仕舞つたのです。

其後米國から度々近況を報せられましたが元來筆不性なる私は返信も怠り勝で時日を過して仕舞ひました。昨春の便りには紐育大學の正科を卒業してパチラーの稱號を得目下M Aの論文起草中との事でありましたので錦を着て故國に歸られるも近々の内であらうと楽しんで待つて居りました。御家族や御親戚の方々は一層の事と存じます。然るに嗚呼!!!

滯米中の學業勵精振りや日米學生協會主腦者としての活躍振りは明君と同宿せし臺北高商教授川田氏の弔詞中に述べられた通り嘸かし目醒しい事であつたらうと想像されます。親しく明君を指導せられしコルネル教授も君の論文には大に期待して居られたとの事でした。

ほんとうに君のやうな人を失つた事は唯に大岡家一族の損失たるに止らず實

に我國將來の學界に取つて一大損失であつたと申しても過言ではあるまいと存じます。

(昭和七年一月三十一日記)

明君と私

小野武三郎謹記

私が初めて明君を知つたのは大正九年四月私が神奈川縣から大阪の北野中學校へ轉じて來て間もない頃でした。其の時私の受持であつた一年生には秀才と名づけられる生徒が比較的によくその中には高安彰君、河崎邦夫君、野田忠二郎君、木田經吉君、中島章君、宇津木英一君、中西章君、二宮秀君、湯淺恂一君など、今それ／＼學業も成就してこれから大いに社會的に活躍しようとしてゐる有爲の人々も居られたやうに記憶してゐますが、何にしても關西が初めての私には言葉も風習も全くの白紙でしたから、その世話の仕方などには随分無理もあつたやうに思はれます。

ある日曜日朝突然私の見苦しい下宿に上品な母親に連れられた小柄な色白の可愛い少年が訪ねて來ましたが、田舎から出たばかりの私には組の誰彼が皆立派な兒達に見えるだけで實はまだ名と顔とが一々覺えられない頃でしたから自宅で初めてお伺ひした「大岡明」といふ名がその母親の鄭重な挨拶と一緒に未だに忘れられぬ思出として残つてゐる次第です。實に私が關西で「生徒と親」から受けた第一の印象であつたのでした。爾來御縁によつて當時芦屋大松の畔にあつた大岡氏の宅にも度々お伺ひする機會も生じ、如何にも整つた品位ある御家庭と御兩親の誠に子女教育に御熱心な態度には蔭ながら敬服してゐましたが、これまで相模の膝下で二宮尊徳先生に私淑した句の幾分かでも残つて居た私には富豪の子弟に眞剣な修行をさせるのは駱駝に針の穴を通らせるより難儀なぐらゐの考もあつて萬事につけて随分「可らず教育」で御家庭を苦めたものでした。

ある時は人間には少しは辛抱力もあつて欲しいといふ譯で盛夏の頃十三才になつたばかりの明君を住吉から六甲山を越え有馬に出て寶塚まで炎天下を徒歩させたり、或時は少しは人間の苦みといふものも知らねばなるまいと親の情に甘える我が身を反省させる意味をも兼ねて、當時私の教へ子の一人が日本郵船の機

關土をしてゐた關係から、大洋通ひの汽船の地獄に這入つて汽罐の火夫の光景を見せたり、警官の保護の下に市岡の貧民窟を視察したり、今から考へるとよくまあ大切な子弟をお預け下されたものだと言はれるほど、冷汗の流れるほど、亂暴に近い鍛練を加へたこともありました。それにも係らず明君があまり嫌な顔も見せずよく従順に修業せられたことは全く慈悲に溢れる御両親の尊い御教訓の賜と云はねばなりません。

私の觀た明君は理性的で數學が得意で寡言ではありましたが云ふことは明確でなか／＼要領を得てゐました。ある年語學か暗記物かに少し缺點が表はれたことがあつてこれは勉強法が悪いのではあるまいかと三度ばかり検査したところそれで最早少しも世話をやく必要のないほど完全に改めて了はれた點から見ても、坊ちゃんながら全く機敏な兒と云ふべきであつたでせう。

其の後私は受持も變り家庭にはあまりお伺ひを致さぬやうになりましたが、流石に眞面目に勉強を續けられたと見え折々好い消息を聞かせてくれ、米國遊學の際には態々陋屋を訪ねられて歡談の花を咲かせ、私もせめては故國の思ひ出にもと森月城氏の描いた富士山の色紙を贈つてその行を盛にしたのでしたがそれが

最後の面影にならうとは夢にも思ひ寄らなかつたのです。

假令それが學生の本分とは云へ、親の情に報いる子としての誠心からとは云へ、勉學の爲に此のやうに不幸短命にして幽明界を異にすると云ふことが初からわかつてゐたらあの遊びたい盛りの而も豊に育つた少年時代に、あのやうな無理な修業はさせるのではなかつた、濟まなかつたと米國からの最後の消息を見るにつけて蔭ながら暗涙に咽んでゐる次第です。

(昭和七年一月六日記)

明君を憶ふ

芦屋 吉川 蕃 三

あゝ明少年の日のおもひでの哀しく光る春の夕星

昭和四年七月卅一日神戸解纜サイベリヤ丸にて君アメリカへ遊學す

甲板には、笑み佇てる君が面の今もわが眼にのこる悲しさ
外づくにへ心雄々しく行きしまゝ歸らぬ君となりにけるかな

校庭の薔薇の匂ふと消息來しブルーミントンの春のゆふぐれ

昭和六年九月九日神戸驛に遺骨を迎ふ

悲しみに耐へてむかふる母君に遺骨の列車今つきにけり
御遺骨をおほふ白布のしらじらとまた新しく眼に浮びくる
御遺骨に泣きくづ折れしはらからの袂哀しく顫へたるかな

×
言はんことあまた抱きて逝きにけん君を思へば涙わき出づ

父はゝに濟まぬと云ひて逝きしてふ君のこゝろの哀れなるかも
花びらに埋もれあれどなきがらの君が寫しゑ見るに耐へなく

×
家人にまこと明かさず父君の秘めぬしといふ尊きこゝろ

うち耐へて語りぬませど母君の頬をつたひゐる涙悲しも

×
君忘れず清く淋しくはた強く君が歩みし人間の道

ほゝゑめる君が寫しゑわれの手に形身となりてのこる悲しさ

うら若く逝かしゝ君の寫しゑのわが手にのこる悲しからすや

— 昭和七年晩春 —

明さんの思出

原 翫 之 助

私は肥料商といふ營業柄殊に煙草肥料に重きを置く關係で成績調査とか耕作改善獎勵會等にお招きを受け、一年の大半を旅に費してゐるので有ますが此長い旅行生活の中に最も深く最も強く印象づけられてゐる旅の日が有ます。大正十四年の盛夏の頃で有ました。東京の店から電話で、日華の大岡さんが夏休を利用して御伴される長男の明さんを連れて北海道迄御旅行になるので、大宮驛の歩廊でお眼にかゝるか、御序でもあれば宇都宮邊迄御一所に參りたいとの御話を知らせて參りました。

明さん——何度か御宅で御眼にかかつて、實によく氣のつく、それでゐてしつとりと落付いた、まつたく珠の様な人格の所有者と兼々心から敬服させられてゐた

——と御一所に旅をする私は心の底から喜びを以てわざくでも御伴しなればと急に旅の支度をして驛へ参りました。キチンと整つた學生服に今にもおちさん——とでも呼びかけられ相な親しい笑を浮べて明さんは滑かに入つてくる汽車の窓から顔を出してゐられました。

今迄は唯うか／＼と通り過ぎてゐた土地々々にも、原さんここは昔こつういふ事があつた、この名産は何で地形はどう、といふ様な歴史上や地理學上の珍らしい話等を聞かせて下さるので、私は今迄知らなかつた色々の事を識る興味に引ずられ乍ら車中の退屈さ等すつかり忘れて、汽車の早すぎるのを反つて心の中で嘆じた位で有りました。

此一日餘の旅中で私は常に感服させられてゐた明さんの女も及ばぬ程よく氣のつくそれがほんとうに心からの親切で、而も確りと大地を踏んで立たれてゐる様な落付と力強さ、バツキリと叮嚀にきかれる言葉使ひ、それでゐて青年らしい若人らしい明快さと豊富な明智に恵まれた人と成を強く深く植付られて了ひました。一瞬の如く過去つた僅か一日餘の旅では有りましたが、こうして私に一生忘れ得ぬ感銘を與えて下さいました。

私は此多幸な青年の姿をちつと見つめて、北の方へ御二人を見送り乍ら大岡さんは幸福だなアと泌々と感じました。

御別れしてから間もなく七月二十三日に仙臺から出された御便りを私は店で受取りました。松島の面白い恰好をした巖のエハガキでありました。

大岡さんの手で

乍失禮此巖頭は貴臺の御顔に似て居ると倅申候口の悪いこと、呵々御大笑被下度候

私は寫眞を見、文を読んで思はず大聲で笑つて店の者達を驚かせました。

御親子して宿舍の一室に浴衣に打寛ぎ乍ら、此岩の頭は原さんに似てゐますねエ。と愉快に笑はれた氣持の良し一情景。同時に青年明君のユーモラスな一面を今でも想像する事が出来ます。

初老と青年の兩特徴を惠まれてゐた様な明さんの餘りに出來の良さに早く行かれるのでは無いかといふ淡い心配を感じますので

臆ては關西實業界を左右する程の重鎮と成られるのだから御自分だけのからだと思つてはいけませんよ。國家の身體だと考へて十分自愛して下さい。と常々確信してゐる事を率直に申しますと

原さんおだててはいけませんよ。と笑ひに謙遜され乍らも、未來に對する強い決心と大きな希望とをその澄んだ眼の奥に湛えられてゐた事や、うちの親爺が慌て者だと思つたら、もう一人東京の方で發見しました。と社員の方々と心から笑はれた實に嫌味のない、純眞な青年のちよつといたずらつ子らしい挿話も、今は唯思ひ出の種となつて了つたのであります。

(七、五、二七)

明の靈に誥ぐ

父

お前の生れたのは明治四十一年一月二十二日夜九時二十分當時父の勤務地支那漢口の日本綿花會社社宅であつた、お前は母の胎内に宿りつゝ長崎から漢口へと長旅びをしたのであつたがお前の旅行癖も恐らく胎教の然らしむる所であらう？ 漢口で初聲をあげたお前は約半年後に日本に歸つた、爾來長崎及阪神地方に住んで二十二年間を親の膝下で大きくなつたお前は長男で而かも始めて生れ

た愛とし子として親心を傾注したのであつた、別に之れと云ふ程の六つかしき病氣にも罹らず大阪天王寺第五小學校||長崎勝山小學校||大阪府女子師範附屬小學校||芦屋の第一精道小學校||大阪北野中學校||神戸商大の前身神戸高商と先づ順調に進學して無難に成人し得たことを幸福に感じたのであつた。

お前は高商時代に中部支那、北支那、滿洲、朝鮮を旅行し又お前は卒業論文「我國の水産立國策」の資料蒐集の爲め北海道樺太方面をも踏破したのであつた。

昭和四年三月神戸高商を滞りなく卒業するや、お前の豫ての希望に任かせて更に北米合衆國への留學を許したのであつた、お前が素志を達して喜悅と希望とに滿てる晴れの旅びに上つたのは同年七月三十一日の暑い日であつた、其時の神戸港頭さいべりや丸船上の勇ましくも賑わしき鹿島立ちの光景が今猶眼前に彷彿する、父は更らに横濱埠頭で第二の見送りをしたがこれぞ最後の此世の別離であらうとは……嗚呼お前は二年後の悲しき運命を知らぬげに、いと愉快なる航海を東へくと續けたのだ、其楽しい渡米日記が悲しい紀念として此追憶集に收められようとは、お前も全く意表に出たことであつたらう。

お前は一路平安桑港に着いて後、ロシアアンゼルスやウイレルン山の天文臺、モル

モン宗本山の所在地やシカゴ等を歴遊して目的地のインディアナ州ブルーミントン市に恙なく辿り着きインディアナ大學に入學したのであつた。此處には一人の日本人も居ないので一時淋しく暮らしたことに同情する。併しお前は語學の練習と一身の修養上には寧ろ之がために得る所が多かつたと思ふ。

お前が米國に着いて後半ケ年とたぬ内に此父が不幸大患にかゝり止むを得ず、お前に召還電報を發したときにはお前も嘸ぞく驚き悲んだことであらう。幸に病氣の経過良好でお前の歸朝は間もなく中止に決つたのでほつと安心したところと思ふが、一時とは云へお前に大心配をかけたことは濟まなんだ。お前も時日の立つにつれ良友と良師を求め得たので大分心強く落付いたようだつた。就中同大學ケネデー先生の知遇を得たことは、お前一生の仕合せであつたに相違ない。同先生の家庭は米國人に珍らしい立派なもので屢々賞讃の目標として遙かに弟妹達を激勵して呉れたことを多とする。お前は本當に親孝行であつたが又同時に弟妹達をいたわり日頃能く導いて呉れたのを感謝する。

お前はインディアナ大學を卒業後更に進んで紐育大學大學院に入學したのであつた。そして各國大學生の常宿たるインターナショナルハウスに起居することに

したのであつた。同館には當時二十名許りの日本人大學生と數百名の各國人大學生とが同宿して居つたので色々の人々と往來する機會を得たことはお前の仕合せであつた。偶々鶴見祐輔氏がインターナショナルハウス國際學生館に来て日米關係につき講演をされたのを聞いてお前はいたく感動し、日米親善を日米大學生間に試むるの頗る有意義なるを信じお前は大學生有志者と圖り昭和六年の始めに日米學生協會を組織し時々會合しては相互の意見を交換し親睦を敦ふし小さい日米親善に資せんと試みた。お前の努力は認める價值あるものと思ふ。

お前は紐育大學商科に學ぶこと九ヶ月にして昭和六年五月卒業に必要條件を全部終了（卒業論文を除き）したので一年足らずで全部を通過することは稀有らしい處より見てお前の例の負けず魂を發揮し相當研學に勉めたらしい。お前の手の付けかけた卒業論文の題目は“*How Industry is relieving Unemployment in Period of Depression?*”と云ふのであつたやうだが其 outline のみを提出したのみで本論文が完成せざる内に瞑目したことを悲まざるを得ない。處で最近主任教授コルネル先生からの通知によると近々教授會に諮りて、お前に「マスター」學位追贈の特惠を與へやうとの議があるとのことだ。喜べ。

是より先き、お前は昭和六年三月に於て更らに一ヶ年間米國に滞在、研究を續けたいから是非許して呉れと委細の事情を申して懇請する處あつた、兩親は一寸迷つたが、お前の堅き決心と強い信念とは逆でも動かし難いと見たので快く承諾を與へたのであつた、更らに一ヶ年滞米を許されたお前は昭和六年五月紐育大學卒業直後、米大陸二千哩の自動車慰安旅行のプランを立て友人と共に一年前に居たインヂャナ州指して紐育から西方に向つて出發したのであつた（此旅行記は同行の友人松本氏によつて別項に載せあり）、三日後、ブルーミントン市に着いて舊師や舊友を訪ねて交歡したことは態々此世の別れに出掛けたやうな形ちとなつた、お前は同市を立後間もなく何んだか後髪を引かるゝやうだと薄氣味悪いことを云つたと云ふが、どうやら蟲が知らせて居つたらしく思ふ。

お前はブルーミントン市に滞在中昭和六年六月九日附で左の手紙を兩親に寄越したが之れが兩親宛ての書面としては絶筆になつた。

「久しく御無沙汰致しました、皆様御變りありませんか、小生も卒業論文を除き他の卒業に必要な條件を全部終了しました、従つてマスターの學位を受けるのは卒業論文提出と同時になるわけです、此夏は前報の如くアトランチック、シチーに行きますので其提出期は多

分此秋の終頃か冬初時分になると思つて居ます

試験終了しましたので、ブルーミントン市に恩師ケネディ先生訪問に決定、松本君とAnna君（佛國人）と三人連れで八百幾十哩の大ドライブイングを執行三日餘を費して去る七日夕當市に無事着きました、ケネディ先生は非常に喜ばれ僕等二人（アシャ君は途中オハヨオ州、シンシンナチー市に下車）を大歓迎されました、今朝はゴルフ場に出掛け、今歸つた許りです、明午後當地出發、インヂャアナポリス市を経てオハヨオ州ウイルビーに向ひます、それより、ナイヤガラ瀑布を見物して紐育歸着は多分十八日頃になりませう

次にインターナショナル、ハウスで親しく交際した臺北高等商業學校教授川田長兵衛氏のことにつき一筆したいと思ひます、同氏が紐育出發歸國前に小生と一所にワシントン市まで自動車旅行をしましたのですが、同氏も大に喜ばれ、神戸に着き次第是非留守宅を訪問したいと云ふて居られましたから、多分來月（七月）七、八日頃に訪ねらるゝかと存じます、小生も御厄介になりましたから御含置願ひます、同氏は故水島先生の友人にて中々の人格者、小生も教はるところ多かつたのを喜んで居ります、尙川田氏はインターナショナル、ハウスに數ヶ月間滞在されたので、小生の紐育生活も同氏から詳しく話されることゝ存じます。まだ、書きたいことが數多くありますが、今晝ケネディ先生と約束の時間が間近に迫つて居ますのでこれで止めます

何卒御身體を御大切に小生そのみが気が、りでなりません
御祖母様其他に宜しく御傳へ下さいませ、云々

昭和六年六月九日　ブ市にて

明

御兩親様

お前は六月十日馴染深い、ブルームントン市を跡に北方ナイアガラ瀑布見物に廻り、それから紐育への歸路を急ぎ六月廿一日紐育市に歸着したのであつた。

お前の前記書面中にあつた川田氏は七月七日夕刻態々須磨留守宅に御訪ね下さつた、大に其厚意を喜んで歐米の色々の話を伺つた、お前の紐育生活状態も詳しく聞いた、お前が兎角夜遅くまで勉強が過ぎるやうだとの話は多少氣掛りになつたが併し大に元氣にやつて居るてふ目撃談を色々承つて先づ健康も心配なしと大に安心をした、又お前の品性上のことを賞められたのも親心として大に嬉しく聞いた、兎に角お前は兩親の期待を裏切らず眞面目に勉學し又眞面目に品性の修養を積みつゝあることを確かめ得たので兩親、家族の満悦や推して知るべしである、どうも來年の歸朝が待ち長いとは當時家族殊に祖母の述懐であつた、斯くて

我一家はお前の輝ける前途を祝福して圓滿に暮らし行くのであつた、日は過ぎた川田氏御來訪後十日目の七月十六日突如お前が急病で相當重體との電報が父の大阪の勤め先に着いたときの驚きと悲みが如何に強甚なものであつたかは推察して呉れ、其後の情報によつて、お前が長途の自動車旅行中風邪に罹つたこと、お前一人で日々操縦の任に當つたことは知つたが或は之れが急にお前の健康に影響したのではなかつたらうか？　父は早速最善の手當と看護を紐育の友人其他の知人に電報して一日も早く其輕快を祈つたのであつた、お前は病魔に襲はれて苦悶の中から病氣のことは一切留守宅に知らせぬやうにと堅く依頼したとのことが内報して來たから父はお前の優しい心根を察し當分家族一同には全然之れを知らせず獨り父の胸中のみに秘め置くべく決心して十數日を過ごしたのであつた。此間日々お前の病狀の心配で此父獨りが時々刻々如何に悩み通ふしたか時々大阪の勤め先に宛てられた病氣經過の飛電を受取る毎に如何に心臓の鼓動を覺へたか、如何に讀む聲が打ち振はれたか、實に其時の親心程つらい思ひをしたことも少ない、斯る苦しみを胸中に秘めて何氣なく外面を装はねばならなかつた當時の父の慘めさは逆も筆紙に盡し難い、お前の發病地、オシアン、シチーの Atlantic

Shore Hospital の一室に於て友人知己の親切なる御世話と病院の周到なる手當の外に紐育に開業の日本人醫師、巖本先生の診察をも受けて及ぶだけの手段と方法を盡したのであつたが、不幸高熱長續きしたゝめ肺炎に犯され八月五日には容體危篤の急報に接したのであつた、其日まで家族一同に秘し置いたお前の病氣最早絶體絶命、どうしても打明けねばならぬ運命となつた、父は此日早引きして到頭お前の發病以來の成行一伍一什を始めて家族に打洩らしたのであつた、おゝ其時の家族の驚きよ！ 悲嘆よ！ 我一家は俄に陰惨な雰圍氣に蔽はれた、神佛の祈りが續けられた、不安の二日が過ぎて八月七日午前七時半（日本時間）お前は遂に歸らぬ旅路に上つたとの悲電に接したときの家族の心持、夢の如く幻の如く半信半疑の中に天地に慟哭した様は全く惨めなものであつた、壽命は天命の然らしむる所如何とも致方ないと言ふものゝ親の愚痴として、お前が天涯萬里の異境で親しく家族の看護を受くることも叶はず淋しく逝いた心持を察して如何にも不憫に思はれてならない、お前は病中高熱に拘はらず氣が儘かで何等取亂した態度なく却て見舞客を感動せしめた言動があつたと聞いて親は悲みの中にも安心したのであつた。

お前の亡骸は紐育に移され學友知人諸氏の手厚き告別式を終つて間もなく日本綿花會社々員の手に抱かれて日本に歸つて來たのであつたが、お前は嘸ぞ歸りたくなかつたであらう、九月八日横濱に遺骨となつて歸つて來たお前を迎へたとき、此父の心持、全く胸も張り裂けん許りの思ひであつた、其日の夜遅く神戸驛に着いたとき、迎ひの母や妹達は變つたお前の姿に縋りついて、わつと泣く外なかつたのは無理もない、悲しき三日を我家に過ごして九月十一日大阪正泉寺で告別式を營んだのであつたが、豫想外に多くの參拜者が有つたことはお前の徳であらう、殊にお前の中學及高商の同期生多數の御方が色々と斡旋されたことを嘸ぞ満足に思つたことであらう。

告別式を滞りなく済ました後、お前の遺骨は一時須磨の滿福寺に預けて冥福を祈つたが、此春の彼岸中に故郷祖先の墓地に埋葬すべく、三月二十日、兩親はお前の遺骨を抱いて神戸港から上海丸に乗つて郷里に向つた、三年前お前が威勢良く米國留學の途に就いたときは同じ神戸港からだ、何んと云ふ人生の變轉だらう!! お前は生前船旅が大好きであつたが入寂後更に船旅を續けるとは能く／＼因縁であらう、航海中母は頻りに黙想に耽りつゝ、時々筆を動かして居つた、それはお

前に手向ける追悼文を綴つて居ることを知つた、翌三月二十一日お前の幼年時代から親みの深い長崎港に着いた、それが骨となつてだ。何んと云ふ人生の悲惨事であらう!! 汽車に乗替へて郷里島原に着くと大勢の親戚が同情の涙を以て出迎へて下さつた翌二十二日愈々先祖の墓地に埋葬式を擧げた、遺骨は清涼院徳山明洋居士の新しい石碑の下に埋めた、お前の幼時の持物や學習遺品など取纏めて同所に埋めた墓前には神戸から齎らした榊樹一對を樹へた最後の讀經が墓地一ぱいに悲しく響き渡つて式は滞りなく終了を告げた、嗚呼之れがお前の短い一生の清算なのだ!! そう思ふと一時に氣がぼーつとして何んだか長い果敢ない夢を見て居つたやうな氣がした、そしてこみあげる暗涙を抑へて暫しは低徊願望去るに忍びなかつた。

お前の短い一生の歴史は之れで終りだ、親の口から子供の批判は兎角親馬鹿の誹りに陥り易い弊があるから父は之を避けるが唯お前は、親に孝心深く又世襲ぎの長男としての責任觀念が非常に強かつたことだけを銘記するに止めたい、其他のことは御友達や知人がたから戴いて居る多數の追憶所感に譲ることにする。

お前は事實短命ではあつたが内外の友人や知人の多くに追惜せらるゝだけの

同情を得たと云ふことは、お前として人間に生れ得た甲斐があつたと云ひ得よう要するに人の命には各定まつた命數のあるものだ、之を限りなく欲求することは親の愚痴に過ぎぬと思ふ、親はもう諦めた、くよくよ考へずにお前の冥福を祈るに勉めよう、どうか後事を心配せずに永へに安らげ、眠つて呉れ。

終りに附け加へねばならぬ悲しみの一事がある、それは外でもない、お前の親友森下清三君が突如昇天されたことである、同君はお前の亡くなつたとき非常に同情して下さつて郷里舞鶴に靜養中の身を以て二度までも慰問に見へ一度は一泊して在りし日の事ども細々と御話しあり色々慰めの言葉に預つたのみならず追悼集を出すことについての御相談から題名のことまでも多大の御心添を戴いたのであつた、それがお前の埋葬を郷里で済まして歸宅する間もなく、四月五日朝溘焉として死去の悲報に接したのであつた、全く寢耳に水で呆然自失の外なかつた、何んと云ふ痛恨事であらう! 一昨年お前は親友小野武夫氏を失ひ昨年はお前自身此世を去つたが小野氏とお前の親友であつた森下清三君が今年兩親友の跡を追つて逝かれたと云ふことは如何にも奇異な因縁に見へる、今頃は未知世界の何處らかで三人仲良く色々話し合つて居ることであらう、合掌。(七、四、一一、記)

「附記」

本文中に記した紐育大學教授會は四月下旬滿場一致 M.B.A. の學位をお前に追贈すべく決議したとの通知を五月二十日學長テラー博士より受取つた、お前も此餘榮に満足して瞑すべきであらう。(七、五、二)

明の靈前へ

上海丸船室にて

母

嗚呼、願れば三年前の七月三十一日、この神戸港から、あの大きなサイベリヤ丸で、喜びに溢れた元氣な顔をして、親戚始め大勢のお友達や知人方に見送られ

「ではしつかり勉強して參ります。どうぞ御身體をお大事に歸りを待つて居て下さい。なあと、二三年の月日は直ぐに經つてしまひますよ。」

と言葉強くも挨拶をしてあの快活な様子を見せた其の時の甲板上の立姿が、今猶

眼前にちらつく様です。

愈々、本船が岸壁を離れ、徐々に進行するに連れ、手に手を繋いだ五彩のテープがいつしか我が手より切れた時、母は只々ぼんやり船の行手を淋しく見送る許りでした。

歸宅してからも只々もう悲しい氣持に打たれて、傍の人にも何と無くきまり悪い程でしたが、今から思へばあれが親子一生の生別であつたとは神ならぬ身の知る由もなく、いともうたてく思はれます。

今日、此の港から父母の手に抱かれて淋しう旅立つとは何と云ふ人生の皮肉でせう。實に感慨無量に堪へません。

此の上海丸には御身はたしか二回程航海しましたね。あの社交室の机で御身が切りに手紙を書いてゐた姿が今更の様に思ひ出されてなりません。それが今は母とたゞ二人、この船室で淋しい物語りにふけりませうとは……。

あゝ、思へば御身は胎内にある時から船とは因縁深いものでした。その爲か御身の旅行には能く船を好みましたね。

四年前、長崎からの歸途母や妹等が大層船酔ひに困つた時、御身は一人で皆を介

抱してくれましたね。

今もあの時位揺れてゐますが不思議に母は少しも暈ひませぬ。御身がきつと護つて呉れて居るのでせう。

明朝は長崎港に着きますが、御身が支那漢口で生れた時始めて抱き上げた乳母の「しげ」がきつと淋しい顔をして岸壁に迎ひに来て居る事せう。

御身は生後六ヶ月目にこの長崎に始めて歸つたのでした。それから母と二人で長い間、父上のお留守をして乳母相手に三年を過したものでした。其の後父上御歸宅後、大阪へ轉住し、やがて小學、中學といと健かに卒へて續いて神戸高商在學中、桃櫻の満開の頃、兄妹打連れて歸郷した時、お國の叔父様、叔母様に楽しく迎へられ、島原雲仙の頂上、普賢嶽まで登つては大きなツララを取つて歸り、叔父さん、妹等を驚かせたものでしたね、

明日、夕刻には又その叔父様等の悲しいお出迎へを受ける事せう。人生の果敢なさがつくづく感じられてなりません。

在米中、御身は絶えず兩親宛に元氣な便りをくれましたが、此の母にはそれが唯一の楽しみでした。

御身が親思ひの手紙にはいつもくく涙なしには讀む事が出来ませんでした。

昨年五月、緬育大學を豫想外に早く卒業した吉報に父母はどれ程喜んだ事せう。卒業後間もなく出掛けた長途旅行先から、しげくくの便りが俄かに途絶えたので何となう御身の事が急に案せられました。が、たま／＼悪夢に脅かされ、一層不安を覺え居る折柄、突然御身病氣危篤を知つた時の母の驚き、全く失神せん許りでした。

遠い異國の悲しさ、情なさ、今は詮方もなく唯々神佛におすがりするの外ありませんでした。

此母の一心籠めた祈りも聞へ給はで、あたら御身は二十四歳を一期として遠くく旅の空で敢へなくも淋しく去り逝きし残念さ、日頃孝心深い御身は高熱續きで苦しむ乍らも「國許の兩親に心配をかけてはならぬ」との心遣ひから當分病氣を秘し置くよう、堅く頼み入つたとのこと、臨終間際には「親に濟まぬ」との傳言残したとの悲しき知らせを受取つたときの父母は、其不憫さに胸も張裂けん許りに辛く感じ、そうして其やつれた面影さへはつきりと眼前に彷彿するのでした。嗚ぞや祖母、父母、弟妹などに一目會ひたかつた事せう……そののみが、いともい

ぢらしく又心残りでなりませぬ。

二ヶ年間に切角懸命に努力して首尾克く大學を卒へ近かく錦を故郷に飾らんとせし其の喜びも果さでなせ歸らぬ旅路を急がねばならなかつたのでせう？ 嗚呼、母はこの悲報の夢であれかしと、幾度繰返した事でせう、否繰返さずにはゐられなかつたのです、されど三十三日目に御身のいたましい、淋しい姿を神戸驛頭で眼のあたり迎へて、最早亡き人の數に入りしを何等疑ふ餘地もなく、此處に始めて亡き御身をあきらめる外なかつたのです。

遺留品の内の小さい手提げかばんの中には、最近の家族の寫眞が這入つてゐましたが定めし病室で寂しい時に、この寫眞を打眺めてゐた事でせう。そして、家族の姿は揃つて傍に在つても介抱して貰ふ事も出来ないのをさぞや情なく思ひ續けた事でせう。母は次から／＼起る悲しい追想に思はずかばんを抱きしめずには居られませんでした。中にも御身が日常かけた眼鏡と小銀貨の残つて居る「錢入れ」を見出した刹那、「この持主は……」と考へた時この母の胸の苦しさ、とても書き記す事は出来ません。

御身が在米中、親交のあつたお友達が先月始め、歸朝されて、御身の在りし日のこ

と、具さに承り、さながら眼前に見る如くにて、又しても愚痴を繰返さずには居られませんか。

昨日はお寺詣りの歸途、神戸元町で圖らずも十三年前御身の小學校六年を受持つていたゞいた畑先生にお目にかゝりました。先生はいとなつかしげに御身の事をお尋ね下さいました時は、もう母は何にも申上げる事が出来ませんでした。再びのお言葉に

「明は昨夏米國で亡くなりました」

と申し上げた時、先生もあまりの變つた話に非常に驚かれました。それもその筈、随分可愛がつて頂きましたものね。中學に入學出来た喜びに伊勢參宮にまで連れて行つていたゞいた事もありません。その頃は小學校の修學旅行はまだ無い頃とて其の時の御身は大層喜びましたね。それ丈畑先生の御事も御身はよくお噂しては常々お目にかゝりたいと許り申して居ましたね。それがたま／＼遠方から神戸へお出での節に不思議にも昨日お寺詣りの歸途お出會ひしますとは、是も何かの因縁でせう。

中學一年生一學期の試験中の事でした。

夕方突然御身の腹部に「瘍」が出来て急に痛み出したので御影の外科醫院で診察を受けた結果、直ぐ手術せねばいけないと申された時

「ではすぐやつて下さい。明日は學校の試験を受けねばならないのですから。」と平氣な様子であつた時には、母も少しく驚かされました。院長先生が「それはとても無理だ。二日位は行けません。このまゝ入院なさい」

と申されたが、御身は明日の試験がいかにも氣になつて手術後ちつとも痛まないから家へ歸して下さいと云つて其の夜遅くとうとう自動車で芦屋へ歸りましたね。

翌朝は未だ熱もあるのに如何にとめても「大丈夫だからやつて下さい。」と云ふので到頭母が御身と一緒に學校へ行き試験のすむまで職員室で待つてゐた事もありません。其の時、受持の先生が「大岡は随分我慢が強い」と申されましたが本當に御身は學業に熱心でありました。

妹等の受験の時にはよく面倒を見てくれたものでした。そして常々よく親切に教へ導いてくれた事を追憶してはいつも感謝してをります。

思ひ出は中々盡きませぬが明後日はいよいよ祖先の墓地で永久におわかれせ

ねばなりません。實にお名残り惜しい限りです。

然し又いつかは次の世できつと會ふ事の出来る事を信じてお別れする事に致しませう。

亡祖母様の御傍に永へに安らげく眠つて下さい。

母は御身の冥福を朝夕祈つて居ます。(昭和七年三月廿日夜記す)

御 靈 に 捧 ぐ

澄

子

うつし世に春立ちぬれど兄君の

かへります日の今ははかなく

待ちに待たれた春でした。兄上御歸朝の春!

「來年こそは御一緒に」さう思つて打眺めた須磨寺の櫻は今年も美しく咲き匂

ひましたのに……

一寸先は暗の世と言ひ古された言の葉を今しみくくと骨身にしみて覺えます。兄上逝い給ふてより此處に八ヶ月。而も日と共にいよ／＼新たな様々の追憶！ 兄上は儘に大きなものゝ數々を私共に残して下さいました。

さても短かかつた私等はらからの縁よ、かく思ふ毎遠く洋を隔て、過した最近の二ケ年こそ、惜しみて／＼猶餘りある口惜しさで御座います。

併し乍らこれは餘りに身勝手な申分？ 三年前の神戸埠頭、洋々たる希望と歡喜に満ち溢れつゝ笑つて故國を旅立たれた兄上のお姿は今だにわが眼底から消え去りませぬものを……嗚呼。

x

誰一人、知己もない異國の空に唯一人、日本學生の意氣と榮譽を双肩に、孤軍奮闘ひたすら學びの道へ精進遊ばされた兄上でした。しかしそこには人知れぬ御苦辛をどれ程忍んでいらつしやつた事か、蔭乍らお察し申して居たのでした。

インデアナ大學を卒へてニューヨーク大學へ。

螢雪の功空しからず、將に榮ある月の桂を手折らんとして、圖らずも惡戯な運命の神に弄ばれ、兄上は忽然とはに昇天ましましたのです。

「兄病氣……危篤……」と矢繼早に父より始めて聞かされたのが八月五日午後
の事。あまりの衝撃に私等は幾度己が耳朶を疑つた事でせう。

今は施す術もなく、唯々神の御力を、と誠心籠めし必死の祈りも終に空しく、二日の後いとも悲しき最後のたよりに

嗚呼、眼の先が一時に眞黒暗になつてしまつた心地でした。

生者必滅、老少不定、そは定めなき人の身の常とは申し乍らあまりにも情ない神の思召よ。

只さへ寂しい異郷の客舎、親弟妹の片時のみとりすら得受け給はず、自ら死を覺り給ひし最後の兄の胸中！ 推しはかるだに切なくて我が胸は痛みます。

何れ免れぬ人の壽命なればとてせめてもう二三年の御生命あれば……さすれば晴の御歸朝をもお迎へして種々の御苦心談に共に泣き共に笑ひ共に打興じて暫しにてもこよなき一家團圓の樂しみを擅になし得しものを噫矣！

x

學に篤い兄上は一面温い情の持主で入らつしやいました。

「親孝行なお兄様！」之こそ私等が一生涯忘れる事の出来ない言葉で御座いま

す。

今だにまざ／＼と浮び上つて参ります昔の一日――

兄上高商より歸宅し給ふて、母上御頭の病めますと聞かるゝや、御自ら床を取り枕の水を代へ等、誰より先だつて御介抱遊ばす兄上でした。

御渡米後、一入御孝心は慕らせられ、しば／＼の御たよりに御兩親の御健康殊に母上の御持病を案せられ

「これのみが氣がかりでなりません。」と屢々言つておよこしになりました。

祖母、兩親の御誕生日にはいつもはる／＼祝電と祝詞を忘れずお寄こし遊ばすのが例でした。

只一葉の紙面に溢るゝその御至情がどれ程兩親の御心の琴線を打つてゐたか私はそれを誰より一番よく知つてゐたので御座います。

思へば三年前の正月、父上肺炎の経過渉々しからず終に兄上への招電が發せられた時、之を受け給ひし兄上の驚きとお悲しみ……而も之が折も折試験の眞最中でいらつしやつたとか。とつおいつさぞや惱みもだへられた事で御座いませう。幸に病勢好轉歸朝取止めの次報で稍々安堵遊ばした様なものゝこの孝心深き兄

上に一時たりとも多大の御心痛をおかけ申したのは餘りにも罪深き業で御座いました。

父上快くなり給ふや「全快御祝」としてはる／＼送り越されし心盡しの「電気按摩器。」今は悲しき形見として長く／＼父上の御傍に用ひさせらるゝ事で御座いませう。

いつも二言目には

「自分は大岡家一家を背負つて立つべき身だから――」とおつしやいました。

ほんとに兄上は己の責任をば常に十二分に自覺せられ且自重なすつてゐられたのでした。

御病中、時々側の人に對して

『兩親に濟まぬ』との嘆聲を洩らされ給ひし兄上。嗚呼、此の一言こそ勿體なくも千萬無量の御苦衷をこめさせられし御言葉だつた事でせう！

×

私等妹にとつてかけがへのない唯一人のお兄様でした。

お兄様！物心付いてからこの方、幾度呼びなれたこの言葉。けれどももう再び

この世ではなつかしい御答は聞けなくなつてしまひました。

小學校から高女を卒ふるまで！ 毎夜机を並べて共に學んだ思ひ出はあまりにも鮮かにわが心の底に刻みこまれてをります。

どんな試験のお忙しい時でも御質問に行けばどこまでも親切に教へて下さいました兄様。

今となつて共に過したあの頃、私も何故よりよき妹でなかつたかと今更歸らぬ後悔に責められてなりません。

「澄ちやん、僕が留守になつたら後はしつかりたのむよ。そして宅での出来事は細大洩らさず知らせてくれ。之が僕のお前へのたのみだ」

之が兄上の最後の御言葉でした。

約を守つて私はひまを見つけては細々と書き送りました。善きも悪しきも兄上にはどうしても偽る事はできませんでした。そうして忙しい裡から返して来た御手紙の中に私は濃やかな兄上の情に幾度泣かされたかしれません。

「我によき兄上あり」かうした觀念がたとひ兄上は傍に在まらずともどれ程強い力となつて二年間の私を勢づけ、ばげまして下さつた事で御座いませう。

x

…前略…

先月から鶴見祐輔氏の御演説に刺撃せられ、親友○○君と共に「日米學生協會」なるものを組織しました。日米學生一堂に會して大いに交歓する Meeting なのです。かくて僕等の微力がいさゝかなりとも、日米親善に貢献する事を得ればと大いに意氣込んで居ります。

第一回は日本クラブにてスキヤキ會をやりました。會する者、米人四名、日本人四名、極少人數でしたが次回には米人八名、日本人七名、合計十五名に上りました
―後略―

之が昨年四月、御兩親宛の御手紙でした。

純理の學をのみ究め給ふと思つてゐた私共は、かくて始めてこの對社會實際的の兄上の存在をば知つたのでした。

勉學の御傍、「日米親善」の大理想へと働きかけつゝいらつしやつた兄上。

その胸裏には如何なる抱負が……夢が……深くも藏されて居りましたらうにと思へば……嗚呼。

生來人懐しい性の持主たる兄上は日本御在學中より多くのよき知己、友人を持つていらつしやいました。

御渡米後、兄君を知るすべての内外人から常に深く愛されておいでになつたのは偏へに兄上の御徳に歸し得ませう。

されば「兄君大病」との通知に取るものも取り敢へず、三百哩の遠方を飛行機もて飛び着き、三日間も滞在して種々親身も及ばぬ御介抱をして下すつた先師、ケネデー先生のあつた事、又數百哩の先より夜を徹して駆けつけ看護慰問に全力を盡された日本人親友の有つた事も決して偶然ではないと思はれます。

又紐育大學の外人同級生の主催にて、友情に溢れた盛んな追悼會を紐育郊外スミスン氏邸に開いて戴いたり。神戸高商時代のお友達方も時々御集り遊ばしては兄君の追憶談に耽るを常とせらるゝと秘かに承つてをります。

昨秋には芦屋在住の頃。ピアノを師事し給ひし井上様御兩所の御好意で、好例「樂のまどゐ」に際し兄上の爲特に選ばれし「悲しみの一曲」の御情こもりし演奏に御靈をお慰め下すつたので御座いました。

あゝ。兄君はかくて愛慕しまつる幾多の人々の胸ぬちに永へに生存遊ばして入らつしやるのでせう。

さうです、「よき兄。わが兄」として私はいつの時、どんな場合でも在りし日の優しき御姿をこんなにはつきり思ひ浮べる事が出来ますもの。

兄上よ。安らげく在しませ。御淋しき御兩親を幼き弟妹を、私はこの世に生活します限り兄君の分まで屹度お守り申す覺悟で御座います。私の力の續きます限り。

そして必ずや兄上の見えざる御力は唯一のたよりとなつて弱き身をむち打ちあげまして下さる事と堅く堅く信じて居ります。

所詮、肉體はうき世に於ける假の宿り、又次の世では永へに相睦む事も出来るので御座いませう。

その日まで。その日まで。

あゝ、兄君よ。安けくおはして下さいませ。(七、四、一〇)

埠頭に立ちて

政 子

今は唯悲しき亡骸となりて両親の涙の御手にみ守られつゝ遠き船路を西へ西へと御祖父様の御傍へゆかれまます兄君よ。

あゝ 定めなき世とはいへ、埠頭に立ちてながめやる我が胸はあはれ、感慨無量の四字に盡きぬ。

×

思ひははせぬ二年前
輝やく希望を胸にひめ
太平洋のその如く
洋々たる志に包れて
門出し給ふ兄君の
ひとみは熱に燃え立ちぬ

折からおこる歡聲に
五色のテープはひらくと
風に舞ひつゝはなれたり
涙の中に浮び出づる
兄の英姿を見守りて
幸あれかすと祈りけり
あゝなつかしき面影よ

長き航海つゝがなく
楽しく終へし兄君を
共に喜びし我等なり
わびしき日々のなぐさめは
たゞ兄君の便りのみ
遠く距つれど兄君の
妹思ひのみ便りを
我感深くよみかへす。
心盡しの銀杏の葉
又或時は寫真等
眞心こめたるおくり物
あゝ よき兄よ 我こそは
恵まれし者よ 今からは
兄に恥じなき妹と
期してぞ神に誓ひしを

あゝ二年の日はすぎぬ
兄の歸國も近づきて
喜び溢るゝ我が胸に
突如襲ひし悪魔の手
兄君危篤の電報に
己が心は打ちふるふ
あゝ夢なれば——と思ひしかど
餘りに弱き我が心
たゞく一縷の望をば
神に求めて祈りしを
されど祈りの甲斐なくて
兄君遂に逝きませり
あゝ悲惨なるこのしらせ
悲しみ滿てる我家なり

あゝ不びんなる兄君よ
遠き異國に唯一人

死を悟られし其時は

胸の苦しみ如何ばかり

されども遂に最後まで

父母に濟まぬと言ひ給ひし

その御心こそ永遠に

我が胸深く宿るらん

されどはかなき人の世よ

無情の風は吹きすさぶ

あはれ傷ましき御姿よ

見るに忍びなき我心

ひしと抱きよるやるせなさ

物もいはれで唯涙

あゝ果敢なくも逝き給ひしか
再び聞かれざるあの御聲

あゝ呪はしき何故に

兄君を奪ひ去られしか

涙の中に夜は更けぬ

静かにひゞく鐘の音

御霊と共に語らなん

遠き昔の思ひ出を

六とせ前の今頃は

入學試験を前にして

勵む妹に何よりの

力となられし兄上様

あの難しき問題も

如何なる時も快く

教へ給ひし兄なりき

あゝ優しかりし兄

これぞ誇りと我が胸に

強く頼りていませしを

又兄君は音楽を

こよなき友とめでられき

輝くひとみ 躍る御手

魂より出するその調べは

今尙耳朶にひゞくなり

兄が學びの業を終へ

錦衣歸朝のそれまでに

調べの道に精進を

約束せしも今はたゞ

果されぬこそ淋しけれ

あゝなつかしきあの頃よ

思ひは盡きず我が心

されど果敢なき夢と化す

あゝ兄君の生涯は

果敢なくあれど清かりし

例へ姿は見えずとも

我が心には永遠に

強く生きていられよう

あゝなつかしき兄君よ

榮光輝やく天國に

永久に安らけくおはしませ。

しのび草

秀子

限りない抱負を胸一ぱいに包んで、洋々たる前途への希望と憧憬に、あんなにも輝かしく元氣にそして雄々しく立たれた、お兄様でした。

そしてお送りしなければならぬ私達の淋しい氣持も、お兄様が三年後桂の枝を手折つて立派な青年として再び神戸埠頭に立たれる日のお姿を夢見乍ら、いくらか慰められたのでした。

一年二年……どんなに、お忙しい時でも月に一度は必ず、日々の事ども細々とお記しになつて、なつかしいおたよりを下さるお兄様でした。おたよりの中には、よくあちこちで寫されたお寫眞が挟まれて居りました。そして、お兄様はいつも本當に朗かに、又晴れやかなお顔で寫つていらしたのです。「相變らずお元氣でいらつしやる」只この一事を知る事が、私達のは、無上の喜びであり安心だつたのです。……

x

私達はあれから三度目の夏を迎えました。そして、お兄様には二ヶ年間の螢雪の功成つて目出度く、御卒業の榮譽を荷はれる日がいよいよ、目前に迫つて來るのです。

來春は御歸朝。私達は只感慨無量で今はひたすら、御歸朝の日をお待ち申すのみでした。

「どんなに變つていらつしやるだらう。それとも、もと通りのお兄様かしら？」など様々なお兄様のお姿を心に描いて見ても、それを唯一の楽しみとしてゐるのです。

突如!! 突如!!

この平穩な空氣は、餘りにも無残に破られたのです。

お兄様が御重態。父の口から始めて聞かされ時、私達は息づまるかと思つた程でした。「それは本當か？」疑つても、今は早疑ふ餘地もなく事實だつたのです。餘りの大きな打撃になす術を知らぬ私達は今は必死と目に見えぬ神の御力にすがらるのみでした。

息づまる様な沈黙の中に過ぎて、三日目の夕方でした。

遂に兄様の御逝去が報せられたのです。あゝ、何といふ悲惨な事實!! 生れて始めて知つた肉身の、然も只一人の兄との死別!! 遠い異郷の空で淋しく、天國へ召され給ふた兄様。兩親の顔が……そして私達の顔が走馬燈の様にぐるぐると浮んでは消え……て行かれた事でせう……。

あゝ人の世は露の世ながらさりながら兄様の御生涯、それは餘りにも短いものでした。丁度爛漫と咲き匂つてゐる山櫻のそのの様に。花は幾度散つても又咲く春もありますものを、一度去られた兄様は、再び、否永へにこの現世にはお姿がないのです。

どの様にお待ち申しても……。

でも、聖かなるが故に、短かゝつたが故に兄様の御生涯は一層、光り輝いてゐたのだと思はれるのでございます。

x

すべてに圓滿でいらつしやいました。

いつも春の風の様に和やかに、温かい氣持で誰にも、接せられた兄様でした。

日米學生會といふ日米親睦の爲に、發起された意義深い會も、兄様のかうしたお氣持が成功に導いた最大原因をなすものであらうと信じてゐます。

かうした一面、兄様には音楽の嗜もおありでした。

未だ家にいらつしやる頃、兄様はもつとも手近に得られるレコード等あつめては、日に何度となくかけていらつしやいました。

あの美しい、メロディに恍惚としてひとり美の境地を楽しまれる兄様のお姿が、今まぎ……とよみがへつて参ります。

ピアノはとてもお上手でした。

「この道」「からたちの花」等、上手でもない私達に唱はせて伴奏なさるのが何よりお好きなお兄様でした。

音楽の外に兄様には、スポーツの趣味がおありでした。

日曜の一日は必ず、ボールに明けてボールに暮れる……といふのが兄様の常でした。

あの快よくひびくラケットの音、汗みづくになつて友人の方と試合してらしたあの愉快さうな光景と、そして白い輕快なユニフォーム姿の兄様のお姿を今は主

なき淋しげなラケットを眼にする度に、涙と共に思ひ出さずにはをれないのです。暇の時は私達も、一生懸命になつて教はりましたね、「兄様が今度歸つていらつしやる迄には、きつとテニスのチャンピオンになつてゐます」こんな事を書いておたよりしたのも、本當に夢の様です。

かうしたスポーツの兄様は、又私達にとつて本當にやさしく親切なお兄様でいらつしやいました。

あの忘れられぬ入學試験の時、最後までついて來て下さつては、色々と勵まして下さつた事、その爲、私は幼な心にもどんなにか力附けられ、勇氣百倍して試験場に臨む事が出來たのでした。

後で私の友が「貴女は入學試験の時ずつと御兄様と御一しよだつたでせう。本當にいゝお兄様だとうらやましく思つたのよ」と云はれた事を、そして其の時、どんなにか誇らしく聞いた事を今尙記憶してゐます。

又つい最近私達が須磨へ移つて來た時も兄様は涙ぐましいまでに細かいお心遣ひで「その邊は兎角、不良青年等が多い所だから學校の往復は十分氣をつけて、なるべく友達多勢で歸るやうに……」と手紙の一端に記されてあつたのでした。

心と心と相觸れる時、これは相見て相語るに異ならないのです。

兄様は海の外にいらしても、私達の心は常に眼に見えぬ絲で結ばれて居りました。所は東西に隔つても、心は相共に住むと同じだつたのです……。

x

あゝ、それに兄様は逝かれました。そしてこれらのなつかしい思ひ出も今では只追憶の二字に葬り去られて了ふのです。でも兄様はあの榮光の充ちた天國とやらで靜かに秀子の思ひ出をお聞き下さいました事と思ひます。

そしてこのゝちも、たとへ肉體は離れてゐても兄様はいつも秀子の心の中に強く生きてゐて下さる事を信じます。(七、四、一〇)

世の中に思ひあれども子をこふる思ひに勝る思ひなき哉 紀貫之
眺ても此世の空と思はぬは子に別れたる朝にぞありける 香川景樹

弔
詞
篇

弔詞

謹ミテ

故大岡明君ノ靈ニ申上ゲマス。

君ノ御逝去ハ餘リニ意外デアリマシタ。僅カニ二ヶ月餘リ前ニ君ハ自ラ自動車ヲ驅ツテ紐育、華府間ノ長程ヲ一氣ニ往復サレマシタ。其ノ元氣ト體力トハ夢ニモ之ガ今日ノ悲シキ思出ニナラウトハ豫期サレマセンデシタ。人生ハ果敢ナイモノトハ云ヘアマリ突然ノ御逝去ニ闇然トシテ唯々哀悼ノ情ニ堪ヘマセヌ。

君ハ曩ニ神戸高等商業學校ヲ卒ヘテ直ニ米國ニ留學セラレ。インディアナ大學御卒業ノ上更ニ紐育大學ニ入りテ主トシテ商工經營學ヲ研究シテ居ラレマシタ偶々專攻科目ヲ同ジウスル私ハ圖ラズモ紐育インタナショナルハウスニ同宿ノ御縁ニヨリマシテ短期間ノ滞在ニモ拘ラズ深厚ナル御交誼ヲ賜ハリ御世話ニモ相成リマシタ。此ノ間私ノ受ケマシタ君ノ印象ハ極メテ眞面目ナル學者マタ修養ニ富メル青年紳士デアリマシタ實ニ君ハ天資英邁頭腦明晰デ而モ熱烈ナル研究心ニ富ンデ居ラレマシタ。從テ學業ノ進歩ハ日ニ著シク指導教師コルネル教授ノ如キハ君ノ卒業論文ニ對シテハ特ニ多大ノ期待ヲ持ツテ居ラレタトイフ事デアリマシタ。君ハ意志鞏固デアツテ敢爲ノ氣性ニ富ムト共ニ身ヲ持スルコト頗ル堅ク又人ニ接シテハ

温容恭謙常ニ信義ヲ以テ交ハリ其ノ端麗ナル風姿ト相俟ツテ君ノ玲瓏タル人格ガヨク窺ハレ
ルノデアリマシタ。君ノ座右ニハ旅先キトシテハ甚ダ不似合ナル大キナ重イアルバムガ置カ
レテアリマシタ。ソレハ君ガ重キヲ堪ヘテ態々日本カラ携ヘ來ツタ神戸高商ノ卒業紀念帖デ
アリマシタ。君ハ時折之ヲ翻シテハ恩師ノ温容ヲ拜シマタ舊友ヲ思ヒ忍ブノガ何ヨリノ樂ミ
デアルト申シテ居ラレマシタ。其ノ情誼ニ厚キコト君ノ如キハ恐ラク稀デアリマセウ。斯ク
ノ如クシテ君ハ在米邦人知友ヨリ多大ノ尊敬ト信頼トヲ受ケタノミナラズ多數ノ米人ニモ深
ク敬愛サレマシタ。ソレ故君ノ日米學生會ノ如キモ極メテ容易ニ設立ヲ見ルコトガ出來タノ
デアリマセウ。日米學生會ハ實ニ君ト某君トニヨツテ發起セラレタモノデアリマシテ主トシ
テ日米兩國學生ノ親善ヲ圖ルノガ目的デアルト聞キマシタガソノ着眼ノ賢明ナルコトハ暫ク
措キ。會ハ君在ルガ爲ニ會員ヲ増シ更ニ會員ノ衆望ヲ負フテ君ガ其ノ主腦ニ推舉セラレタト
イフコトハ畢竟君ノ德望ト材幹ノ秀デタルニ因ルノデアルト信ジマス。

君ノ御歸朝後ノ御志望ハ主トシテ商業教育ニ盡瘁スルニ在リトノ仰セデアリマシタ。蓋シ
君ノ如キハ凡ソ何事業ニヨラズ適任者タルノ資ヲ多分ニ備ヘテ居ルト信ジマスガ現時我國ノ
商業教育界ニ於テハ特ニ君ノ如キ人材ヲ要望シテ居リマスダケニ最適任者トシテ君ヲ歡迎致
スコトデアリマス。然ルニ今ヤ此ノ優秀ナル未來ノ少壯教授ヲ永久ニ迎ヘル事ガ出來ナクナ
リマシタ事ハ我教育界ニトツテハ誠ニ遺憾ノコトデアリマシテ身商業教育ニ従事シテ居ル私

ハ特ニ哀惜ノ念ニ堪ヘナイノデアリマス。

尙君ニ就イテ追想スベキ美事ハ多々アリマセウ併シ如上幾多ノ修養ヲ積マレタ丈デモ君ノ
平素ノ御努力ト之ガ御指導宜シキヲ得タ家庭ノ御訓育上ノ御骨折トニハ共ニ深甚ノ敬意ヲ表
スル次第デアリマス。

最後ニ申上マス。

平素御孝心深カリシ君ニハ二年前ニ御兩親ノ膝下ヲ離レシマ、ニテ遠キ異境ニ於テ御兩親
ニ先ダタルヲ何ヨリノ遺憾ニ思召スコトデアリマセウ深く御同情申上ゲマス。併シナガラ君
ハ御在米中常ニ御兩親ノ御期待ニ副フベク最善ヲ盡シ忠實ニ子トシテ爲スベキヲ爲シテ居ラ
レマシタ。御夭折ハ天命デ致シ方アリマセヌ。恐ラク御兩親ハ御悲嘆ノ内ニモ君ノ御在世中
ノ御孝養ヲ嘉セラレ必ズヤ御満足遊バサレ此先トモ之ニヨリテ自ラ慰メテ居ラル、事デアリ
マセウ。マタ御令妹ハ君ニ代ツテ今後ノ御孝養ヲ勵マル、事ト存ジマス。

マタ御心残りノ日米學生會ハ恐ラク君ナキ後ニモ君ノ精神ハ繼承セラレテ益々發達ヲ遂ゲ
必ズヤ日米親善ノ將來ニ良果ヲ齎シテ君ノ御功績ヲ永久ニ傳フルコト、私ハ確信致シテ居リ
マス。

希クハ君瞑セラレンコトヲ、

茲ニ謹ミテ衷心ヨリ深厚ナル弔意ヲ捧ゲマス。

昭和六年九月十一日

臺北高等商業學校教授

川田長兵衛

弔詞

悲ミノ極ミハ死ノ別レ。百歳ノ壽ヲ全ウシテ去スルモ悲ミ病ニ臥シテ千萬ノ看護ヲ竭シテ空シキモ悲ミ嘆クモノヲ。マシテ春秋ニ富ム身ノ獨リ淋シク異國ノ地ニ歿スル。何ノ悲ミカ此ニ加ヘン。

回顧スレバ君ガ洋々タル希望ト遠大ナル抱負ヲ胸ニ北米ニ遊ビシヨリ既ニ二年多大ノ收穫ヲ以テ祖國ニ錦ヲ飾リ生等ヲ指導啓發シテ相共ニ實業界ニソノ鵬翼ヲ張ラン日ノ將ニ近カラントシテ俄ニ病ヲ得テ忽然彼地ニ歿セラル。

聲咳尙耳朶ニ残り温容前ニ映ズ。然モ幽明早境ヲ異ニシテコ、ニ長ヘノ別レニ立テル吾人ノ悲嘆ト寂寥ノ感。之ヲ述ブルニ全ク辭ヲ知ラザルナリ。

今日葬儀ノ末席ニ列スルニ當リ君ガ臨終ノ意中ヲ推シ御兩親ノ心中ヲ察シテ自ラ斷腸ノ思アリ。

同窓生一同ニ代リ謹ンデ此ニ哀悼ノ意ヲ表ス。

昭和六年九月十一日

凌霜會第二十三期生總代

豊田三男 二

弔詞

謹ンデ故大岡明君ノ靈前ニ捧ゲマツル。

君ガ訃報ハ全ク我等學友ヲシテ陰慘ナル驚愕ト悲歎ニ包マシメマシタ。

啞然唯自失スルバカリデアリマス實ニソノ寂寥ハ名狀シ得ルモノデハアリマセン。唯若キ英靈ト等シキ血ノ所有者ニシテ初メテヨク味ヒウル哀傷デアリマス。

思ヘバ拾餘年ノ昔北野ノ校門ヲ歡喜ト希望ニ滿チテ潜ツテ以來五星霜。教室ニ、運動場ニ校外ニ又校内ニ幾多ノ純情ノ契リヲ結ビ固ク團結シテ離レ得ナイ心ノ集ヒコソ我等ガ力デアリ矜デアツタノデアリマス。今ソノ結盟ニ叛キ獨リ永劫ニ旅立ツタ故人ヲ且ツ恨ミ且ツ惜ミンノ餘リノ早逝ヲ託ツノデアリマス。

故人ハ高潔ナル人格ト崇高ナル情操ノ持主デアツテ學事ニ庭球ニ又洋琴ニ堪能ナル多才多能ノ稀ニミル好人物デアリマシタ。

大正十四年三月 北野中學校ヲ卒業スルト同時ニ神戸高等商業學校ニ入り昭和四年三月。同校ヲ卒業スルヤ更ニ研鑽ヲ志シ同年七月三十一日神戸出帆アメリカニ向ヒ同年九月。インデアナ州ブルーミントン市インデアナ大學ニ入學。商工經營學ヲ修メ昭和五年五月之ヲ卒業同年九月更ニ紐育大學ニ移リ昭和六年五月同學ヲ卒業後同年七月十日ニユージャシー州オーシャンシケ―ニ滞在中偶々病ヲ得。直チニ同市アトランチック、シヨア、ホスピタルニ入院加療セシモ藥石遂ニ効ヲ奏セズ同年八月六日午後五時半（日本時間八月七日午前七時半）不歸ノ客トナツタノデアリマス。享年二十四歳 誠ニ愛惜ニ耐ヘヌ次第デアリマス。

雄圖空シク挫折ヲ餘儀ナカラシメタ故人ノ心事ヲ諒察スルニ餘リニ悲憐。嗚咽止ミ難キモノアルノミデアリマス

我等ハ百餘ノ同期生ヲ代表シ故人ノ靈ニ跪キ敬ンデ哀悼ノ誠意ヲ披瀝シテ以テソノ冥福ヲ祈ル次第デアリマス。

昭和六年九月十一日

北野中學大正十四年度卒業生

趣味會

弔詞

噫今ハ亡キ長友大岡明君

維時昭和六年八月七日飛電突如トシテ君ガ訃ヲ致ス眞ニ是晴天ノ霹靂吾等ガ驚歎一時己ガ耳朶ヲ疑フ。然レ共噫然レ共如何セン悲報ハ遂ニ夢ニ非ザリシヲ噫 吾等ガ痛惜何ゾ之ニ加ヘン悲シイ哉。

君曩ニ吾ガ筒井ヶ丘ヲ降ルヤ尙洋々タル青雲ノ志笈底深ク秘メ衆望ヲ擔ヒテ遠ク米國ニ遊ブ。爾來ニタ歳君健在ノ便リニ接シテハ輒チ吾等ノ集ヒ君ガ噲ニ時ノ過グルヲ不知。一同再ビ此ノ茅海ノ邊ニ業成リ名遂ゲシ君ト相語ル日ノ一日モ早カラシコトヲ期セリ然ルニ君何ゾ夫溘焉トシテ逝ケル悲イ哉。噫圖ラザリキ炎熱灼クガ如キ過ニシ夏ノ神港埠頭暫ノ別レ今ハ永遠ノ別レニナラントハ噫痛シイ哉。

君資性温厚ニテ才想喚發言行恭虔ニシテ友情又至誠ニ出デザルナシ。吾等君ト親交ヲ得ルニ至リテヨリ茲ニ幾歳益々君ガ人格ニ畏服スルト共ニ君ガ誘掖ニ負フ所頗ル多ク又君ノ未來ニ期待スル甚ダ大ナルモノアリシニ君今ヤ倏忽トシテ吾等ト幽明其ノ境ヲ異ニス。

嗚呼風雨ニ散ル花ハ又開クノ春アリ虧クル月ハ猶滿ツルヲ得ベシト雖モ君一度ビ去リテ又不歸噫悲イ哉。

萬感交々胸ニ迫リ云フ可クシテ云フ可カラズ今ハ只君ガ英靈永久ヘニ安ラケク眠ランコト
ヲ是祈ルノミ噫痛シイ哉。

此日此時筒井ケ丘樂園君ト刎頸ノ交ヲ爲セシ吾等一同君ガ祭壇ニ臨ミ裊袍戀々哀愁更ニ新
ナルモノアリ。茲ニ謹ミテ蕪辭ヲ陳ベ以テ君ト永遠ノ訣レヲ惜ム翼クバ彷彿トシテ來リ饗ケ
ヨ。

昭和六年九月十一日

筒臺ノ友ヲ代表シテ

茅 田 恭 兄

代らむと祈る命は惜しからでまでも別れむことぞ悲しき

赤染衛門

撫子に憐れならぬはなかりけり後れ先立つ花はあれども

佐々木丈雄

御 悔 み

米國アトランチック、シチーにて

橋 爪 與 作

(前略)去夏不思議な御縁にて令息明様には當店の仕事を一時御手傳ひ願ふことに相成御來
店勿々より御精勤の程乍蔭感激致居候處七月十日突如發病せられ實に驚入申候早速當地方に
て信用ある醫士の診察を乞ひ相談の結果即時入院療養に勉め候ひしも其後の容體一進一退に
て實に案ぜられ候儘日本綿花紐育支店岡田様の御來市を仰ぎ如何なる犠牲を拂ふとも人力を
盡して萬遺憾なきを期し最善の療法を講じ候得共其甲斐なく不幸遂に夭折せられたるは實に
残念至極悲嘆の極みに御座候。運命とは乍申前途有爲の青年を海外萬里の異郷の空に空しく
客死せられしには實に名残惜しく諦めんとして諦らめ得ず悲泣に堪へざる次第に御座候殊に
小生の如き先年七歳になる愛兒を亡くせし悲嘆の境遇にある身として衷心御兩親始め御親族
の御心情を御察し申すに餘りあり御病氣中にも吾事の様に感ぜられ只氣あせれども如何とも
爲し能はず事茲に至りたるは實に御氣の毒に堪はず衷心より御悔申上候

小生の日常友人に對して小生の觀念として御話申す如く親の情として我子の幸福と一時も

永く共存を希望するは最大願望なれば其愛兒が現世人生の俗界を去り眞純の光明ある他界に上佛し永久に冥福せし故人の果報を思へば一時も永く共存を願望する吾等凡人の我慾を制するは故人の永久冥福を思へば些細なる犠牲なること、存ぜられ候。(後略) (六、一〇、二四)

御 悔 み

在 紐 育 市

上 田 金 作

(前略)偶然の事より私が明君と同郷の事を發見して以來親交を致しました。外國生活は華やかな様に見えて裏面に淋しさを感ずるのは日本に居らるゝ人々の想像だに及ばないのであります。従つて日本の人に會ふ事も兄弟に會つた様な、つかしい感情をそゝるものであるのに、明君と私は同國の上に同郷の爲、身分の相違教育の相違或は年輩の相違等を超越して親しい交りを致しました。

私は腕と脚とで働いて生活、苦と戦ふもの、明君は高い理想を以て勉強せられる人、近代の思想から云へば兩極を行くものでありませう。

願れば去年の正月元旦、此の兩極が米國は紐育の私のむさ苦しい住居に會ふたのであります

明君が餅を焼けば私が鳥を切る、煮豆、數の子迄も調理して共に新年を祝ひました。明君の曰く「あゝ、有難い」。紐育まで来て雑煮で新年を祝へるとは。」

私は之を聞いた時には涙が出ました。身には何不自由ない御人にも環境が違つて來ると煮豆一粒に對しても此の様な感情の浮ぶものでせうかと。

明君自動車で米大陸を縦横に走られて、行く先々からの來信等は今は早形身となつて私の手に残りました。

私の如き學無く才に乏しい者が、明君の様な學才共に秀でた人に「オイ君、僕」等と交り得たのは只、彼に眞實あり、是に信義の有した爲、即ち「朋友相信じ」得た爲で、明君の御不幸の報を得た時は、實に落膽致しました。

明君は逝きました。が私の記憶には永遠に生きて居られるのです。

此處に謹んで君の靈を弔ふと共に、御家族様の御歎きの程も御推察申上げて遙かに御慰め申上度いと思ひます。(昭和六年十二月二十日)

御悔み

紐育日本綿花會社出張所

横手 截

(前略) 故明様には一、二度御來店の折御目にかゝり其後餘り御立寄無之唯御勉學に親み居られ候由洩れ聞き居候處突然去七月十五日重態にて入院の趣拜聽社員一同驚愕岡田君早速御見舞に上り其後も隙ある毎に上田君も御伺申上候得共何分夏季にもあり御重症にて御衰弱日に増し主治醫専門醫日本人醫師巖本氏等夫々手を盡したるも遂に不及御長逝被遊候段誠に遺憾の極と被存候何分紐育とは遠隔の地且つ社員手薄の折柄手の及ばざる處ありしも知れざれど當社員一同心より御快癒を祈上げ殊に岡田君は眞實の弟の如く親身より世話され御夭折の報を聞き申候て涕涙止まず傍の我にも思はず貰ひ泣き致したる次第に御座候御罹病以來逝去までに至る經過に就きては岡田君の報告と重複を避け唯故明様御友人より聞き及び候件左に申上度候

御來米以來人一倍御勉學成人の二年にて修學する處を一年にて修業されし程の御秀才にて且つ御勤勉相成りたる由又經濟に對して非常に興味を持たれ常に米國經濟界の状態につき

御研究相成殊に株式界にも御研究深かりしと聞き及び候幸ひ天壽を全ふされしなば定めて尊父の名を辱めざる實業家となられし事と被存候。又非常に御遠慮深く當店などにも餘り立寄るときは仕事の邪魔をしたり又厄介をかけるような事あるも知れぬ故遠慮するとの事を度々友人に洩らし居られたる由聞及申候。

去八月九日 Campbell 葬儀社内 Chapel にて大堀牧師司祭の下に告別式をなし Grendale Long Island Fresh Pond Crematory に最後の御供仕り故人の冥福を祈りて靜に歸宅仕候最後の御寫眞にても御覽の通り誠に安らかなる靜かなる眠りにおはす様見受けられ八日夜御通夜の志を家内と共に故明氏と同室致候折家内も本當に今にでも物を言はれる様ですねと申す位死の苦しみ等影にも見へ不申安心成佛され候事と御推察申上候。

以上千言萬語を費すとも何分遠く異郷に來り單身にて病を得御身寄よりの看護を受け不得御昇天被遊候心事を考ふるとき又天地に換へ難き御愛兒を異郷に於て御重病の報を聞き御看病もなし不得唯々天命を待ち又御長逝の悲報にも接せられ死水も取るに由なき御兩親様に並に御家族様の御心事を思ふとき何等御弔詞申上様も無之次第に御座候。(後略)

御悔み

紐育日本棉花會社出張所

岡島美行

(前略)去七日着紐仕候然る處出迎を受けたる岡田氏より停車場にて御令息明様病氣にて色々手を盡したるも遂に其効なく小生到着の前日六日に逝去被遊候旨聞及び愕然と致したる次第に御座候。

出發前色々令息様の事共御話を聞き居り今度來紐と共に御言葉に甘へ何にかと御泥懇に願度存じ居候に不拘既に幽冥境を異にし居たる譯にて何と申して御慰め申すべき言葉に苦しみ居る次第に御座候。

丁度七日の日は御遺骸を Ocean City より取寄せる段取出來翌八日には告別式有之小生も御遺骸に始めて接し悲嘆の情を新にしたる次第に御座候七月中旬出發の時には御健やかな御顔に接し得ること、樂み居たるに何ぞ圖らん斯る變つた御姿に會ふことは實に堪へ得ざりし悲しみに御座候ひき。

遠く離れて此悲報に接せられたる御兩親様を始め御近親の方々の御嘆き如何ばかりかと御

察し申上げたる次第に御座候次で翌九日葬儀有之誠に壯嚴に營まれ小生も末席に列せさせ戴き式終りて Fresh Pond Cemetery にまで御供させて頂きたる次第に御座候。

御病氣になられたる以後の詳細の事情については既に岡田氏より此通知相成候筈に付御承知の事と存候が葬儀當日大堀先生が御説教なされし御言葉の中に明治の初年に日本より留學せられし先輩にして(日本の名家の子息達)空しく異境に逝かれし人々の御墓の話をせられし今回の御不幸も之等の人々と同様『我國の發展てふ重大なる任務を背負はれて戦死せられし勳功は我々として忘る可らざるもの、此意味に於て家郷の御近親の方々にも立派な戦死者として考へ慰むべき』ものと諭され申候事を茲に簡略に申上げ度存候。聞けば Indiana 大學に於ては非常なる立派の御成績にて Professor Kennedy も明君の優秀なる成績と立派なる人格を會ふ人毎に推稱せられ居るとの事にて又紐育大學にても御立派な成績にて近く M.A の Degree を得らるる筈なりしとの事何とも惜みても餘りある次第に御座候得共之等立派な御人格と御成業は必らずや幾多の同輩後進に偉大なる感化を與へ彼等を發奮せしむる楔機を與ふるものと被考候次第、従つて大堀師の前陳の御話の如く決して意義なき長逝にては無之寧ろ榮譽ある御不幸ならんかと一面被考候次第幾等申しても悲痛の情は打消され得べきにあらざる次第に御座候得共何卒此際大悟して御諦觀を得られ候様吳々も御祈申上度存念に不堪候。(後略)

御悔み

紐育市 日本綿花會社

上 田 清 一

(前略)不幸にして明君其後の經過悪しく遂に去八月六日午後五時半 アトランチック、シヨア、ホスピタルにて眠るが如く他界遊ばされ眞に言葉を以て御悔申上ぐる方法もなく故國に於ける御両親御弟妹の事ども思ひ眞に涙に暮れ居る次第に御座候。

病氣にて御入院中は毎日岡田氏と共に其對策について相談仕り他方橋爪氏の方より日々病狀の報告あると共に當方よりも電話にて病院に經過を問合せ又巖本ドリターに依頼して先方のドリターに病狀を問合せ戴くなど日々其容體に注意仕居候處其後經過渺々しからず色々手當仕候得共藥石効なく三名の醫者の努力も効なく遂に春秋に富む身を以て異國の土となられ候は眞に哀悼に堪へず深く御悔申上候。

葬送萬端滞りなく終り候が詳細岡田氏の手紙にて御承知被下度候。

御就病の時より葬送に至るまで當方としては萬端遺漏なき様手配仕候も天命致方なく小生も今回程人生の悲哀を感じたること無之候。

明君は在學中勉強が餘り過ぎたことは事實の様にて學友諸氏の話では、コース等も多く取り過ぎ、勢ひ勉強に無理せざるを得ざる立場にありしやうに被考候。而しその篤學温厚なる性質 Japanese American Students Club の創設者として紐育大學の寵兒たりし由にて善良なる學生として一般に評判良く前途大に囑目せられたるに拘はらず僅かに二十四歳にて夭折せられしは返へすくも残念至極に奉存候。

御両親に取りては御長男でもあり、こゝまで御仕込になりたる上長逝せられては眞に斷腸の御思ひの事と存じ候得共今となりては取返へすべくもなく天運と諦らめんとするも諦らめ得ざること、存候得共何とも致方なく嘸かし御落膽御心痛の御事に候はんも餘り御心痛の上御體に障る様なこともありては却て故明君の御傳言にも反すること、存上候間何卒御自愛の程遙かに御祈申上候。(後略)(六、八、十一)

御悔み

大連滿鐵地方部學務課

秋 山 眞 造

(前略)承者先般米國にて御勉學中の令息明様御病氣にて遂に逝去被遊候由驚入申候實は昨

年三月歐洲よりの歸途滯米三ヶ月其間二ヶ月程賢息御寄宿のインターナショナルハウスに在宿二十名程の日本人中隣室に居たる爲め日夕其聲容に接し殊に御世話に相成申候白哲玲瓏の青年學徒として尊敬致し申候。當時

高松宮兩殿下御來米コロムビア大學の大圖書館前にて御一緒に奉迎致し其折寫眞機御携帶四五兩殿下の御姿を許を得て撮影相成り甘く行かなかつたなど申居られ候其折小生のも御撮り被下先般も取出し當時を回想致し家内などの能く撮れて居ると申したる事に候其當時の御話にては御許を得て更に一ヶ年勉學を續けると申され私も折角御勉學をと御奨め致し候次第に候

四月末お別れの時特に御令息の名刺を戴き其節「父が神戸に居るから御歸りに序でがあつたら」など申され御住居の番地など頂き申したる事に候私は去六月初横濱着神戸にも一寸立寄り候も思ひながら時間なくて其儘歸任を急ぎ失禮致したる次第に候。

御面會當時多少御疲れの様子何か試験中にて夜分などタイプライターにて勉強の様子に見受け候私は國から御送りの日本新聞を拜借致し非常に便宜を得し事など有之逝去と聞きて實に感慨無量の念に不堪候。

異郷にての御罹病何程か御不自由なりしならんと想像するだに御同情に不堪候青雲の志を懷きて天涯萬里の外に思へば萬感胸に迫るもの有之候御兩親様の御胸中如何ばかりかと拜察

致し何と申上様も無之候此後は安らかに故郷の地に眠らせ給ふ御令息の冥福を遙に御弔ひ申上候のみに候。(後略)(六、一〇、一〇記)

御 悔 み

比律賓群島マニラ市
大同貿易株式會社支店にて

豊 田 恭 三

本日遙々郷里よりの手紙は悲しくも御令息の計報を同封して参りました。餘りの意外にとうしても信ぜられません。神戸高商在學中殊の外親しく交つた僕卒業後間もなく遠く異境の空にて東と西に別れ互に旅情を慰めてゐた僕として其の悲しみは到底筆紙に盡せません。大岡君と心の裡にて叫べと再び顔を會はず事が出来ないかと思へば熱き涙はひつきりなしに頬に傳はります。卒業記念のアルバムや君より戴いた手紙を繰り返して見たり讀んだりして居ります。君の追憶は走馬燈の様に頭に浮びます君より戴いた最後の御手紙は昨年の拾壹月卅日附の御便りでありました。其には

僕も元氣で勉強してゐる。去る六月インデアナ大學を卒業した。其後夏休はオハヨー州で過ごした。今は紐育大學に入學し勉強してゐる。マニラの生活は如何です。御機嫌よう。

と親切なお便りを頂戴致しました。其後お便りを差上げたいと常に思ひ乍らも今日まで失禮して居りました。如何なる御病氣であつたか存じませんが、御病氣とも存ぜず御見舞状も差出さず残念で耐りません。嘸異境の空で心淋しく、御他界された事と御察し致します。

君は在學中音楽の天才であり又語學の俊才でありました、講堂のピアノの前に坐られた君の姿は目の前にちらつきまします。語學部に居りました僕としては時々君に御願ひして或は大坂商大へ、或は基督教青年會へ、或は大毎ホールへ出場願ひプログラムに参加して戴きました。

又愚生が卒業直後マニラ支店轉勤の節は、わざわざ米利堅波止場まで御見送り下され又元氣で再會しようと堅く手を握りしめたのもつい先日の様な氣が致します。内地在勤の身なれば早速馳せ参じ御悔み申上げ御經過も色々御承り致し度う御座いますが海外在勤の身とて儘にならず、誠に残念で御座います。

遙か南洋の地より今は亡き大岡明兄の靈に永久に冥加あれと祈ります。(後畧)(六、九、三)

御 悔 み

上 田 源 三 郎

あ、此の八月には實に待設けざる人生の最大不幸があなた方御夫婦の上に来ました。私

は元より數ならぬ友人の一人ですが、それでも御夫婦の御心事を御察しては、實に御目にか、つて云ふべき言葉が云へぬのです、唯々止め度もなく涙が流れるのです。此の夏には息子も歸つて來ると云ふて居られた、御主人の御言葉は未だ私の耳に残つて居ます、だのに、歸つて來るは來るが骨になつて歸つて來られるとは……之が泣かずに居られますか。

望月さんが中野正剛さんの息子さんが山で急死せられた時に「君コンナ時には泣ける丈泣き給へ、泣いて泣いて心ゆくまで泣き給へ」と云はれたとの事ですが、私は此の言葉が此の際最も實際に即した慰問の言葉として最上の物と思ひます、どうか泣いて泣いて泣き抜いて下さい。そして後初めて佛者の所謂「あきらめ」の境地に到達する、事でせう。

されど世の中には過日の間中さんが言はれた様な、小西老の話された様な不幸な悲惨な境遇の人も數多いのです。

決して天は大岡御夫婦丈けに迫害を加へる筈がありません。

何等冒せる罪惡なく、頗る虚心坦壤の人事を盡して來られた過去五十有餘年何んでそう苦しめらるゝ事が續きませうか。

續いて來る事は幸福です、光明です。

どうぞ泣ける丈け泣いて、そして後心頭一轉、早う御息女に御養子を迎へて笑ひの方面に邁進しよではありませんか。

之が泉下の御令息が御兩親の爲めに願ひ祈つて居らるゝ處だらうと思ひます。

御忌中二七日——三七日——も過ぎれば暑さも薄らぎませうから、どうか大阪へ來られて不相變の元氣を以て御互に大に話し合つて回春の勇氣を鼓舞しようじやありませんか。(後略)

(六、八、十二)

御 悔 み

松 原 肇

何と言ふ痛ましい御知らせでしょう、私は充分あなたの今の御心持ちを了解が出来る様です又遠い異郷の空に亡くなられた明氏病床の氣持ちをも酌み取る事が出来る様に思ひます明氏の留學そして其近い歸朝期を待たれて居ると言ふ御話しを聞いたのは遂此の間だつたと思ひます。元氣と希望と再會の悦びとを以て歸つて來られる筈の噂の人は只一片の亡骸として寂しく悲しき船路を歸つて來られるのです、何と言ふ運命のいたづらでしょう。でも大岡大人もしも神が唯一の神が明氏の如き清き人格人を御心に召されて天の國に召させ給ふたものならば若き其人の死も運命のいたづらではなくして榮光と祝福との死そのものではないで

しょうか、私は今運命のいたづらとして悲しみを悲しむか榮光と祝福との若き花として神の御心を尊しとするか、只大人の御心の儘だと思ひます。

私は私の心からなる此の手紙を大人及び御令室に献したいと思ひます。(六、八、十)

米侯一周忌

ゆかしさよしきみ花咲く雨の中

蕪 村

一周忌畫像前

秋またぬ人のもぬけを泣日かな

蓼 太

不卜一周忌琴風興行

時鳥啼音やふるきすゝり箱

芭 蕉

遺
稿
篇

渡米日記

大岡明

昭和四年七月三十一日(水)晴

日頃の呑氣が祟り此四、五日の忙しさ。僕は是れまで斯んなひどい目に逢つた事はなかつた。昨夜は最後の準備其他で遅くなつたが今朝は五時半と云ふのに早や眼が醒めた先づ家神様や亡き祖父様に御別れの祈りをする。近所に御別れの挨拶に行く。愈々出發と云ふ事が意識されて來た。午前九時前に宅を出て途中カメラに家族を撮しながら芦屋驛に着く。愈々芦屋の土地も暫らく踏まれない。驛頭には井口、片岡、田中の各令夫人が態々見送りに來て居られたのは恐縮であつた。家族其他多數に擁せられつゝ、三宮驛に着き直に神戸埠頭のサイベリヤ丸に向つた。埠頭は見送客で大に賑つて居る親戚、友人知己多數が態々本船まで見送つて下さつた事を深く感謝する。本船甲板で紀念の寫眞を撮り最後の乾盃をして別れる。やがて惜別の表徴に五色の長いく、テープが送る人送らるゝ人の手に手を繋ぎ合ふ出船の持つ美しい情緒にほろりとなる。斯くて正午本船は汽笛と共にしづく、岸壁を離れて港外に向つた。愈々サラバだ最後の名残りたるテープも船は遠慮會釋もなく引裂いて仕舞ふ。急に淋しさが胸に迫つ

て来た。何處からともなく Good-bye Pleasilly を歌ふのが聞へて来る。彼等の心持が羨ましい。仰けば六甲巍然として中空に聳へ我行を旺んにするに似たり。

此日埠頭に見送り下さつた方々の芳名を記憶を辿りて記し置く。

大塚、小島森下、河村、茅田、大橋(佑)、竹山、岡田、大橋(竹)、中島森、永蓮沼善積、山本、柴田、西中の諸學友
山川、梅原兩氏、潮崎夫人、横尾未亡人(令息二人共)、井上益三様、御夫妻坊ちゃんも)

吉川忠一、吉川敏行、吉川蕃三、川田錦一郎の諸氏、佐藤先生

外に出入りの納多、西村、寺田の諸氏

八月一日 海上平穩途中清水港に寄り午後四時半頃横濱に安着昨年夏北海道行きるとき横濱航路で大暴風雨に逢つて閉口したときを思ひ今年は何かにつけて恵まれて居るようだ、一時間餘の檢疫を終へ上陸したのは六時前であつた、夕食は東京にて濟ませ七時半頃芝の親戚臼井宅を訪問間もなく湯淺恂一君、廣幸君、畑岡君の三同窓生が態々送別の爲め訪れて呉れたのを有難く思つた、惜別の思出に四人で銀ブラをやる、不相變美しい人波だ、久振りに落付いて話をして居る間に時間が経つて早や十一時頃になつて居る、日比谷公園で名残りを惜しみつゝ、別れる夫より臼井宅に歸りて一晚厄介になる。

八月二日 旅の疲れで七時過ぎヤット起床朝九時十分着の汽車で父が見送の爲め上京するのを迎へに行きヤット間に合つた、父と共に市中を見物後第一生命相互ビルの階上食堂で最後

の食事を共にしつ、色々の話をした本船は横濱を午後三時出帆と云ふので食後横濱に向つた、埠頭は神戸同様の賑かな見送人であつた、臼井おば様、小川おぢ様、父上の友人、其他多數の見送りに感謝の胸をおどらし美しいテーブルを引張り合つて暫らくの別れを惜んだ愈々太平洋に乗り出すかと思へば聊か心弱くも感ずる、最後まで名残りを留めて居た伊豆半島も遂に夕暗に包まれてしまつた、最早心弱くては叶はぬ。

八月三日より六日まで 毎日平穩な航海で太平洋を航海して居るとは本當に考へられぬ位實に愉快々々、始めの二日程は食事もソレいけなんだが其後は慣れて一人前を十分戴くようになつた、食事は日本食より洋食の方が良いようになつた、乗客は一、二等共外國人の方が日本人より多かつたのは會話練習に詭向きであつた、日本人も各種類の人が乗合せて相當に賑はしい、學生も六名ほど居た、船中には各種類の娛樂設備があつて色々楽しめるので退屈を知らぬ、夕食後には映畫舞踏など次ぎ／＼に催物があり面白い事だ。

同室の日本人でカリホルニヤ州の農事見學に行く技手らしき人が英語を話さぬのみかエチクエットが分らぬらしく色々赤毛布をやるので腹を抱へた、一度は食堂でバター、ナイフにバタをつけて其ナイフをイキナリ口の中に入れて妙な顔して舐め始めたなどもあつた。

面白いことには船が毎日約四百哩を航走して居るので朝起きて見ると時計がいつの間にか約三十分間づゝ進んで居る。

八月七日 長らく静穩の航海を續けて來たが今朝から少し時化模様で、ピッチング、ローリングが激しくなる。グッドセイラーだと自任して居た僕が今日はすっかり自信を無くして仕舞つた。晝食抜きでデツキチェアーに横つて蒼くなつたが幸に夕刻頃には元氣回復夕食には例もの通りに出た。今夜催される筈だつた船員の Vaudeville 天候の都合上一日繰延べとなる。午後十時頃東經百八十度(日時變更線)を通過するので明日にも亦八月七日同じ日が二日續くのは一寸變な氣がするが説明する迄も無いことだから省略する。

八月七日(第二) 昨日の餘波で波はまだ幾分高い。Mr. G. に Chess を Challenge される。先日此人に教つた許りだが日本の將棋に似て居るので Rule は早く呑みこめる。五回勝負やつて四回まで先生をまかせてやつたので遂に兜を脱いで仕舞つたのは痛快だつた。正午に船客の記念撮影をする。晝からは波も次第に収まりそろく Vaudeville の仕度が始まる。中々の大仕掛で夕方になつてやつと舞臺が出来る。午後八時愈々開幕だ。各等の船客で身動きも出来ぬ程の盛況である。喜劇尺八歌舞伎手品、安來節等何れも上出来。中々の役者揃ひには驚いた。閉幕午後十一時。

八月八日 午前十一時に Midocan で、コレヤ丸に出逢ふ。デツキゴルフ黨一同集りて記念撮影をやる。

八月九日 明朝七時ホノル、入港の揭示が出る。久しく陸を見なかつたので一同大喜び。

何れも Course board を見て待ちこがれる。午後四時頃には右方かすかに Birds Island を認める。今夜は Aloha Dinner で室内はすっかり裝飾され愉快なる夕食を樂んだ。(Aloha とは布哇語でサヨナラを意味す) 就床まで一同とハワイ着後の行動を相談する。

八月十日 午前七時甲板に出て見ればモウ眼前にはオアフ島が展開されて太陽に美しく照り輝いて居た。半時間後本船はホノル、港外で檢疫の爲め一時停船すると大勢の土人が船側に近づき來り銅貨を海中に投げよと叫ぶ。甲板から投げ込んでやると水中深く潜り込み甘くキャッチする様は商賣とは云ひながら實に巧妙のもの。午前九時本船は第七號棧橋に横着けとなる。出帆が午後五時と云ふので悠々上陸見物する。(ホノル、見物の記事は別項に記載する故爰に略す) 數時間の興味多き布哇見物後午後五時愈々サンフランシスコに向つて直航する。

八月十一日——十三日 海上平穩無事、毎日 Eat, Play, Sleep の日課を繰返す。

八月十四日 桑港との距離約七百哩そろく到着の日も迫つて來る。荷物明細書の書き入れや、荷物の取片付け等急に忙しくなる。海流の關係で馬鹿に涼しくなり夏服では少し薄過ぎる位だ。

八月十五日 愈々明日は桑港着、何となくそはくして落付かない。朝から少々波が高い少し氣持が悪るい。甲板は風が、とても冷く外套なしには出られぬ位だ。今夜は Sayonara Dinner

で室内は再び裝飾が施され御馳走が出る。日本人には結構の日本酒までサーヴされる。Dry Countryに入る最後なので大に氣をきかせて呉れる。明日は未明に金門灣に入る豫定なので今夜は久し振りに早く就床。同室のインヂアン Jacob 氏明日は Fisco だくと鼻唄を歌ひつゝ子供をやうにはしやぐのには閉口した。

八月十六日 午前五時半にはモウ眼が覺めた。上の窓から洩れる風が、とても冷たい甲板に出て見ると丸で冬のように寒い。桑港は眞夏でも朝夕は寒い位だと船中で聞かされて、まさかと思つてゐたが此調子では本當らしい。濃霧の爲めに何も見へぬ。豫定より少し後れて午前八時 Golden Gate に入る。鷗が我々を歓迎するが如くに飛び廻る。右に博覽會跡を見ながら徐行する。此時分より霧全く霽れ Abating 島 Angeles 島が左右に浮いて居る、布哇で一足先きに出た日本練習艦隊淺間外二隻が投錨してゐる様はなつかしく心強く感ぜしめる。午前八時半検査官の検査が始まる。之が一通り終ると移民官の訊問に移る。之が最大關門だから勢緊張せざるを得ない。第三番目に呼ばれる。訊問された事項は入國目的、行先、滞留期間の豫定等、最後に在米知人が有るか、と問はれて在 Indiana の外人のことを答へたら桑港方面には無いかと云ふ突嗟に紹介狀持參の横濱正金銀行桑港支配人の名前を云ふと無事に通過した、他の留學生中には英語の試験までやらされたと聞いたが僕にはそれはなく至極簡単にパスすることを得たのは幸であつた。午前十時本船は第卅四棧橋に横着けとなり税關の検査も案外らくに済んで

一と安心、直ちにタキシイを驅つて帝國ホテルに落付く。小規模だが感じは良い、午後正金銀行野口支店長を訪問、明日自動車で市内見物をさせて戴くことになり大仕合せだ、夕刻までに桑港第一の大通をブラ付いた、自動車の多いこと、建物の高いのがヒドク眼を惹く。

八月十七日 正金銀行野口氏の自動車で午前十時半頃から市中見物に出掛ける先づマーケット街を通り人工で名高い金門公園に行つた、長さ五哩歩いて居ては日が暮れる位だ、博物館日本茶園を眺めつゝ海岸に出た、それより桑港市の周圍を一周ホテルに歸つたのが正午過ぎ、御蔭でよい見物が出来た、午後からは大塚君の紹介で對岸オークランド市の秋谷一郎氏を訪ねた昔の川蒸汽のような水車式になつて居る Ferry Boat で渡つた、同氏は太平洋岸第一の加州大學其他を案内され大に歡待を受けたのは有難かつた、異國で同胞の親切にあづかるほど嬉しい事はない。

八月十九日 汽車にてロスアンゼルス市着、オリンピックホテルに到着いた、可成り大きいホテルで桑港は夏服では寒い位であつたが、此地は相當に暑い尤も阪神間よりも凌ぎ良い、八十二三度位と思つた。

竹谷氏より紹介を受けた竹田氏の案内で Exposition Park から博物館競技場（今度東洋オリンピックの開かれる處）南加大學等を見物した、夜は市中の賑やかな場所をブラ付いて見たが流石に繁華のものだと思つた。

八月二十日 今日サンチェゴ市に行くのを都合により見合はせて晝は休養した、夜はプロードウェー街を散歩して話の種に Million Theatre トーキョー映畫を見た、英語の Hearing にマダ慣れないせいかトーキーのセリフが半分位しか分らなかつたのは残念に思つた。

八月二十一日 市から二十哩許り南の海水浴場のあるロングビーチから更に二十哩東のハチングトン、ビーチを見物して夕刻歸館す。

八月二十二日 竹田氏船越氏の案内で羅府郊外ライオンブアーム、バセドナ、リンコロン公園ホリーウッド（撮影所で有名）等を見物す、ライオンブアームには百五十頭からの獅子が飼つてあり其唸なるときの物凄さ全く想像以上だ。

八月二十三日 朝休養午後四時羅府出發二十五哩程離れたウイルソン山（有名な天文臺のある處）に向ふ、夕六時半ウイルソン、ホテル着此山は海拔六千呎で六甲山の約二倍、世界第一のテレスコープが有るので名高い、一寸ブラネットを覗いて見たが中々立派なものだ、其他色々天文臺を見學、又天文の講演をも聴き大に有益であつた。

八月二十四日 早朝起床五時半日の出を拜す、それより雲の波を十分エンジョイす、雲の中から四方の山頂が見へて居る様は丁度瀬戸内海の島々が見へて居るようで誠に珍らしい景色だ、午後二時博物館見物、人顔岩見物、百吋望遠鏡の説明聴講、午後三時半下山、午後七時四十五分發列車で桑港に引返へす。

當カリフォルニア州は果物が誠に豊富で、メロン、オレンジ等連ても日本で味ふ事の出来ない良い味を持つて居るので食後には大にやることにして居る。

八月二十五日 午前九時半桑港着オリンピック、ホテルに入る、正金銀行野口氏宅を訪ねて御禮を述べ午後六時オグデン市に向け出發す、丁度此時世界航空一周の途にあるアノ偉大な獨逸のツエツペリン號が其堂々たる雄姿を日本を経て桑港の上空を賑はしたのであつた、市民の熱狂的歡迎振りは實に大したものと思つた。

八月二十六日 山丘地方を通過大鹽湖上（此橋を通るに四十五分間）を経て午後六時半オグデン市に着之れよりサイド、ツリツツにてソート、レーキ市に向ふ、午後八時同市着ケンヨン、ホテルに入る。

八月二十七日（火） 有名のモルモン寺を見物す、正午同寺にある世界一の大きなバイブ、オルガンを謹聴すること三十分満堂をゆるがすような大きな音が出るかと思ふと、忽ち聞き難い位の小さい音も自由自在に出る、此處で日本人二人に逢つた、一人は東京キリスト教青年會館菅儀一氏、他の一人は羅府日米新聞主幹有富虎之助氏、兩氏より色々厚意ある言葉を得たのは嬉しかつた。午後二時半の列車でオグデン市に向ひ一時間の後同市に歸着、オグデン公園見物の後午後六時五十分オグデン發市俄古市に向つた。

翌八月二十八日の一日間は廣漠たるコーン、フェールドを車窓より打眺めつゝ、ヒタ走りに走

り抜いた。

八月二十九日(木) 午前九時十五分市俄古市に安着Y、M、C、Aの島津岬氏を訪ひ二三日間滞在を承諾せられ大に仕合せした。當市は紐育市に次ぐ大都市で人口三百萬人以上今夜繁華区域を見物す、流石に耳目を驚かすものが多い。

米國に渡つてから早や半月にもなるが話す方より聞く方が六つかしいので一骨だ。汽車中에서도色々な人と話して見たが、人々によつて中々聞き取りにくいものがある。次に列車内の食堂だが、逆でも値高いのには驚いた。肉類一皿それにパン、紅茶、果物で大抵一弗半(約三圓)は十分かゝる。米國では凡て右側通行だ。大道を歩いて能く人にブツ付かることがあるが、そんな時は大抵左を、通つて居る習慣は中々治りにくいものだ。又電車を待つとき、左右を間違へて時間を損すること、が度々ある。併しマダ赤面するほどの赤毛布は一度もやらない。一ツ滑稽だつたのは汽車中で子供と話をして居るとき White Negro かと尋ねられたときで餘りのことに思はず吹き出した。成程子供等にはそんなに見へたのだらう。

八月三十日(金) 第一に世界的に有名な大百貨店マーシャル、フヒールド及通信販賣店モンゴメリー商會、ソレから今一つ世界的に有名な屠殺所(ユニオン、ストック、ヤード)を見學した。此屠殺所は驚く勿れ日々牛七萬五千頭、豚三十萬頭、羊二萬八千頭、馬七千頭を收容することが出来、之を午前九時より午後三時迄に全部肉にして仕舞ふのだ。すばらしくも亦恐ろしい、見るこ

と一時間にして、ミシガン湖岸を見て歸る、自動車の多い事實に驚くの外なく、一分間に通るのが八十臺を數ふる道筋もある。

八月三十一日 午前我帝國領事館に行き渡米届書用紙を貰ふ、リンコルン、グラント、ジャクソンなどの各公園を見物、又市俄古大學の建物をも見る。

斯くて四日間に亘り大市俄古市の見物と見學とを有益に過ぎした、而かもタキシイに乗らず電車のみで安上りに濟まし得たのを喜ぶ。

九月一日(日) 午前九時市俄古市出發、インディアナ州ブルーミントン市に向ふ、之れで愈々目的地まで行けるかと思ふと嬉しい氣持になる、汽車は〇日畑を南へくと走つて午後三時半目的地たるブルーミントン市に安着した、驛で早速芦屋へ電報を打つ、驛の事務員が今度學校に來られたのだらうと云ふ、桑港より送つた荷物が、もう來て居ますよと注意して呉れる、スミス先生の紹介先ハナルソン氏宅を尋ね廻はつてヤット落付く一萬哩近くの大旅行を三十二日目に終つたのだ、其間鼻風邪こそ一寸引いたが大事無く通せたのは全く祖母様兩親を始め石田先生の御蔭だと感謝しつゝ、疲れた身體をベットに横へたのは夜半頃であつた。

九月二日(月)晴

大旅行で疲れた上に昨夜遅く寝んだので今朝は大分朝寝坊をやつた。

今日は Labor Day で何處も休みだと宿の主人が注意して呉れたが、せめて今度入學する大學

の校舎を外部からでも見て来ようと出掛けた、随分廣いので、すっかり足が棒になった、喉も負けずに喝を訴へるので近くの Cafe に入つて Orange Juice と一片の西瓜を味ふ其美味しかったことと逆でも忘れられぬ。

九月三日(火)晴

日本よりの郵便のことで郵便局に出掛け依頼し置く、昨日能く分らなかつた大學の Commerce Hall を見に行く、今度から此處で勉學するのかと思ふと何んだか早く授業を始めて欲しい氣持になる。

帰宅して驚いたことには宿の主人が置手紙をして「急用で一泊泊りに外出するから留守中宜しく頼む」とのこと、やつと三日前に来た許りの自分を信頼して留守を頼んだのは有り難いようだが考へて見ると廣い家に一人ほつちでは随分心細い氣がする、併し之れも良い修養だ夜は如何にも淋しいのでピアノを盛んに弾いて見る、今になつて樂譜を日本より持つて来なかつたことが悔ひられる。

九月十六日(月)晴後雨

ブルーミントン市到着後十六日目の今日、愈々インディアナ大學の Enrollment の日が来た割宛てられた課目の教授の處へ行き Sign をして貰ふ。

午後七時から Psychological Examination が始まる試験問題は都合五問題だったが不幸にして出

來榮が良くない、日本代表の自分として聊か耻入る次第だ、今日の心理試験の失敗を取返へす爲め大に馬力をかけ、人々をあつと云はせる位にやつて見たいものだ、と堅く決心する。

九月十九日(木)晴後曇

今日は朝から晩まで續けさまに勉強した、それで身體が大分草臥れた、身體を弱らさぬよう今から運動を考へて居る、父上からの注意もあるのだから、兩方面に有効な様な工夫をしなければならぬ。

九月二十七日(金)曇

今夜七時半 Students Building に Cosmopolitan Club の Meeting が催された、流石に米佛、露伊、印、フィリピン、朝鮮等各國のものが多數集つて居る、色々の人に紹介して貰ふ、座長が開會を宣し一同に夫々希望を申出て貰つてから Play に移る、先づ第一に Violin の獨奏、それから Name 宛て、椅子取り Jacob 等をして最後に Club Song を合唱して閉會になつたのが午後十時、今日は實に愉快に一夜を過ごすことが出来た。

十月一日(火)晴、小寒し

今日から愈々十月に入つたのだが急に寒さが身に沁みる程でもないが少し薄寒さを感じる位だ、もう此夏服にも暇をやらう。

待ちこがれた日本の新聞が来た、ゆつくり楽しんで讀む、久振りに日本の状態を詳しく知り得て

懐かしく思った。レインコートを求めに出たがどの店も大きなもの許りで閉口して、すこ／＼歸つた。

十月二十三日(水)雪

朝起きて見ると一面の銀世界に驚いた、神戸邊より凡そ一ト月以上は時候が早いと思ふ。

今日は水曜日で Convocation のある日、Pianist Prof. Hoffzinner が三曲許り演奏される、中々の上手だ、殊に Variation は美しい曲だと感心した、ひどい吹雪で圖書館から Commerce Hallまで歩くのが中々大變大冬になれば囁困ることだらう。

今日は新下宿の Welch 氏宅に引移る筈だったが此吹雪で一日延期することに決め、此由電話で斷つた、渡米後始めての通話果して甘く通ずるか心配したが幸にどうやら分かつて用が足せたので、ホット安神した。

十一月二日(土)晴

昨夜 Cosmopolitan Club の席上僕は「日本に就て」約三十分間下手な英語でお話をした、處で今朝の學校新聞を見ると其第一頁に「Ohoka Speaks on Japan」と云ふ大きな見出しで記事が出て居るのを見て耻かしいような愉快なような氣がした、追々スピーチの上達するよう心掛けよう。拂曉頃に母上が態々米國まで尋ねて來られた夢を見たが何か變つたことでもなければ良いがと心配でならない、尙外に高商時代の友人の夢も見た。

十一月十一日(月)晴

今日は Armistice Day だ、晝から學校の Gymnasium に行つて見ると何れも Military Uniform を着けて居る、午後一時半 Jordan Field で檢閲があり、此日の Activity の皮切りがある、樂隊(College Band)まで揃ひ中々大層なことだ、銃は日本のそれより小さく又輕そうだ、どうしても日本の學生の方が確かりして見へる、銃を下す時など何んだか出鱈目をやつて居るようにはしか見へぬ、又眞赤な(Crimson)色の服を着た看護卒とでも云ふべき Attractive なのが三名、各中隊毎に一名宛割宛てられる、兵隊に女が入るとは米國でなければ見られぬ、あたりは見物人で一パイ、順次に行進を始めて Gymnasium に入る、そこでは退職將校の講話があつて終つたのが午後三時。

十一月二十八日(木)雪

今日は Thanks Giving Day だ、朝から降り出した雪は晝まで止まず、一面の銀世界となつてしまつた、丸で神戸邊の十二月頃の時、候だ、明日は Indianapolis に遊びに行くことに友人と約束をして居るがどうか天氣になれば良いが……

夜は久振りに Down town の Potluck に行く、Mr. Shafer に逢ふ、例の商業部の同窓生は矢張働いて居るのを見た、中々感心だ、勉強傍らだから中々大變だ。

今日體重を量つて見たら外套を着た儘で一一〇封度あつた、恐らく正味一一〇〇封度位のものだらう、一向に肥えないのは閉口だが、これも身體のタチなのかも知れぬ。夜歸宅する下宿の主

婦が又 Cushion の新しいのと取換へて呉れた、今度は赤いのだ、西洋人向きとでも云ふのだらう、日本人が見れば女のようなだと思ふだらうが。本夜両親に長文の手紙を出す大分當方の事情を詳しく記して置いたから満足されること、信じて居る。

十二月三十一日(火)曇、後雨暖

今日は愈々昭和四年にもお別れだ、月日の経つのを今更ながら其早さに驚かされる、當地着以來丁度四ヶ月此調子で行けば三ヶ年位、譯けなく過ぎよう。

二十五日のクリスマス當日は大雪だったが其後暖かい天候続きで嚴冬の季節とも思はれぬ位に凌ぎ良く、これで正月を迎へるのは有難い、今日午後三時過年賀の祝電を留守宅に出す。

本夜出納計算の締切二時間を取つて遂に十二時除夜の汽笛が鳴り響く頃漸く終つた。過去を回顧してゆつくり感想を書きたいが時間が無いので止める。さらば昭和四年よ。

昭和五年一月十六日(木)曇

正午少し過ぎ日本からの電報だとして郵便局の電話で「父病氣歸國せよ 小千代」と云われたときには全く青天の霹靂で頭がガン、として途方に暮れた何にも手につかない、電文の終りに母上の名前があるからには間違ひではあるまいが夫れにしても餘りに突然而かも簡単に過ぎるので爲念一應問返へし能く確かめてから歸國準備に取り掛る積り、學業半ばに歸國せねばならぬのは残念至極だ神よ願はくば今日の電報をして虚報たらしめ給へ。

一月十七日(金)後雪寒

不安におそはれつゝ、兎も角登校したが講義が一向耳に入らない、二時間目の時、重大電報が來たと云ふ宿の知らせに早速無我夢中で走り歸り、おのゝきつゝ、郵便局の電話を受けたが嗚呼神に謝す我父は始め肺炎中に腸出血の疑ありしも後に痔の出血と判明し今は致命の懸念なし歸國に及ばず云々の好音！ 昨日に變る今日の喜び早速心配をかけた先生や知人の處に飛んで行き好ニュースを傳へ一同と共に安心する、御蔭で能く眠れる。

一月二十九日(水)曇

今日床上げた安心せよとの電報が留守宅より來た、こんなに早くなをられるとは豫期しなかつたので一層嬉しさが深かつた、僕は先日來神様に御願ひして早く御全快を祈つて居た苦しい時の神頼みと云へば良くないが確かに神は「力」だとしみじみ悟つた。

二月一日 父の全快祝の印に「モントゴメリ、ワード百貨店」から電氣按摩器を送る手配をする、屹度喜んで下さるだらう、大に役立つて貰ひたいものだ丈夫であつて貰はぬと心細くてたまらぬ。

二月二十四日(月)曇暖

タラス日本綿花の塚口漸氏夫妻紐育へ行かれる途中態々廻り道をして訪問下さつたには恐縮した、奥さんはもう八九年も米國に居られるそうだが矢張時々日本に歸りたくなるなんて話

して居られた、僅三時間許りの滞在だったが大學や市中見物に案内し最後に僕の下宿にも来て貰ひ半時間程雑談に過ぎた、當地に来て始めて日本人——而かも縁故ある日本人に逢つて久振りに日本語を話し得たのは嬉しかった。

今日父全快後始めての手紙受取る、大に嬉しい、全く安神した、今思出しても大病歸國せよの電報を受取つたときの心持、ぞつとする。

三月三日(月)晴寒し

今日は昨日と同じく馬鹿に寒い、一時に大寒に逆戻りした感がある、それも其筈だ華氏二十度に降つて居る。

今日日本では雛祭りの日だ、嘸美しからう、見られぬのは矢張足らぬ感がする。

河村君から手紙が来た、二週間置き位に呉れるのは嬉しい、僕も之れから努めて出してやらう。

四月七日(月)晴 強風

午後六時半頃から Mrs. Hass 君の International Dinner に御招ばれに行く、學友十數名の會合で「スキヤキ」や印度、フィリッピン料理などに舌鼓を打つ、食後銘々の唱歌や雑談などに打興じて愉快なる一夜を過ごした。

五月七日(水)曇一時雨後晴

九時五十分より愈々 Convocation だ、Orchestra があつてから Hamlin Garland 氏の address. 落付い

て、ゆつくり話されたので遠方からだが能く分り易かつた Topic は "The westward march of the Pioneer" である。

午後四時ケネデー先生宅で、テニスをやる、一時間餘り奮闘の結果は 1-5-0-1 で引分けた、だが先生の方が遙かに強い、僕も Forehand Stroke をへつけば相當に強いのだが、

此間撮つてやつた宿の主婦エルク夫人の寫眞が出来上つたので之を見せた處 Elephant のようだと大に機嫌を損じたのは全くのぬかりであつた、今後こんな場合には十分と氣を付けねばならぬ。

五月九日(金)晴

四月十八日附で日本綿花の社長喜多さんから御手紙を受取つた、餘り丁寧なのに今更驚かさずれ且つ有難く思はざるを得なかつた。

六月十日(火)晴

今日はインディアナ大學の卒業式だ、午後五時半から始まつて七時半頃に終了した、先づオクラホマ大學長の祝辭があつて後學位授與だ、證書は神戸高商のものに比較すると紙は薄いが學位があるだけ増した、僕も "Bachelor of Science in Commerce & Finance" の學位を得た譯だ、宿に歸ると主婦が大に喜んで呉れて裏庭の櫻んほうで Pie を馳走して呉れたが中々結構だつた。

六月十三日(金)晴

久振りに神戸の Roy Smith 先生に當大學卒業の手紙を出し日本出發當時御世話になつた禮を述べる、何んだか重荷を降した様だ。

午後には當大學で色々御厄介になつた教授方に在學中の禮を述べ、此秋から紐育の大學で更に勉學を續ける旨を告げる Rawes 學長も大層喜んで下さつた。

此夏には「オハヨ州ウイロロービー」のケネデー教授邸に厄介になることの快諾を得たので明後日同地に向け出發する筈色々荷物の取片付けに忙しい。

六月十五日(日)晴

今日は愈々出立だ、九時前 Car が来る宿の人 Mr. & Mrs. Welch に御別れする、之が最後かと思ふと懐かしい約十ヶ月住みなれた「ブルミントン」市に名残を惜みつゝ、「オハヨ州クリーヴランド」市に向つた、午後六時半 Cleveland Union Station に到着驛頭には K 先生が弟君と共に出迎ひに来て居られたのは嬉しかつた、同先生の Car で郊外十六哩 Willoughby にある同氏邸に向つた、郊外に出るまでに Park や住宅地の美しい道を抜け、左手には海の如き Erie 湖の廣大なる景色を眺めながら迅走愉快又愉快同氏邸は相當立派なもので郊外でもあり住宅には理想的、北側の前面に大エリ湖を控へ眺望絶佳、同家庭は K 先生と其父母兄弟妹の六人暮して大層親切なのを嬉しく思ふ。

六月十六日(月)雨一時曇

K 先生、母君、妹君と僕の四人連れで六十哩許離れた Oberlin 大學の Commencement に出掛ける、同市は迎ても美しい學校町で、大學建物も中々廣壯、同大學は K 先生の母校であり又神戸商大小川忠藏先生の母校だ。

七月十日(木)晴

米國に渡つてから見たこと、聞いたこと、覺へたこと夥多有るが實の修養は此夏に得らるゝこと、信じ又得られつゝあることを非常に嬉しく思ふ、ブルミントン市では Welch 老夫妻の宅で家庭の一員の如く親しくして貰つたが食事丈けは外部ですることにして居たのだが今は K 先生の家庭の眞の一員の如く何から何まで一緒にして貰つて居る、それで種々の禮儀其他も覺へるには全く好機會だ、家族の皆さんは實に能く働かれる、勿論下男下女に相當するものは雇つてない、第一 K 先生の母上が眞先に立つて働かれ小さい Jenny と云ふ十二歳になるお嬢さんまでが加勢をされる、それが總有る仕事だが、實に感心の外はない、之等は我妹なども大に考へねばならぬこと、思ふ、僕にしても、ほんやりして居る譯けに行かず何にか手傳ひをして居る、こちらの小供さんは何れも大の親孝行で皆自發的に働いて即ち加勢して居られると云へば大體想像は付くと思ふ。

毎日又は隔日には K 先生と一所に近くの「テニスコート」に出掛けて居る、運動も十分に

來るし従つて食事も進み誠に詭向きと云つて良い、又時々は廣く立派な人通りの少ない路で、先生の自働車で Driving の稽古をさせて貰つて居る、此頃では可なり運轉が出来るようになって喜んで居る。

七月十七日(木)晴

明後十九日は父上の誕生日なので今夜後廻電報で御誕生の御祝を出し同時に僕元氣と打電多分十九日の朝には着くだらう。

七月二十一日(月)晴後雨

今日着いた大阪朝日に日本綿花社員四十餘名を解職し山田副社長楠本常務重役が平取締役になられた記事を見て驚いた、日本綿花の將來はどうなるのだらう。

七月三十日(水)晴

今夜K先生家族と一緒にウイルビー劇場に「バード大佐南極探險の實寫眞」を見物否見學に出掛けた、紐育出帆より「リットルアメリカ」發見、南極圏に到達し飛行機より亞米利加國旗を投下する模様其他詳細の映畫に觀衆は全く魅せられた、地球の南端たる南極の雪に蔽はれたシイーンは此映畫ならでは到底見る能はざるもので甚だ珍らしく且つ有益なるものであつた。

七月三十一日(木)晴

今日は昨年七月三十一日神戸港を出帆してから丁度一年目に當る、大勢の見送裡に神戸出帆

愉快なる太平洋横斷次で桑港、ロスアンゼルス、ソートレーキ、市俄古ブルミントン生活等々未だツイ先達の様に思はれるが此一ヶ年間の出來事を靜に回顧するとき、餘り多くの變化否悲喜交々に感慨無量到底筆紙に盡されない。

今晚七時頃からK先生及、先生の兄上と近くのH氏コートに行き約一時間餘(八時過ぎまで明るい)テニスをやり、それからH氏のカメラ(獨木舟)に乗り鏡の如く靜かな湖水を約一哩許りエンジョイした、三日月が湖面を美しく照らし、遠くからは美しい「オーケストラ」の音が響き、此上なきシイーンに酔はさるゝと同時に日本でエンジョイした月を想ひ出し、こよなく懐しく感じ、「ホーム、シツク」を與ふるに十分だつた。

本日須磨御轉宅後の第一信留守宅より到着す、一同無事の知らせに安心す、同封の父上よりK先生宛禮狀を先生に渡すと先生は之を讀んで、*"Very nice letter! I should like to meet your father"*と申して居られて僕は嬉しかつた。

八月二日(土)晴

今日は昨年八月二日一ヶ年前に横濱を出帆した紀念すべき日だ午後からK先生家族と有名な娛樂設備の完備した「ユークリットパーク」に行きThrillerに乗つて見る、何十呎の急勾配を非常の速力で通過するので一寸驚かされるが流石はアメリカ人女小供まで平氣でやつて居るには感心した。

八月十五日(金)晴

K先生は明後日から家族と僕との七人連れでニューヨーク市まで大モーター、ツリップをやられることに決められた、之れも僕の爲めに特にK先生の計ひなのだ實に感激に堪へぬ、定めし此上なき愉快な自動車旅行の良き経験を得ることだらう。

八月十六日(土)晴

一年前桑港に始めて一步を印した記念の日だ、愈々明朝二ヶ月住み馴れたウィルビー町を離れるのだが此日K先生は僕を附近の Air Port に案内して下さつて、生れて始めて飛行機に乗せて貰つた、勿論旅客機ではなく、飛行場の周囲を飛ぶだけの遊覧飛行機で約三四分間(料金一弗)飛んだ、決して危険なことはなく、空に上つたときの愉快さ、地上を見下したときの氣持、大エリ湖沿岸の壯觀、逆ても筆紙に盡されない。

八月十七日(日)晴

愈々今朝八時半K先生及家族一行七名二臺の自動車に分乗、紐育への大ドライブへとウィルビー町を出發 Givard, Pa., まで一氣にかける Ohio 州から Pa. に入ると道路坦々として交通路の優良さを直感させる、六十五哩の速力で走つたときは流石に愉快、其者だ Givard に午前十時廿五分着、夫れより Warren, Kane, を經つて二千五百呎の Mt. Jewett 近くの Wobus を見物、午後七時頃 Coudersport に着一泊す、本日の走行哩數約二五〇哩 Susquehanna River の風光は一入 wonderful に感

じた。

八月十八日(月)晴

午前八時十五分 Coudersport 出發、正午 Eims に着、沿道の風光甚佳也、午後二時四十分 Aquinn に着、此地景色絶佳也 Piston, Kingston を經て夕方 Volk, Bare 附近に宿す、此日走行約二百哩。

八月十九日(火)晴

午前八時四十五分出發、有名なる Delaware River を越して午前十一時頃 New Jersey 州に入つた、紐育市に着いたのは午後三時頃、此日約二百哩を走つた。

八月二十一日(木)晴

K先生一行紐育出發歸路に就かる、僕一人ほつちとなり俄かに淋しくなる、僕はK先生の幹旋で今日から International House, 500 Riverside Drive, N.Y.C. に宿泊するようになり、第四二〇九號室に納まる Clarendon Ave., に面し室は小さいが氣持の良い室だ。

八月二十三日(土)雨

日本綿花に岡田直廉氏を訪問、「都」にて一ヶ年振りにサシミ、天ブラ等の日本料理(晝食)を御馳走になる、又其夜同社鶴野武雄氏(同窓)の案内で有名な Roxy 劇場に映畫見物をなし、且つ夕食を日本人俱樂部にて馳走になる、又同所にて久振りに將基をさし勝つ。

今年の夏は夏瘦せもせず喜んで居る、先月父より送つて呉れた西式強健術は大に實行に努め

て居る。

九月三日(水)晴

本日鶴野氏の案内で聯邦準備銀行局の見學をした、大金庫室の完全無缺なる設備を驚嘆した。

九月十一日(木)晴

本日正式に紐育大學に入學することに決定す、課目は經營學を主として市場學を従とする經營學部の主任はコルネル教授と云ふ中々親みのある人物で、どこから見ても堂々たる大學教授で心強く思ふ。

九月二十二日(月)晴

本日から大學の授業始まる、學課のレポートの外に色々課外の書物を讀まねばならず今後相當多忙を免れないので十分の覺悟を要する。

九月二十八日(日)晴

當地も愈々秋らしくなつて來た、残暑は左程嚴しくないが秋風らしいのが吹き出したのは、ついで此二三日前からだ。

今宿つて居る International House は富豪ロックフェラー氏の寄附になつた紐育一流の建物で場所も良く市内の各大學に學ぶ世界各國の大学生約五百人が宿して居り、毎土曜日には諸名士の講演がある従つて趣味高尚社交にも甚だ當を得た處と喜んで居る。

十月五日(日)晴

今夕大ホールに常の如く Sunday Supper を開いた跡で鶴見祐輔氏の日本に關する大講演があつた當ハウス學生群の外外部よりも大勢聴講者があつて無慮數千名に及び非常の盛會で聴衆に多大の好印象を與へ大成効裡に終つた、僕は同氏の講演を聞いたのは始めだつたが甚だ興味を覺へた、講演後別室に集まり日本人其他の有志者を併せて各種の質問座談に花を咲かし頗る有益な一夜を過ごした、午後十一時半終了後僕等有志五六名にて途中まで同氏を送り、レストランにてコーヒーパイ等をエンジョイしつゝ、更に十二時過ぐるまで快談した、同氏は政治家丈けに如才なく又英語の達者なものには少なからず驚かされた。

十月十一日(土)晴

紐育から三、四十哩離れた有名な Westpoint に當ハウスよりの遠足會あり約三百名參加、ホドソン河を河蒸汽船での航行は當地ならでは經驗し得ないものと思ふ、ウエストポイントには陸軍士官學校の所在地で名高く、日本の將校も此地は必ず訪問すること、同校生のパレードを甚だ面白く見學した。

十月十二日(日)晴

紐育大學入學後早や一ヶ月になるが次第に慣れ大に有益に過ぎし居る、昨秋インディアナ大學初登校當時苦しんだ頃のことを想ひ出すと苦笑を禁じ得ぬ來年の卒業論文は經營學部長コ

ルネル教授と相談して“How Industry is relieving Unemployment in Period of Depression?”に決めた時節柄好題目と思ふ、十分立派なものを仕上げたいと今より力味んで居る。

十一月一日(土)晴

當ハウスの年中行事の一たる Halloween Fair 舉行され Gymnasium Meeting Rooms, Foyer, Main Hall, Assembly Hall (最大)等の大室を悉く裝飾、各種の催物で非常に賑つた、外來者の見物人も随分と多かつた、各國人が各 National Costume を着けて居るのを見るだけでも興味は十分。

當ハウスには日本人十三名宿つて居り日本語も多く使用する機会を増加したが一面又英語を話す友人もブルーミントン滞在當時に比し増加したので英語會話の妨げとはならぬ。

十一月十二日(水)晴

家郷より駿河屋の羊羹到着、久振りに大に日本味をエンジョイした、そして友人にもそれ／＼裾分けをしたら大好評だつた。

友人寺沼三郎君の死んだ知らせが來た、同窓生が亡くなるほど淋しく感ずることはない、つく／＼身體は丈夫でありたいと考へさせられる。

此二ヶ月の間に日本には色々の事件が起つて居る、臺灣蕃人のトラブルを始め濱口首相の遭難それに先日の大地震など、就中濱口首相の遭難は少なからず濱口黨たる僕を驚かした、幸に經過良好のことを New York Times で見て一と安心して居るが當地日本銀行支店に勤務の首相令

息の胸中如何ばかりかは今年一月父の大病に體驗ある僕には十二分に同情出来る。

十二月十二日(金)晴寒

本夜紐育日本人會が吾々日本人大學生五十名許を日本人俱樂部に招待して呉れた、日本人會からは草信會長を始め領事、各銀行會社の支店長、支配人等出席、愉快なる會合で壽斗、汁粉等の御馳走を戴きつゝ、快談十二時頃辭去した。

十二月十三日(土)晴暖

先月末中間試験があつたが結果は好成績だつた、僕は八十八點で、六十人からの Class で五番が六番目位だつたのは痛快だ(最高點は九十二點)併し Course は中々ラクではない、何分 Graduate Students には課題を多く課せらるゝので。

當ハウスには常に色々の催物があり中々盛大だ、今夜は International Night として日米佛獨ラチンアメリカの各グループが夫々の催をして公開した。日本ではコロンビヤ大學生の鈴木、友成の柔道、二三段に柔道のデモンストレーションをやつて貰つた、中々の人氣であつた、中には椅子の上に立つて見物する熱心家を見受けた程であつた。

十二月二十二日(月)晴

有名な千萬長者カーネギー夫人の當ハウス大學生招待會(年中行事)に午後五時出席 91st & Fifth Ave. である同邸は流石に廣壯華麗を極めたものだ、同夫人は一々丁寧に來客に握手された、

茶菓の饗應を受けた後、一同 Christmas & Happy New Year Songs を唱和した。來客の一人が立つて今日の招待を感謝の挨拶をした、カーネギー夫人が之れに答辭を述べられた。歸るときに Letter Opener の贈物を戴いた、御蔭で今夕は甚だ愉快にエンジョイし得た。

十二月二十三日(火)雪及雨

當ハウスから學生五十名を限り世界有数の大新聞社 New York Times を見學した。午後二時半から四時迄新聞作成工程を順次に見て廻つたが其大規模の設備には唯々目を驚かす外はなかつた。

今夜「西部戦線異状なし」の映畫を見る、悲しくも亦面白し。

十二月二十四日(水)雪

オペリン大學に居る同窓の後輩福島君が紐育見物に訪ねて來たので僕の室に泊めることにした。數日滞在することだから出来るだけ案内をしてやる積りだ。

十二月二十五日(木)晴

午前は「マンハッタン」より海上二哩の小さな島の上にある自由像の見物に、福島君を案内した同僚の頂上に登り遙にマンハッタンの摩天閣を望んだときは素敵だつた。

午後には當ハウスの Director たる Edmonds 氏夫妻及家族の Christmas Party に福島君と共に參加した。美しい大ホールにはクリスマスツリーの電飾其他を飾り音楽やらレフレッシュメント

其他中々の歓迎振だつた。夕食は當ハウスで Turkey Dinner を濟まし、夜は紐育第一の定評あるロキシイ劇場を見物して Christmas Day を愉快に過ぎした。

今日の Christmas 及正月を祝すべく十二月始めより日本宛百一枚、アメリカの分八十一枚、英國宛一枚、合計百八十三枚の Christmas Cards を出したが相當骨が折れた。

十二月三十日(火)晴

福島君オペリン市に歸る。

有名なる千萬長者ロックフェラー夫妻の當ハウス學生招待會(年中行事)に出席、之れもカーネギー邸に劣らず贅澤を極めた建物で室内も中々立派だ。茶菓の外に軽い晚餐まで戴いた僕の居たテーブルには幸にロックフェラー氏の令息、其教育掛兼ハウス、キーパー K 女史及今一人の日本人と四人で色々日本の話に花を咲かせた。米國一流の富豪に招待されるのは普通餘り出来ないことで大に有意義だつたと思つた。

昭和六年一月元旦(木)晴寒し

今日は滯米第二回目のお正月だ。

日本人學生に取り是非共一と祝しなければならず銘々愉快な日を送つた。朝下のホールに降つて行くと「明けまして御目出たう今年も相變らず」の言葉が互に交はされて居るのは全く日本に居ると同様の氣分がした。何しろ、現在では日本人學生が當ハウスに二十名から泊つて居

るのだから。

友人松本君の案内で同郷人上田金作氏宅を訪ねた、色々の話のはづみ、中々の大歓迎だ、屠蘇雑煮は勿論数の子、豆腐ゴマメ、蒟蒻、小芋など日本料理其物を大にエンジョイした。

夕方には當ハウスの友人四人連れで太陽レストランに行き「スキヤキ」をやつた此處には屠蘇と三ツ組の盃があり全く日本其儘だ想ひ起す昨年の正月はブルーミントン市で一人淋しく正月らしくもない一日を送つたが今年はそれに比して十二分の正月氣分を味ひ得たのは幸福であつた、矢張吾々日本人は屠蘇雑煮を祝はぬと正月らしい氣持になれない。

一月五日(月)雨

休暇も終り今日から又授業始まる是れからは宿題や試験準備に忙殺されるので當分何處にも御無沙汰だ。

一月八日(木)晴一時曇

卒業論文の Outline をコルネル教授に提出した、同教授は色々御親切に助言をして下さつた。

一月九日(金)晴

神戸商大原口先生が歐洲よりの歸途當地に寄られたので凌霜會員の歓迎會があつた、同窓生の集まるもの二十餘名僕は二年振りに先生に御目にかゝり懐しく感じたので夜十二時頃迄居残り色々親しく先生と御話を交はした。

一月二十二日(木)晴寒厳し

今日は僕の誕生日だ、両親から祝電が来たのは感謝の外ない、今や試験の眞最中で禮電を打つ暇もないほどの忙しさだ。

一月三十一日(土)晴嚴寒

二週間に亘つた第一學期試験も終了して、やつと一ト息ついた、成績は二月中旬頃でないとならぬが大體悪しくない積りだ。

今夜當ハウスの Director Edmunds 氏の招待にて又々鶴見祐輔氏の講演が有つた、以前のそれの如く素晴らしい出来栄であつた、日米親善の爲めの同氏の貢獻が如何に大なるものなるかは當米國に来て居るもののみ知り得る處だ、日本では政治的には現在同氏に批難もあらうが、その所謂「見へざる貢獻」は大に買つてやるべきものだと思ふ、これは鶴見氏の爲めだけではないが當紐育では殊に日本に就て上流社會の方に興味を持ち出したように見受ける、此點は吾々の大に意を強ふする次第だ。

二月八日(日)雨及雪

昨日から雪降りて今日は一面の銀世界だ、此頃の寒さは華氏二十度乃至三十七、八度のもの、寒さは慥かに神戸あたりより遙に強いが、もうすっかり慣れた、用心して居るせいか、まだ一度も風を引かぬ、正月には随分流行性感胃が流行して僕の友人二三人もやられたが僕は全く無難だつ

た。

二月十四日(土)晴

鶴見氏の講演に刺戟され親友松本寅一君と一緒に日米學生協會と云ふのを組織した、之れは米國學生を招待して共に「スキヤキ」などをつゝき大に交歓する Meeting なのだ、第一回の集會を日本人俱樂部に催した、集るもの日米人各四名、第二回も同クラブで催し米人八名日本人七名であつた、第二回目の時に有名な“Daughter of the Samurai”の作者であり現在コロンビヤ大學の日本語教授である清岡氏夫妻も列席され非常に盛會であつた、食事後は簡単な音楽遊戯をやつたが僕は座長のような役を引受けてプログラムを進行させた、實際同會一切のことは松本君と僕と二人でやつて居り學校片手間なので随分忙がしいが小さいグループながらも聊か日米親善に資することあるを思ふて慰めて居る次第だ。

二月二十日(金)曇後雨

一月末に濟んだ第一學期の成績は全く豫想以上の好成绩と判明して満悦だ、當紐育大學の Graduate School of Business Administration では平均 B 即ち全課目數の半分以上は B でなければ Master 學位を授與さるゝ資格を失ふことになつて居る、普通 C が pass に當り B を取るには可なり骨が折れるのだ B と云へば甲に當り A は Excellent 即ち優(又はそれ以上)に當るものだ所で今度の第一學期の僕の成績は七課目(十四ポイント)で次のようだ。

- (A) Management 31—Office Management
- (B) " 105—Cost Analysis for Managerial uses.
- (A) " 103—Production Control & Time Study
- (B) " 201—Management Principles & Practices
- (B) Marketing 201—Marketing Policies & Practices
- (B+) " 141—Advanced Marketing Problems
- (B) Economics 201—Business Philosophy

以上の如く一つも C を取らなかつたのは實に愉快だ他の日本人學生は「B、C、C、C」「B、B、C、C、D」などが普通で實の處、米國人でも全部 B 以上取る人は少ない位だ、それで僕は聊か鼻が高いわけだ、ハハ……尤も來四月に Oral Examination を控へて居り、之れが中々の難關らしい、之れをパスしないと他の論文や最終試験が如何に良くとも「マスター」のデグリーは貰へぬとのこと、斯く僕の前には尙幾多の難關が横はつて居るので一年間で「マスター」を取るのは決してラクなことではない、當インテリナショナルハウスでは紐育大學に通つて居る人が相當にあるが、まだ一年間で「マスター」學位を得た人は一人も無いそうだ、何れも現在第二年目で、中には第三年目の人もある位だ、僕は一年で「マスター」學位を狙つて居るのだから随分と努力を要する次第だ。

三月二十五日(水)曇

當地の氣候も大分春めいて來た、之れからは良くなる一方だらう、運動の方も、之れからだ、デニスに徒歩に大にやる積りだ。

四月二十二日(水)曇後雨

午後一時から Master 學位の難關の一たる口頭試問が部長テイラー教授、コルネル教授、メイズ教授、グロウザー教授等によつて行はれ、専門コースの詳細に亘り、色々難つかしい質問が三十五分間續いたが幸に無事にパスして大に安心した、此試験は一年唯二回しかない爲め一度やり損すると半ヶ年待たねばならぬので随分無駄に時日を空費する人も少なくないとのことだ、之れで僕は第二學期の試験さへ無事パスすれば(卒業論文の外に) Master の學位が貰へることになるので、之れからは第二學期試験の通過に努力を拂はねばならぬ。

五月二日(土)晴

今回は米人學生側の招待で第三回日米學生協會の交歓が午後七時から Village Barn に催された、結構な晚餐の後で音楽やら劇やら競技やらに打興じた、それが十一時頃に濟んで更らに席を「ホテル、ウェリントン」に移し日本學生の日本劇をやつて大喝采を博し、夜半に引揚げた、不相變愉快な會合ではあつた。

我が家

北野中學一年三組

大岡明

阪神電車芦屋停留所から松原を北へ三町許り行くと、聖使女學院と云ふ大きな學校があつて、其の北隣の家が我が懐かしい住家である。家内は兩親と僕と妹三人と、其の外に親類から來てゐる従姉と、女中四人に下男一人で十二人である。父は本年四十七歳で、毎日大阪の綿花會社へ通勤して居られる。至つて嚴格であるが、又大層優しい方である。母は三十六歳で、至つて優しく、家政の取締りをされて居る。又四季の花をいけられてこれを無上の樂みとしてゐられる。女中も又従順な者ばかりで、蟬りがなから、家には平和の空氣が滿々てゐる。一日中で一番樂しいのは一家揃つて夕餉の膳に向つた時である。父は四方八山の話を、妹は面白い事を云ふ、僕は學校であつた事や自慢話をする、母はにこにこしてさも嬉しうである。

僕はしみぐゝこんな平和な家に生れて來た事を喜ばずには居られない。(大正九年)

秋の夜

北野中學一年三組

大岡

明

追々短日となり太陽は最早西山に没した。空には無数の星がきら／＼と照り輝いて居る。天地はしづまりかへつた様で何も聞えない。たゞ遠くを走る汽車電車の音のみが微かに聞える。秋も半過ぎ冬に近くなつた爲様々の蟲もあの世にでも行つたのか少しも鳴かない。夜は愈々更け星は益々光る。けれども秋の夜は中々長い。此のよい秋の夜も星の爲ににぎはつて居る様にも思はれる。見る間に一つの星が落ちながら下へ／＼と下つて行く。瞬く間に姿を没し何處かへ行つてしまつた。今のは何處へ行つたのであらうか。其の内に身に寒さを感じて來た。今は頭中也澄み渡つて居る様だ。風を引くと悪いから家に這入つた。家では皆夢の世界にでも行つて居るのかしんとして居る。(終) (大正九年)

十四歳の春

北野中學二年四組

大岡

明

僕も最早十四歳の春を迎へた。二年生になつたのは早此の春の初めであつた。襟章は變つたし凡ての教科書も改まつた。それと同時に僕は初春に父母と妹一人と四人連で長崎へ行つた時の嬉しさと云つたらなかつた。何分三年ぶりで小學校四年生の時に此方に來たきりで一度も行つたことが無かつたからである。長崎へ着くと澤山の人々が迎へにきて居られた。町を見ると少しは見覚えのある所もあつたがもう殆ど變つて居た。祖父の家に行くとその處には小さいブルドックが居た。僕はあまり可愛らしいので毎日朝から晩まで犬をつれて遊んだ。犬は一日でなれて僕の姿さへ見るとすぐ飛んで來る様になつた。色々な藝をするので大變面白かつた。今度長崎に行つたのは、要は祖父母様の金婚式祝と三十三回忌とであつた。それで五日程で芦屋へ歸つた。すると又嬉しいことが出來てきた。それは四月十七日の日に祖父母様が此方においでになつたことである。けれども僕が病氣になつて居たのは残念だつた。二三日で僕もなほつた。祖父母様からお土産を下さつた。祖父母様が御丈夫であつたことは何

より嬉しく思った。今年祖父様は七十二歳で祖母様は六十七歳であられる。僕もこんなに長生をして見たいものだと思つた。この様に楽しいことが續いた時は恐らく今までに無かつただらうと思ふ。

(大正十年)

高商生活を終つて

大岡明

セメント塀にかこまれたあのなつかしの母校を出て早四年間が夢の様に過ぎ去る三月九日の卒業式を最後に學生生活を終らねばならなくなつたが此の四ヶ年の夢が餘りに早く覺めてしまつたのを遺憾に思ふ次第である。

僕が高商に入學して感じた最初の印象は、凡てが自由であることだつた。此の自由が僕にはどれ程嬉しかつたらう。中學で束縛されてゐた爲それ丈喜びは大きかつたのである。初めの一、二ヶ月は全く夢心地で過したと言つてもよい。然しこんな喜びが永く續かう筈はない。僕は次第に此の生活が單調になつて來た。倦怠を覺え出したのである。此の時代を學生々活の危機と云ふのではあるまいか。是は程度の差こそあれ、誰しも一度は經驗する事であらう。僕

は幸にこの危機を無事に脱し得た様に思ふ。若し然りとすればそれは友人の力に外ならぬ。友人の力の偉大さ、尊さを此の四ヶ年間充分に體驗し得ただけでも僕にとつては大きな收穫の一つだつた。

——以下一つ二つ思ひついた事を述べて見よう——

x

丁度本科一年の時だつた。暑中休暇を利用して支那滿鮮方面を旅行した事がある。上海青島を経て大連に渡つたが大連には幸ひ友人がゐたので見物等に遂一週間も過してしまつた。友人に別を告げて旅順に向つた時には愈々これからは一人旅だと何だか心細く感ぜられた。滿鐵も本線は中々立派だが此の線は特にきたない。乗客は支那人の方が多くとても氣持が悪かつた。二時間許りでやつと旅順に到着した。何の氣なしにプラットホームに降りた時、思はず〇三と叫ばずには居られなかつた。そこに悄然と立つてゐる親友 Mr. M. を見出したからである。その時の嬉しさは到底筆紙には盡されぬ。まさか彼とこんな處で會はうとは夢にも思はなかつた。彼は旅順見物を済まして之より天津に向はんと次の列車を待つてゐたのだつた。而も若し彼がプラットホームに出てるなかつたら僕は遂に彼の存在を知らずに構内を通り抜けたかも知れなかつた全くの偶然だ。僕は始めて偶然の恐るべきを知つた。

僕は世間に出てからも斯る偶然にいつかは出會ひさうな氣がする。又會ふ事を願ふ次第で

ある。

x

この旅行中今一つ感じた事がある。それは旅順出發後の事だ。前にも一寸記した様に知人一人ない全然一人旅だったから先輩の住所をたよりに諸所先輩を訪ねて廻つた。勿論中には紹介状を貰つた所もあつたが、兎に角此の時程先輩の有難味を覺えた事はない。單に先輩だと云ふのみで全く見ず識らずの者を忙しい時間を割いて各地で非常な歓迎を受けたのに面くらつた。實際この時まで先輩が後輩に對しかくまで盡してくれるとは夢想だにしなかつた。即ちこの時になつて始めて先輩の力強さ並に後輩の先輩に對する義務を如實に意識する事が出來たのである、之も學生々活中の收穫の一つである。

僕は之と關聯して同窓生たるものも今後社會生活共同生活を管むに當つては、お互に力となし合ふ即ち提携し合ふ様に心掛くべきであらうと信ずる。之こそ同窓生たるものの眞の意義ある所以ではなからうか。

x

「六稜同窓生は確に一癖ある様に思ふ」とは弘法君の言はれた事だが僕も全く同感だ。一癖あるといへば聞きよくはないが他校生に見出し得ない底力を持つてゐるの意と解すればよい。僕は之を名づけて六稜魂と呼びたい。趣味會員諸兄の各學校に於ける活躍も畢意この六稜魂

の發揮に外ならない。唯自分はこの六稜魂を今後の社會生活に於ても充分に發揮せられ、最後の勝利を獲得されん事を祈る。

學校は學問する所である。然し乍ら學問のみを以て全部と見てはいけない。宜しく他の半面を見逃さぬ様にしたいものである。即ち生活に適する人物を養成する場所であること。僕はこの點に注意し努力はして來たがさて卒業となり、未だ缺くる所多きを知つて慚愧に堪えない。然し過去四年間は決して無意義に過したとは考へない。むしろ將來發展に與つて大いに力ありと信じてゐる。唯修業の足らなかつたのを遺憾とする。僕は之を補はんが爲今暫く遠方に出掛けて大いにやつて來る積りである。どの程度までやれるかは今より保證の限りではない。

(昭和四年三月十九日)

ホノル、見物

大岡明

前夜相談して置いた連中と一緒に棧橋より自動車にて見物に出掛ける。時は昭和四年八月十日の午前十時頃、先づ目を惹くものは道路の美しい事でアスファルト又はコンクリートで全

部敷きつめられ乗心地も亦素敵だ。市中を抜ける頃よりあたりの趣が變つて来る。

北緯二十度の熱帯にあるので植物はすべて熱帯性のものばかり、中には見慣れないのも随分に多い。青々と繁れる棕栢並樹、シャワー並樹を眺めながら美しい道路を疾驅する時の愉快さは到底筆紙に盡し難い。

東北約六哩を走つて先づ「ヌアヌバリ」に着く。風速のはげしい事といつたらとてもお話しにならない。うつかり立つて居ると吹きとばされる。足下は千尋の絶壁で一八九八年米國に併合される迄布哇群島に君臨した布哇國王の祖宗「カナハメル」一世が一七九九年に敵の大軍を迎へこの絶壁より突落して大勝を博した有名な所だ。頂上の岩壁にはその記念文が刻まれてゐる。再び車上の人となり市の中央山間に突出せる海拔五百呎の死火山「ボンチボール」に上る。眺望絶佳、この邊一帶は布哇中で最も雨量多く一日少くとも一回降雨のないことはない、と説明を聞いてゐる間に早見舞はれる。

山上には仙人掌が蔓生してゐるが之には土人間に奇しき傳説が残されてゐる。

それより市の東方に當るワイキビーチに向ふ。布哇唯一の海水浴場である土人の波乗はこの海岸で行はれる。二十五仙の Comission を拂つて世界的に有名だと言はれる水族館に入る。規模は決して大きくはないが布哇近海の凡ゆる珍魚而も美しい色彩の魚族が多く集められてゐる。世界的と云ふ程でもあるまいが確かに一覽の價値は充分にある。それより近くのプー

ルを見物。長さ百米位で設備も中々立派だ。先日來競技が行はれ日本の女流選手達が大いに活躍してゐるのは嬉しい。時間の關係上乍残念布哇大學の見學は割愛し「ビシヨツプ」博物館に向ふ。途中布哇裁判所庭前にあるカナハメル第一世(前述)の銅像をカメラに収める。

ビシヨツプ博物館にはボルネシアン族の遺物、土人の太古生活状態の模型等網羅され南洋民族見學にはよい参考となる。此邊も時間の關係上大體にとめ、西北へ四哩を走つて「モアナルア」公園に到る。日本最負だつたデーモン氏の私設公園で熱帯性植物生茂り下は一面の芝生で被はれ實に美しい。此の公園内には日本式の庭園をこしらへ和式建築物池それに築山迄あるそうだが先代がなくなつてから公開もしないらしい。

最後に Pineapple 市場の Lanehill に到る。Pine-apple が山一面に植えてある様は美事なものである。市場とは言ふが小さな小屋で畑から取つた許りのが澤山に盛られてゐる。新鮮で而も市中の値段よりは安いので大變な繁昌ぶり。僅か One dine で内地では到底味はれぬ美味な Pineapple Juice に湯を醫す。

所々約四時間に亘り布哇見物も大體終つたのでそれより市中に戻り出帆まで買物をする。日本人は人口五萬からあり相當の勢力を持つてゐる。日本人店等も諸邊に之を見られる。

町を歩いて目に着くのは黒人である。白人の多い Downtown ではその黒さが一層に目立つ。市内電車は日本のとは異り左右の兩側が全部解放され何處からでも乗車が出来る様になつて

るるのは便利である。従つて風通しがよく夏向には確によい。紐育等では夏季にはこの種の電車が運轉されてゐるさうだ。

町の市場に入ると果物の種類の多いのには流石布哇だと感心する。バナナ、パイヤ等美味さうなのを船に持歸る。

布哇諸島で主なる貿易品としては砂糖、インアップル、珈琲等で就中砂糖は數億弗の資本で大々的に經營されてゐる。製糖業は布哇の生命だとまで言はるるのも當然である。郊外「アイア」にある大製糖場を時間の都合上ではあるが見學出來なかつたのは誠に残念に思ふ。

午後五時、太平洋の樂園ホノルルに別れを告げつゝ、桑港に向つた。(昭和四年八月十日記)

書 簡 篇

河村君

御元氣の事と存じます、先日の御便り嬉しく拜見、先日来少々多忙だった爲め氣にかけながら、遂本日まで延引した次第、決して諸君の事を *Neglect* してゐるわけではないから、何卒不悪。

父の病氣も御蔭で全快、昨日は「庭を散歩するようになつた」旨、父から本年最初の手紙を受けた次第、今頃は元の元氣な身體になつてゐること、信じ安心してゐます。

去る二月二十日は日本總選舉日、結果如何と大に待ちあぐんるた處、昨日の *New York Times* に「*Hanaguchi Sweeps to victory in Japan.*」の記事を見出し、絶對多數を得た濱口内閣の爲めに萬歳を叫んだ次第、今度ばかりは濱口首相も氣が氣ではなかつたらうと想像してゐる。○會最負の○君又何んとか文句が出た事だらう。

第二學期は去る二月四日より開始された、前學期に相當苦んだ甲斐あり、それだけ學課の方は樂になり従つて時間の餘裕も出來大いに喜んでゐるでは、何故手紙を寄こさぬかと足をとられさうだが、實は社交的方面で多忙だったのだ、社交的と云つても變な方面に解して貰つては困る。二月十六日には例の *Students Building* の大廣間で *Twilight Service (Y.W.C.A. & Y.M.C.A.)* が催され *Cosmopolitan Club* が *Program* の一部を受持つた爲め、小生も出場に決心、始めは *Vocal Solo* だけの積りだったが、*Piano Solo* もやつて呉れと幹事からせがまれ、生來の小膽者、文句も云へず引受けた、そして *Program* の眞先に *arrange* して貰ひ、最初に「君が代」を演奏する、一同起立謹聽し

てゐたのは痛快な（變に聞へるかも知れぬが、その時の僕の心持は確にさうだつた）感じがした。

それから田中銀之助氏の獨唱曲「星」を獨唱部伴奏部を同時に獨奏、多少あがつてゐたせいか小ミスを途中でやつたが聴衆には分らなかつた積り、何分 Cosmopolitan Club の member 以外に百人以上のお客が見へて中々の盛會さ、第二は Vocal Solo 之れは二曲で山田耕作氏作曲の「この道」と例の「白ばら」何れも大喝采、最後には Cosmopolitan Club Song の六部合唱、合唱者は各國代表で小生も其一人非常の盛會に終つた。（後略）

昭和五年二月二十五日

ブルーミントン市にて

大岡明

河村政一君

此四、五日の暖かい事全く暑い位で初夏の氣候を想はせる、市加古では實に九十度に達し四月のレコードをつくつたとか。

内地では何處にも美しい櫻が満開して居る事だらう、一昨日だつたかアラク、散歩してゐた時當市に唯一本の櫻の木を見出しに、花が白く始めは氣が付かずにゐたが矢張櫻に違ひない山

櫻の一種の様に思つたが果してどうだか？唯左程美しく無いのが缺點。

時に御變りありませんか、大層御忙しい由茅田君から知らせて来たが身體には十分氣を付け給へ、昨年は今頃は御互に心配したものだ、あれから早や一ヶ年、馬鹿話に日を送つてゐた高商時代が懐かしい、恐らくあんな氣分でお互に過すことは否あんな生活をする時はもう來ないのだ、時々例の記念アルバムを友人等に見せる度毎に昔の生活が思ひ出される。

兄も僕もお互に海に親しみを持つて居た、確か本二の夏休みだつたらう、九州旅行をやつたのはあの時の船旅も愉快だつたね、日本一の快速船（？）長崎丸で靜かな瀬戸内海を疾走した時の痛快さ、長崎見物、雲泉登山、耶馬溪の美人、南京蟲襲來、瑞穂丸乗船、何れも思ひ出の種ばかり僕は今後共斯る愉快なる機會に出會はん事を祈つて止まない。

〇〇郵船も漸く優秀客船三隻が揃ひ面目を一新した理由だが僅十八、九節の速力では心細い話さ、成程日本では威張れるかも知れぬが二十節未滿では餘り大きな顔も出來まい、大西洋に着眼して見給へ、スピードで最近北獨逸ロイド汽船の「Europa」號が僅か四日十七時間六分で大西洋横斷のレコードをつくつた、平均速力二十八節ばかりとは日本の船と比較してお話にならぬ現在では太平洋方面では北航路の Canadian Pacific を除いては快速船なく、従つて間に合ふかも知れぬが、スピードの世の中だもの、今に大西洋の如き時代が來ること疑無し、日本も外人誘致策をマダく講じなければいけないと感じられるね、要は日本を今少しく海外に紹介しな

ければ駄目さ、毎度云ふ通り米國に於てさへ、亞細亞大陸にくつゝいて居る小嶋としか考へて居ないものが相當ある位だもの、全くやりきれないよ。

兎に角世界第三の大商船を有する日本帝國長崎丸や上海丸位で満足してゐては情ない話貧乏國で仕方もないが、眞の優秀快速船をドシ／＼造る事の出来る様な時代に早くなりたいものさ。

次に當地の様様を少しお知らせしよう。

四月八日世界的に有名な提琴家エルマン氏が當校で大獨奏會を催した、久振りに大家の奏する妙音に恍惚たるを得たのは幸であつた。

先月運動季節に入つて以來大いに身體方面の修養（變な言葉だが）に勉めて居る三月十五日にはケネディ教授と一緒にカーター教授のテニスコートに出掛け一年振りにラケットを握つた、その中に他の先生も加つて大いにやつたが何分久振りの事で時々高塚を越へる様な素敵さも見せる有様だつた、昨土曜日にも英語部教授宅のテニスコートにて當市着後第二回のテニスをやる、教授等及夫人、令嬢等中々大勢だつたが大いに活躍して見せる、令嬢は女學生としては上手の方だつた、朝から午後にかけてやつたのですつかり疲れたが兎に角こんな風に愉快に運動の方もやつてゐる。

尙同封した寫眞は春の休暇中に撮つたもの御笑覽ありたし身體に御注意あらん事を祈る。

昭和五年四月十三日午後

高商學生時代を回顧しつゝ

ブルーミントン市にて

大岡明

New York City, August 29, 1930.

Dear Mr. Kawamura;

It was a lucky day yesterday, for I had 4 letters—one from you, one from California friend, and the rest from home.

I'm glad to hear that your uncle's operation was successful. I sincerely hope he is O.K. now.

Last week we—Mr. Kennedy, his family, and myself—made a long drive from Willoughby, Ohio to New York City, taking a short cut, about 600 miles. As we took Pennsylvania route, we couldn't have a chance to visit famous Niagara Falls.

Driving 250 miles on the first day, we put up at Coudersport, Pa., a small, quiet town on the hill. Sometimes we drove at the speed of 65 miles per hour.

The wide, beautiful roads, wonderful views along the way made us very happy.

The next day we stopped at Kingston, Pa., where we met an intimate friend of Mr. Kennedy, driving 200 miles.

In the third day afternoon we at last reached New York City, passing Pennsylvania and New Jersey States. It has passed more than 10 days, since I came here. I'm staying at the International House, a famous, nice building in New York City, facing the Hudson River.

Last Sunday I went to Forest Hills, L.I., to see the finals of the women's national tennis championships. The stand was covered with thousands of people, though it was pretty dark and dull.

Miss Nuthall of England won the title in singles because of the absence of Mrs. Helen Moody. The more exciting plays were shown in the double final.

Their scores were as follows:

Miss Nuthall 6—1, 6—4 Mrs. Harper

Miss Nuthall 3—6, 6—4 Mrs. Harper

Miss Palfrey 7—5 Miss Cross

I happened to meet Several Japanese there.

The other day I called on Mr. T. Uno, a graduate of the Kobe College of Commerce, at the office of Japan Cotton Trading Co. He was very kind to take me to Miyako Restaurant

where we enjoyed the real Japanese Dinner — Tempura, Sashimi, Sukiyaki, Tsukemono, etc.

Every evening there are swarms of people around Times Square, a centre of theatre districts, where we can reach within 10 minutes from the International House by subway. I should say the night in N.Y.C. is wonderful!

Expecting wonderful news from Japan,

I am,

Sincerely Yours,

A. Ohoka,

親愛なる森下君

今朝 Mail Box に兄の御手紙を見出し久振りに御目にかゝつた様になつかしく拜見しました御元氣に御暮の由何寄の事に御喜び申上ます實は此の一ヶ年程御たよりに接せず心配して居りました小生の手紙は御書面によれば到着しなかつたようですが何れも櫻井宛に出狀(當方日誌には三月八日四月十六日五月十八日七月二十日及九月六日附で出したことになつて居ります。)しましたので或は御手に入らなかつたのかも知れません。

小生も渡米後一ヶ年間随分色々のことを経験しました之は必ずしも良い事許りではありません

せん、斯んな事、兄に云ふのは變ですが、人知れぬ苦勞も味ひました、良い修業だつたと云へませう。今日は過去半ケ年間の事を簡單に記して見ませう（但し私事は省略させて下さい）。

去る六月十日インディアナ大學卒業式の時に始めて式服たる Cap & Gown を着けて列席 Bachelor of Science in Commerce & Finance の學位を授けられた時には流石に嬉しい氣がしました。六月中旬には豫て親しく交際せし同大學の K 教授宅に厄介になることになり、住み馴れし Bloomington 市を跡に出發した時は聊か名残惜しく感ぜられました。何しろ渡米後最初の學生々々活を味つた處なのであります。

八時間汽車に搖られてオハヨオ州 Cleveland に到着したのは、もう夕方近くだつたと思ひます。驛には同教授其他の出迎を受け直に同氏宅（約十六哩許りの郊外です）に落付いた次第でした。

其後八月中旬まで二ヶ月間御世話になつたのですが、随分丁重に且家族の一員として待遇を受けたのは小生として此の上なく幸だつたと思ひます。眞の米國人生活も此の時に始めて味ひ得たと云へませう。教へらるゝ事多く甚だ有意義に暮らしました。

運動の方はテニスを能くやりました。近所 (Car で三四分の Drive) にテニスコートがありましたので殆ど隔日には出掛けました。同封の寫眞は一日魚釣に出掛けたときのもので小生が眞先に釣り上げた處を撮つたものです。此日は K 教授と釣好きの近所の方と小生の三人で Lake Erie

に乗り出し絲を垂れること三時間總獲得數二十四尾で晚餐を賑はした次第でした（但二十四尾の中 K 教授は一尾隣人が三尾で残り二十尾が小生が釣つたと云へば驚かれるでせう）御蔭で Fisherman なる敬稱を頂戴しましたハハハ、。

他の一枚の寫眞はブルミントン市でのテニス仲間です。向つて左端が K 教授、お嬢さんは英語部長 C 教授の娘さん、他の二人は同じく英語部の先生夫妻です。

序に今一枚のも此處で説明致しませう。Stadium は Cleveland 市にあり有名な American League の行はれる處です。此の Scene は今年優勝した Athletics 對 Cleveland の試合、仲々良い勝負を見て呉れました。

擬八月中旬には K 教授家族、親戚と共に自動車にて紐育市にまで約六百哩の大 Driving を舉行、何分道路が美しいので途中の景色と相俟つて吾々一行を此上なく樂ませました。紐育市で小生は一行に別れを告げ一人市内に留まることになつたのです。大學は Business で有名なニューヨーク大學に決定。九月から研學を續けて居ります。授業開始前約一ヶ月間は出来る丈け見物に費し能く出掛けたものです。Hidden の試合も此の時に見物し得て幸でした。見物を一々記すと長くなりますから今回は割愛しませう。

泊所は當地着後有名な International House で毎日愉快に過して居ります。當 House は文字通り各國人大學生の集る處で其數五百餘名に達して居り、何れもニューヨーク大學、コロンビア大學其

他の大學を中心とした學生のみ、毎週色々の催物もあり、殊に毎日曜夕には晚餐の後名士の講演又は音楽等あり、甚だ有益でもあります、十月始めでしたか鶴見祐輔氏が日本に關する講演をされましたが随分盛會でした、同氏と親しく話したのも此の時でした、當 House には日本人學生許りでも十五六名に及び大いに日本のために氣を吐いて居ります。

紐育の昨今は相當に寒氣厳しく今朝などは僅か華氏七度十二月十六日としては十五年振りのレコードだそうです、登校の途中は全く骨が折れます、クリスマスも近づきました、Christmas Shopping の Downtown は仲々の人出です。

學校の方は相當に忙しく殊に Graduate Students には Term Papers が多くて餘り呑氣に出来ません、卒業論文も少々氣がかりになりました、僅か一ケ年で Master 學位を取るのは仲々骨が折れますが努力して見る積りです。

不景氣で困つて居るのは日本ばかりではありません、當市などでも失業者續出、當局は其救濟法に躍起となつていますが仲々思ふように行かぬようです、失業者連が胸に赤色で "Unemploy ed" と記した札のようなのを掛け街頭に林檎を賣る姿を到る處に見受け、彼等の "Buy apples" と叫ぶ聲は實にいたゞしく響きます、日本内地でも先月來濱口首相の遭難、伊豆半島方面の大地震等大きな事件があつたようです、帝國議會も數週に迫つて居ますが種々の攻撃質問が出る事でせう、餘り長くなりそうなので、これで止ませう、御身御大切に、よき新春を迎へられ

ん事を祈ります。

昭和五年十二月十六日夜

ニューヨーク市にて

大岡明

森下清二様

追て 遠く離れた米國にも兄を慕へる一友人の有ることはどうか忘れないで下さい。

森下君

其後兄には御變りありませんか、以前から御手紙したいと、思ひつゝ、遂今日まで延引、不都合の程幾重にも御詫します。

數月前より引續き朝日新聞を御惠送に預り兄の御厚意には深く感謝して居ります、今日まで碌々御禮も一々申上げず、缺禮ばかりして居ます、何卒御寛容下さい。

月日の經つのは早いものです、小生が當ニューヨーク市に來ましたのが昨夏八月の半過ぎでしたが、秋去り冬過ぎて、暖かい春も早や終りに近づいて來ました、當方は學業に追はれ勝て忙しい日を送つて居りますが、兎に角元氣で暮して居りますから御安心下さい。

去る一月九日には原口教授が來紐され、母校卒業生（凌霜會員）一同日本俱樂部に集り大歡

迎會が催されました、小生は學校の都合で約半時間許り遅れて出席しましたが、會するもの二十有餘名會員がこんな居るのかと一寸驚いた程でした、原口先生は二年前卒業當時と變つて居られるのは頭髮ばかり、始めて見る「七三分け」も仲々御似合のように見受けました。

第一學期の試験が終つたのが一月末、ほつとしたのも束の間、今頃は Report 攻めで、すつかり弱つて居ます、それに卒業論文 (Master Degree) もあり、餘り Free time がありません、第一學期の成績は案外の好成绩で大いに日本人のため氣を吐いた積りです。

此處に一つ御知らせしたいと思ひますのは小生等有志が集り、今度日米學生俱樂部なるものを組織したことです、これは同封しましたパンフレットにて御分りのように、初めは極少數で開きました、次第に大きくして行く積りです、第一二回は日本人學生が彼等を招待と云ふ形式を取りましたが、仲々の大成功でした、一昨日 (五月二日) は米國學生のグループで吾々を招待して呉れましたが素敵な good time を enjoy しました、此の會の特色としては、總て Refine された學生を以て組織されて居ると云ふ事です、一昨日の會の模様等詳細に記しますと長くなりそうですから省略して置きませう、吾々微力ながら幾分でも日米親善に貢献する處あれば本俱樂部の目的は達せられる事となります。

此の夏で、どうやら Master of Business administration の學位が取れそうですが、出来れば今一ケ年勉強して歸國したいと思つて居ます。

日曜日毎に方々に出かける事にして居ます、昨日は大紐育市端の Van Cortland Park に友人と散策に出かけ、歸りは中央公園の櫻見物をやりました、八重櫻がまだ幾分残つて居ましたが、勿論數へる程しかありません、友人の自動車で行つたので小生が大部分ドライブしました、市中の運轉は最も困難です、でも先日 Drivers Licence を採つた位ですから大したものですが、餘り自慢にも成りませぬが。

四月十日には高松の宮兩殿下が御安着、小生も歓迎群集中の一人でした、彼等の歓迎振りが小生等の豫想以上であつたことは小生否日本人を最も喜ばせた事の一つです、一日コロンビヤ大學御訪問遊ばされた時ほど、ツイ數歩前に御見受けする機會が有つた程です、妃殿下を拜せしもの "She is very pretty", "She is charming" など囁いてゐるのがあちこちで聞かれたのは、畏れ多い事でした、紐育には約五日間御滞在になりました。

跡二週間で第二期 (最後) の試験が始まります、これから益々忙しくなりませう、試験でも濟みゆつくりしましたら又おたよりします、兄も御身體を大切に、愉快な日を送られんことを切に希望します。

同封しました寫眞は小生の近影です、一枚は International House の正面前、他は自室内で撮つたものです。

最後になりましたが先日、小野信男君が死去された悲報に接し全く驚き入りました、高商入學

當時芦屋宅のテニスコートで兄を最初に僕に紹介して呉れたのは故小野信男君でした。本科以来友人の關係もあり小野君とは豫科時分程の交際はして居ませんでした。が、本當に残念な事です。今思へば小生が神戸出帆前二、三月大阪の大林組本店に小野君を訪ねたのが最後となりました。友人を失ふ程淋しく感ずる事はありません。

餘り長くなりますから今日はこれで止ませう。先は御禮旁々御無沙汰御詫まで

昭和六年五月四日夜

紐育市にて

大岡明

森下清二兄

324 East Second street, Bloomington, Indiana. June 13, 1930.

Prof. Roy Smith.

Dear Sir:

I am sorry that I have neglected to write to you for a long time. It is almost ten months since I came here.

On June 10th we had the 101st Commencement of the Indiana University and I was conferred the Bach

elor of Science Degree in Commerce and Finance.

There were many interesting events during the Commencement Days, the program of which I shall enclose in this letter. On June 10th there came thousands of people to see the Commencement Exercises, and Dr. William B. Bizzell, President of the Oklahoma University delivered the address under the subject of "Our Changing Intellectual Climate."

As to my graduate work, I changed the plan and shall attend the Columbia University, where one can get Master of Science Degree in one year, instead of the Harvard University. Because it is very likely that I may return to Japan next summer, 1931.

Before going to New York City I shall visit Cleveland, Ohio where one of my intimate instructors in Indiana University lives.

I had good letters from your brother at Carhage, Ill., and he asked me to visit him this summer. I really thank him for his kindness. But I fear if I can meet him this summer.

In January last Mr. Horace E. Coleman visited Bloomington, Indiana and talked on Japan at the convocation in our University. I was so glad to hear him and I am sure it was very valuable to all American students to understand the real Japan. Really it was my surprise to find that they did know very little about Japan and Japanese. I had a pleasure of meeting Mr. H. E. Coleman in that afternoon and talked a-

about two hours. I learned from him that he intended to visit Japan again this spring; so I think he visited you in Kobe in his cherry blossom tour.

From next time I shall write you again more often. I hope all your family are well and happy. Please give my best regards to Mrs. Roy Smith. And also to Mr. Atsumi and Mr. Nishinaka.

Yours Truly,

A. Ohoka

雜

篇

米大陸二千哩自動車旅行記

(大岡兄に御伴して)

松 本 寅 一

盟友大岡兄は此の春紐育在學中自動車シボレーの古物を買ひました、學校に通ふにも郊外のドライブにも自分で操縦するのを常としました、彼が昨年の夏オハヨオ州ウイロビーのケネディ先生宅に宿つて居たとき、同氏の邸で練習をやつたとかで彼は其時可也自動車操縦の術に通じて居ました、彼が此の五月紐育大學の學期試験を無事パスしますと日頃の氣晴らしに大岡兄は自分の自動車を驅つて米大陸東北地方二千哩の自動車周遊を計畫しました、僕は萬一の危険を氣遣ひ此の計畫中止を切に勸告しましたが彼は頑として之れを聞入れませんでした、そして遂に昭和六年六月六日を以て之を實行することになりました、僕は彼を一人旅させるに忍びず彼の學友佛國人アシャー氏と僕と三人連れ立つことに致しました、當日午前十一時頃大岡兄の宿舍たる紐育の Riverside Drive にある International House (ダラント將軍の墓碑に面す) を出發、自動車を南西の方向に走らせました、市内は相當暑い日でありましたが郊外に出ると涼風颯々

として何とも云へぬ良い氣持でした。U.S.A. 24 の車道番號を辿つて Philadelphia 市に到着夫れより古い町中を左に廻り Delaware State に入り Baltimore に着いた頃は夜の十二時頃此處で一泊しました、此日約二百四十哩を走つた。

翌六月七日午前十一時頃 Baltimore を出發、Virginia 州に入り周圍の美しき山や川の風景を賞しつゝ、Winchester に到着一ト休みして自動車の方向を北に向け疾走しました折柄の小雨で相當ドライヴが困難でしたが夫れでも人通り少ない廣い一本道であつたので大岡兄は五十哩以上の快速力で物凄い音を立てつゝ、自動車を飛ばせました、御蔭で此の日は三百哩を走破しました、夜半ストットン市に宿つた。

翌六月八日正午頃ストットン市を出發既に Car は Virginia より West Virginia に入り廣漠たる青々とした平野の中を快走して、いやと云ふ程大自然に親しんだ、此の日約二百哩を走り、エレンボーに一泊した。

翌六月九日午前十時 Ohio 州指して出發環境に變化多く十分旅情を慰むるに足るものがあつた、山越へ河越へ、野をも越へて、やつと Ohio 州に入りました、Ohio 州の道路は實に完全良好、大岡兄の操縦も餘程容易に氣軽くやるのを見受けました、同乗の佛國人は途中午後一時半シンシナチー市に降りて一ト先づ別れました、出發後此の日まで四日間と云ふもの外人同乗の手前日本語を嚴禁して居つたが、アシャー氏降車後は跡に残つた大岡兄と僕の二人は誰れに遠慮もなく

早速日本語に早變りして高らかに話し合ひ、又朗かに合唱するなど元氣横溢愉快に駛走を續けました、午後五時頃 Columbus に到着一泊しました。

翌六月十日朝十時半 Columbus 出發 Indiana 州に向ひました、廣々とした玉蜀黍畑を通り愉快なる旅を續けつゝ、夜八時半ブルーミントン市に到着しました、此處は大岡兄が約十ヶ月滞在勉強した懐かしい町なのです、大岡兄は、あたりを懐かしそうに見廻しつゝ、徐行しましたが突如 Ohio Mr. Kennedy's Car と力強い聲で叫びました（ケネデー氏は大岡兄の恩師なり）早速 Car を止めて見ますと夫れは、ケネデー先生の Car に相違ないが同氏の友人が乗つて居られたのでした、此の友人とも大岡兄は知り合ひなので久方振の對面に如何にも懐かしそうに又何とも言へぬ愉快そうに見受けました、此の夜ホテル、グレンハンに長き疲れを休めました、此處に三日間滞在しましたが大岡兄は舊師や學友扱ては各方面の知人などの訪問に忙がしい中にも恩師ケネデー先生と僕との三人連れで附近のゴルフ場に出掛ける餘裕もありました、大岡兄にとりては如何にも親みのある懐かしい忘れたくない土地として離れにくい氣持に見受けましたが何分前途を急ぐので六月十三日ケネデー先生の御兩親の居られるクリーヴランド市に向け出發致しました、出發の前日二人で夫々 Good-bye の挨拶廻りをしましたが、之れが大岡兄永遠の別離にならうとは誰が知りませう！ 想へば實にイヂラシキ限りです、大岡兄が昨年下宿して居た素人宿の老主婦エルク夫人に御別れに行つたとき、老主婦は僕に向つて大岡は俺の小供だ、自分は

大岡を紐育にやりたくはない、此の地には是非留まるようにして呉れと涙を流して引留めたのであつた、そうして私達が御別れして自動車で二丁許り走つた私達の後姿をボンヤリ見送つて居たのを見た、何んと美しい人情であらう！ それから、ケネデー先生の處に御別れの挨拶に行つたら是亦親切の言葉を下さつたのみならず先生自ら大岡兄の自動車を點檢して一部分の修繕まで氣を付けて下さつた、實に異人種とも見へぬ人情味の籠つた親切を深く感謝しつゝ、「サヨナラ」を告げました、これにつけても白人と云ひ日本人と云ひ顔の色こそ違つて居るが人情其物については何等の差別もありませぬ、今日國交相互の間に日米親善を聲高に叫んだ處で、後に刀を秘くし秘密外交の内に如何に握手をした處で眞實なる意味の否一時的な親善も出來兼ねると思ふ、斯うした政府同志の我慾を去り、秘密を去つた國民外交個々の若き前途ある血に満ちた人達こそ確かに日米親善の目的を達し得るものと私は今回大岡兄と米人間の心からなる友交に打たれました、しみじみと心に感じたので聊か脱線の氣味がありますが特に茲に記する次第であります。

其日の午後二時愈々ブルミントン市を出發しましたが親みの深い此の町と別れる大岡兄は感慨無量と見へて約十哩許りも走つたと思ふ頃、彼大岡兄は突如何んだか俺の後髪を引張るような氣がしてならぬと云つたので、そんな薄氣味の悪いことは言はぬがよいと氣分を轉換さすべく僕は讚美歌の別れの歌を唱ひ、又逢ふ日までを唱ひましたら彼大岡兄は、「いや君何んと

も云へぬな―其歌懐かしいよ、少なからず心をさすね―」と申しました、そうこう話して居る内 Indianapolis 市に到着致しました、それからコースを Cleveland の方向に進め Springfield に到着したときは丁度夜の十一時半で此の地に一泊した。

翌六月十四日午前十時四十分出發オハヨオ州オベリン市に向ひ、其日の午後二時オベリン着直ちに Oberlin College を訪問、在學中の神戸高商出身福島氏に會ひました、同氏は去年末クリスマス休みに紐育に遊びに來り大岡兄に處々方々の案内を受けた關係で色々と厚意を示して呉れた、此の地に一泊した。

翌六月十五日朝十時半、オベリン市を發し Cleveland に向ひ、ケネデー先生の叔母さんに敬意を表し、それよりケネデー先生の自宅に伺ひました處、非常の歓迎を受け二日間宿泊世話になつた此の間、同家一同の大岡兄と僕の二人に示された親切には全く感激せずには居られなかつた、斯くて名残惜しくも六月十七日別れを告げてシンシナチー市に向ひました、それは數日前同市に降ろした佛國人學友アシャー氏を同市にて收容せんが爲めでありました、これから再び三人連れとなつて Niagara 瀑布見物へと北方にコースを進めました、此の日約百五十哩を走りオハヨオ州ウエスレヤン大學見學後 Delaware 町で一泊致しました。

六月十八日朝十時半 Delaware を出發、バッファロー市を経て午後六時頃ナイアガラに到着した、此の晩に Niagara Fall の夜景見物と出掛けました、大岡兄は「ゴージャス」と感嘆時を久ふ致

しました、次に加奈太領の方に廻りナイヤガラ瀑布を見物したが其眺めの壯大雄渾なる思はず快哉を叫ばざるを得ませぬでした、折柄小雨が降り彩つた電光に反映する其美観さは實に名状し難き痛快さでした、此の夜 Niagara に一泊した。

翌六月十七日正午頃 Niagara を出發、愈々紐育へと一路歸途を急ぎました、午後三時エセカに着、コーネール大學の見學をした、エセカより八十哩許りの處に、ウオットキン、グリーンと云ふ美しい公園のあるのを見物した、此處には小さき瀧やら珍らしい巖石やら、大して高い山ではないが割合に日本に似た處のある風景を有するので大に我々の氣に入つた、夕刻 Port Jereis 町に入り一泊、同乗の佛國人學友は此の地で夏季キャンプ生活を營むべく又々別れた。

六月二十日午前十時 Port Jereis 出發、歸路を急ぎ同夜半十二時過 New Jersey に到着一泊した。六月二十一日午前十時 New Jersey 町を出發、約五十哩を離れたる紐育市ハドソン河岸の International House に無事歸着したのは同日午後一時頃であつた。

斯くて丁度十五日目に約二千哩の米大陸自動車旅行を終つた譯で、此の間大岡兄は始終操縦の重任に當つた爲め紐育へ歸着のとき、相當の疲れを見せて居たのは氣の毒に思つた、尤も彼の元氣は之れが爲め妨げられることなく同夜同郷人上田金作氏宅に出掛け、久振りに日本料理に舌鼓を打ちつ、僕と共に旅行中の愉快な思ひ出に打興じたのであつた。

彼大岡兄が斯る樂しき大旅行を終へた後、僅かに三週間にして病魔の襲ふ處となり、爾後四週

間の療養其甲斐なく溘焉として幽明境を異にするに至つたこと全く夢の如く幻の如し、慚然として天を仰ぎ嘆息するも及ばず、嗚呼人生の無常何ぞ斯の如くなる。(昭和六、一二、二三)

亡き骸を迎へて

父

昭和六年九月八日、お前の亡き骸を乗せた春洋丸が横濱に着くと云ふので其前夜親戚と共に横濱に向つた親戚や知人の御厚意ある見送りを受けたが、之れが喜ぶべき見送であつたならばと人知れず泣いた、悲哀に満ちた此の身は早くベッドに横はつたが萬感走馬燈の如く湧いて熟睡すべくもない、八日午前三時眠られぬ儘、ベッドのカーテンを引揚げ室外を眺めた、右手なる箱根の中天には笠を衣た三日月が薄暗い光を放つて秋の下界を物凄く照らして居る、哀愁を懷く身には一入寂寥を覺へて萬感交々胸をついた、午前四時半頃には暗雲三日月を蔽つて、ほの暗き下界は一層の悽愴を帯び、天心ありて此の父に同情するかの感を抱かせた、自分はベッドに横はつて此の悽い光景をシメヤカに打眺め、ホノノと明け行く曉天を睨んで一歩々々横濱へと近づくのであつた。

午前六時三十六分横濱に着いた、本船は午前八時港外に現はれ、午前九時半岸壁にシヅク投錨した埠頭には幾旒かの歸朝歓迎の幟が頭上高く翩翻と翻へり、ハシヤイだ歡聲の漂ふ中に此の父一人は愛とし子の遺骨を迎ふべく悄然として此の歓迎團の傍りに佇立するのであつた、實に絶へ入らん許りの苦惱。マザクと味はされた。

日綿社員富永氏によつて齎らされたお前の遺骨は、親戚知己十數名の敬虔なる出迎を受けたが、之れを見た瞬間此の父は目も眩まん許りの異常なるシヨツクを感じた、忽ち涕淚潜然として下るを禁じ得なかつたことは流石に凡夫の嗜み無さを示して耻かしかつた。

二年前に同じ埠頭で愉快に別れを惜んだ此の父親が、今は涙を以てお前を迎へねばならぬとは何と云ふ運命の皮肉であらう！

お前の遺骨は直ちに日綿横濱支店の應接間に運ばれた、小林支店長始め幹部社員の御親切によつて焼香場の準備萬端整へられてあつた、此の應接間の直ぐ二階に當るところは、昨七日島人リンバーク夫妻が訪れたと云ふアメリカ領事館事務所のある處だ、アメリカに留學して居つたお前の遺靈が、日本に歸り着いて第一に

アメリカ領事館と同一建物内の日本綿花支店の應接間で焼香を受けたことは能くくアメリカとの因縁が深かゝつたと思はれた。

斯くて焼香が數十名によつてシメヤカに取り行はれた席上、米國より齋らされたお前のデスマスクの寫眞——生けるが如き姿態其儘の寫眞が、次ぎへと回覽されたとき又しても歎歎嗚咽の忍び聲が、あちこちと洩らされるのであつた。

憐れなる此の父は銅壺に納められた、お前の遺骨を護りつゝ、午後一時二十八分横濱發の特急富士號で——多數の見送りを受けて——神戸に向つた、二年前横濱を東に向つて旅立つとき西方遙かに聳ゆる富士の秀峰を故國の見納めにして、雄心勃勃米國に渡つたお前が今や哀れにも永遠の眠に就いて、此の靈峰を仰ぎ見ること叶はず、恨綿々東海道を西へ——と突つ駛つて居るのである、せめてもの同じ名の富士特急に乗り合はせたことが心やりでもあらうか？

爰に一つの奇縁は同じ富士號に、去る七月日本アルプスに於て墜死した長男(十七歳)を持つた中野正剛代議士が乗り合はされたことであつた、子を思ふ親心の眞情を中央公論誌上に公開して、天下多數の讀者を感泣せしめた其人なのである、又アメリカの鳥人モイル、アレンの兩名が此の日の拂曉日本より太平洋横斷の快

舉に就いたことも亦奇縁と云ひ得よう、京都大阪神戸驛には夜分遅い時刻に不拘特に出迎への知人の多かつたことは、お前に御同情多き證左として唯々感激の外はなかつた。

神戸驛頭に出迎へた慈母、妹等がお前の靈壺に縋り付いた劇的シーンは全く此の世に於ける悲痛の極みと痛感させられた。

昭和六年九月八日午後十一時半、お前が變つた姿で自宅に歸つた後の家族の數々の嘆きは必らずやお前の遺靈に強く感應したことであらう。

大岡破挫魔

皆様の御迷惑を顧みず親心の勝手な御願を快く御承諾下さいまして御多忙中御同情に富んだ追悼詞文を御惠投下さいましたことを爰に謹んで厚く御禮申上ます、定めし故人も黄泉の下に感激満足して居ることゝ信じます。

尙本集は豫定より紙數増加の爲め止むなく玉稿を勝手に短縮したり、又全く掲載しなかつたもの十數篇に上つたことを切に御詫び申上げます、事情不悪御寛恕を御願致します。

終りに臨み故人生前中多大の御芳情を辱ふ致したる大方諸賢並に昨夏病葺中御親切なる御慰問及び御看護に預りたる辱知諸氏及び永眠後深厚の御同情を賜りたる皆様方に對し此の機會に於て心からなる感謝の意を表します。

併せて本追悼集編輯につき一方ならざる御配慮を賜りたる故森下清二氏、河村政一氏、湯淺恂一氏、松本寅一氏、加藤義親氏、其他の諸氏に厚く御禮申上げます。

昭和七年七月三十一日印刷
昭和七年八月七日發行
(非賣品)

神戸市須磨區離宮前町一八四

編輯兼發行人 大岡破挫魔

大阪市東成區鶴橋南之町一丁目五七八五

橋谷印刷株式會社

印刷人 田淵清次



age 23

June 10, 1930

On graduating from Indiana University,
Bloomington, Indiana, U. S. A.

念紀業卒學大ナアヂンイ 日十月六年五和昭

歳三十 二

The Evening Glow.

Dedicated to my beloved son,
Akira Ohoka, M.B.A.,
 on the occasion of the
 first-Anniversary of his death.

CONTENTS.

	Page
In memory of Akira Ohoka <i>By Hazama, Ohoka</i>	1
A letter from Mr. A. W. Taylor	3
" Do.	4
" Mr. B. C. Goss	5
" Mr. W. B. Cornell... ..	6
" Mr. Hurry Edmonds	8
" Mr. Wm. A. Rawles	9
" Mr. C. W. Barker... ..	10
" Mr. Thomas W. Rogers	11
" Mr. J. C. Kennedy	13
" Do.	15
" Mr. H. M. Hudelson	17
" Mr. & Mrs. Frank Yelch	17
" Mrs. Frank Yelch... ..	19
" Mr. Harry L. Yelch	21
" Mr. & Mrs. P. J. Kennedy	22
" Mr. Cletus Kennedy	23
" Mr. Bloomfield Moore, Jr.	24
" Mr. Doun C. Woods	26
" Mrs. M. E. Miller	27
" Mr. William J. Kennedy	27
" Mrs. C. M. Fisher... ..	29
" Mr. Harry Engel	30
" Mr. Grace Lillian Smithson	32
" Miss Marion Smithson... ..	33
" Mr. Frank E. Dow	34

	Page
A letter from Mr. Oscar J. J. Hug	35
„ Mr. Crispin B. Matha	36
„ Mr. Robert G. Mihan	40
„ Miss E. Constance Earle	41
„ Mr. & Mrs. John A. Hoadley	42
„ Mr. Roy Smith	43
„ Mr. H. Geo. Bowyer	45
A word of gratitude	<i>By Hazama, Ohoka</i> 46

In Memory of Akira Ohoka.

To my Dear son :

This little work, "The Evening Glow," compiled on the occasion of the first anniversary of your death, is merely a collection of letters so kindly written by your esteemed seniors and friends, and also some of the writings you left behind. You will surely feel very grateful to each of them, without whose kindness and sympathy this attempt would have been impossible of realization. If this work will help alleviate your sorrow and loneliness, I shall be very happy.

You passed away only at twenty four, but you may content yourself considering that you lived rather a useful life for your age; so much so, throughout your short life you were always industrious to win a learned brain as well as refined personality; thousands of miles you had traversed, home and abroad, may have helped you to know the world to some extent; you may have done something to promote the international friendship between America and Japan; you may also have enjoyed yourself in various art-loving pursuits, and fairly well mastered them.

To quote an old Chinese saying, "Although you live for a hundred years, well dressed, well fed, it is not worth a day unless you say something good to lead the world, or unless you leave something to benefit mankind", while an old Japanese Priest declared "A Hundred Years' life, if lived in idleness, is rather a pitiful and shameful existence". I may also say that had you lived for a hundred years and done nothing, it would have been no more than not having lived at all. You might therefore be well contented that your short days were worth as many years.

Although you disappeared from our sight, your soul is ever alive in the hearts of those who miss you, especially in the hearts of your family and relations. I reiterate that you are still distinctly, beautifully and strongly alive within us. You encourage us in everything that we do; you stimulate us in our spiritual activity; your so being with us is an utmost consolation! Oh, my beloved boy, your death purifies my soul and beautifies my heart!

For some time since you passed away so great was the shock to the family, so upset were we that all of us were quite at a loss what to do, but have since gradually reconciled ourselves to the loss, and are devoting our minds to the prayer that your soul may rest in eternal peace. May God bless you!

From your loving father,

Hazama Ohoka.

Kobe, 10th. June, 1932.

New York City,
January 25, 1932.

Mr. H. Ohoka,

184, Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

My dear Mr. Ohoka:

May I take this opportunity of expressing to you my sorrow at the untimely death of your son, Akira Ohoka, last August. I should have written you earlier were it not for the difficulty of knowing exactly to whom I might write.

During his period with us as a student we became very much impressed with his delightful personality, his high purpose in preparing himself for work in his own native land, for his diligence and faithfulness as a serious minded student. He was looking forward with eagerness to finishing his work here and going back to be of service to his native country. His untimely death was a personal loss to us, and to a much greater degree to his esteemed family. It will also be a loss to Japan.

We join with you in mourning his premature death.

Very Sincerely Yours,

A. W. Taylor,
Dean of
Graduate School of Business Administration,
New York University.

New York University
Graduate School of Business Administration
A. Wellington Taylor, Dean

90 Trinity Place, N.Y.
April 27th., 1932.

Mr. H. Ohoka,
184, Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

My Dear Mr. Ohoka ;

I take great pleasure in informing you that at the request of the faculty of the Graduate School of Business Administration at its last faculty meeting it was voted to recommend your late son, Akira Ohoka, for the Master of Business Administration degree, granted posthumously. It is expected that his name will appear on the commencement program and his diploma will be sent to you.

It pleased me very much that this action was taken by the faculty on their own recommendation and as a recognition of the esteem in which your son was held by them. The officers of the University have heartily approved of the faculty action.

Very Sincerely Yours,

A. W. Taylor,
Dean of
Graduate School of Business Administration,
New York University.

New York City,
January 25, 1932.

Mr. H. Ohoka,
184, Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

My dear Mr. Ohoka :

Mr. F. E. Dow has shown me your recent letter to him concerning your late son and since I know Mr. Ohoka quite well, I'm taking the liberty of contributing this note in his honor.

It is my function at the University to advise all students in arranging their program of study for their degree and in this connection I came to know Mr. Ohoka. I remember him as being quite, almost bashful in manner, though he enjoyed being joked more than most of our foreign students.

I remember well that Mr. Ohoka and I came to a disagreement concerning his program and I was annoyed at his insistence and tenacity in disagreeing with me. But when I went into the case thoroughly I discovered that he was right and that I was wrong, so I respected his tenacity from then on.

Your son was one of our best Japanese students (we have had many), and needed only to complete his thesis to secure his Master of Business Administration degree. It was while he was finishing his thesis that he was struck with his fatal illness.

In closing please permit me to extend the sympathy of those who knew Mr. Ohoka in your bereavement.

Sincerely Yours,

B. C. Goss,
Assistant to the Dean,
Graduate School of Business Administration,
New York University.

New York City,
February 15, 1932.

Mr. H. Ohoka,
184, Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

My dear Mr. Ohoka :

It was with a great deal of sorrow that I learned, through your letter of January 6, of the untimely death of your son, Akira, Ohoka, on last August 6. I did not even know that he was ill. It was only a few weeks previous, June 20, that I received a post card from him saying that he was having a most enjoyable vacation visiting Niagara Falls, Watkin's Glen and other places. The post card he sent me I am enclosing for you.

As you know, your son was majoring in Management in the Graduate School of Business Administration and had studied under my instruction for sometime. He was an excellent student—one of the finest young men we have ever had, and we thought a great deal of him. He was always an enthusiastic, ambitious young man with a most pleasing and friendly personality. He had successfully completed all of the class requirements for his degree in Master of Commercial Science, including a difficult oral examination in which he displayed marked ability. The only requirement in which he was lacking was the finishing of his Master's thesis on "How Industry is Relieving Unemployment in Times of Depression". He had selected this research with the thought that through such research he might be able to develop some ideas and principles that would be of benefit to his country, Japan. Unfortunately he passed on to the

Higher World before he had completed the work, although much progress had been made on it. I have read his preliminary outline and draft of the thesis. Therefore at the next meeting of the faculty of the Graduate School of Business Administration I will make the request that the University in this particular instance waive the requirement of the finished thesis and grant the degree of Master of Commercial Science. I have already spoken to Dean Taylor, head of the Graduate School of Business Administration, and it is our belief that under the circumstances the faculty will readily concur and grant the degree as a tribute to one who was ever deserving of all honor.

If you ever come to the United States, I hope you will call to see me so that we will have the pleasure of meeting in person.

Yours Faithfully,

W. B. Cornell,
Chairman,
Department of Business Management,
New York University.

New York City,
March 23, 1932.

Mr. H. Ohoka,
184, Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

Dear Mr. Ohoka:

Your son's many friends at International House were so very sorry indeed that he died suddenly last summer in Ocean City, New Jersey. He endeared himself to his many friends from all nations by his sincere and earnest manner. He was a kind, gentle and quiet person, rather reserved, but very likeable when one knew his real character. He was also a hard-working student. Perhaps it was on that account that he was taken sick. At any rate, he has been very much missed, and we, his friends, extend to his parents, relatives and friends in Japan, our sincerest sympathy and regret for their bereavement. One of his Japanese friends, Mr. Omura, who knew him well and visited him in the hospital during his last illness, has prepared the accompanying letter.

Under separate cover I am sending you the 1931 Year Book of International House, on Page 76 of which you will find your son's picture as one of the 1000 members of the House from nearly 70 nations. It has occurred to me that you might like to treasure this memento as an example of your son's international-mindedness.

Please believe me,

Yours Very Sincerely,

HARRY EDMONDS,
Director,
International House.

Indiana University,
School of Commerce and Finance.

Bloomington, Indiana,
January 25, 1932.

Mr. H. Ohoka,
184, Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

Dear Sir:

I was much surprised and grieved to learn from your letter of the untimely end of the earthly career of your much beloved son.

While he was a student of our school, I came to know him very well. I admired him for his ability, industry, character and affability. He was always interested and enthusiastic in his work. He seemed to me to have a fine prospect for a useful and successful life. His departure at such an early age seems all the more regrettable when we appreciate how badly the World needs men of talent, sturdy character and a sympathetic understanding of World-wide problems.

At such a time of bereavement there is little that a stranger can say to assuage the grief of a father, but I wish to assure you of my profound sympathy in your hour of sorrow.

Sincerely Yours,

Wm. A. Rawles,
Dean,
School of Commerce and Finance,
Indiana University.

Indiana University.

Bloomington, Indiana.
February 19, 1932.

Mr. H. Ohoka,
184, Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

My dear Mr. Ohoka,

I was very grieved to learn of the death of your son, Akira. He had been a student of mine in several classes. The study he turned in to me on the "Marketing of Silk" was one of the most interesting reports I have received.

At the time your son finished our University I was sick and unable to be on the campus. He came to see me and presented me with a most beautiful picture of his native Japan. I have it framed and hanging over my desk. I shall cherish it even more now that Akira has passed away.

Several times, this fall, I have thought of your son as being home again and with his family and friends. So it was, indeed, a shock to know that he had passed away. I am sure that all of us who knew him here at Indiana University liked him. We extend to you our sympathy in your bereavement.

Sincerely Yours,

C. W. Barker,
Professor,
Marketing of Merchandising,
Indiana University.

Indiana University,
School of Commerce and Finance.

Bloomington, Indiana, U.S.A.
March 4, 1932.

Mr. H. Ohoka,
184, Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

Dear Sir:

I was shocked to hear of the death of your son, Akira Ohoka. He had written me two or three letters after leaving Indiana University and it was my impression that he was still attending the University in New York. I would be pleased to learn further details concerning his death.

While Mr. Ohoka was in school as a student I had opportunity to become fairly well acquainted with him. I remember with pleasure several conversations which we had concerning his native homeland, Japan. When Mr. Ohoka first came to the University, he had some difficulty with his language and for this reason he worked under some handicaps during the first few weeks. However, by the end of the first semester he had overcome this difficulty somewhat.

Some weeks ago I had a conversation with Mr. Fusanobu Isobe of the Mitsui Mining Company, Ltd., of Tokio, and during this conversation we had occasion to refer to Mr. Ohoka and the fact that he lived in Kobe. While Mr. Isobe did not know of you or your son, he was interested to know that your son had attended

the University here. Mr. Isobe is a graduate of our University and an outstanding chemical engineer in his own native land. He informs me that a young Japanese student of his acquaintance plans to enroll in our School of Commerce here during the coming summer.

May I extend to you and your family my sincere sympathy in the loss of your beloved son.

Yours Very Truly,

Thomas W. Rogers,
Assistant Professor,
Industrial and Personnel Management,
School of Commerce and Finance,
Indiana University.

178 N. Professor St.,
Oberlin, Ohio.

October 12, 1931.

My Dear Mr. Ohoka,

Your card came to me today just after I had been thinking of Akira. He had hardly been out of my mind, to tell the truth, since I saw him last. These past few days I have been in the hospital with a bit of cold, so I have had plenty of time to think, and some notion of the terrific blow Akira's death has been to you and Mrs. Ohoka has come to me. And of course I thought of the plans we made when I was in Ocean City, and of the good times we had last summer. He was a great lad—I suppose it was that insatiable urge for the knowledge that caused his death, for if he had stayed in Bloomington, I must think that we could have prevented it.

Sometimes I have a guilty feeling about having advised him to go on to New York—but he did so want to go.

Nothing but the best would do for him. He certainly had the stuff that makes great men. Professor Frank Davidson of Bloomington wrote: "If you write to Akira's people, tell them that there is one family in Bloomington that will miss him and his gentlemanly ways sorely". And that's the way we all feel. We send you our deepest sympathy, but we must at the same time congratulate you on having had a son who represented the finest things that Japan or any country has to offer.

Yours Most Sincerely,

J. C. Kennedy.

Oberlin, Ohio, U.S.A.

Oct. 12th, 1931.

My acquaintance with Akira Ohoka began in the fall of 1929 when he came to me to enroll in a course in Business English, which I taught for the School of Commerce and Finance of Indiana University. Because we took an immediate liking for one another, we saw each other as frequently as Akira was free. Occasionally we walked, when the weather was right we played tennis, often we rode about in my car—a diversion of which Akira was quite fond.

Because I thought Akira had placed work as the highest good in life and applied himself too closely, whenever the opportunity came I took him away from it. But opportunities came seldom. He was determined to make the utmost progress while he stayed in the United States. By the end of the school year he was quite tired, needed a good long rest.

I had planned to spend the summer quietly at my home near Willoughby, Ohio, so I asked Akira to come and live with us, knowing that my mother and father would like him immensely. He seemed to feel at home right away, for which I was glad—my mother can make anyone perfectly at his ease in a very short time. She became very fond of Akira, as was all the rest of the family. He was extremely attentive, insisted on keeping himself busy at little odds and ends all the time, and was, I think I can say, quite happy. Our main object—a little gain in weight for Akira—was accomplished, and both my family and I had a most pleasant summer of it.

Akira's insatiable thirst for knowledge led him into the desire to go to one of America's best business schools—a desire

which I seconded and pressed because I knew how close to his heart it lay. He went to New York University, studied too hard, ate, I think, too hurriedly; in short, he forgot himself completely in his striving for something fine and good.

There is little that I can say beyond the bare statement that I loved Akira Ohoka because he represented the finest type of young manhood: intelligent, thoughtful of others, diligent in his work, a thorough gentleman. William Cory translated a poem of Callimachus which expresses better than I possibly could the feeling I have for Akira:

They told me, Heraclitus, they told me you were dead;
They brought me bitter news to hear and bitter tears to shed.
I wept as I remembered how often you and I
Had tired the sun with talking and sent him down the sky.

And now that thou art lying, my dear old Carian guest,
A handful of grey ashes, long, long ago at rest,
Still are thy pleasant voices, thy nightingales, awake;
For Death he taketh all away, but those he cannot take.

J. C. Kennedy.

New Windsor-on-the-Hudson,
Newburgh, New York,
February 5th, 1932.

Dear Mr. Ohoka :

Your very kind letter of January 6th, is very much appreciated, but it made me very sad. Please accept my sympathy in your great loss. If I did any real service for your son, I am very glad. I am sure it was a pleasure to have him with me even for the short time. It was a real pleasure to do for him. We were very eager to have him visit us up here, but it seemed other matters interfered. We hoped to have him during the Christmas holidays a year ago, but he found it impossible to come. Perhaps his illness kept him from coming last summer. Just the day before your letter come, I had prepared a list of names, of which Akira's name was one, to ask Indiana University to give me their present addresses.

I was very sorry to have to part from him at Bloomington but my daughter was here and she is all I have. All I could do for Akira was to find him a good home. When we parted, he fell on my shoulder and wept bitterly. I mingled my tears with his. I had learned to love him dearly, and I am sure he liked me. I have been trying to think of some special incident but recall nothing especially.

He was always so nice and frank, and sincere and pleasant and thoughtful and considerate and kind and interested and interesting and sensible that nothing else happened. No nonsense ever manifested itself. I saw Mrs. Welch in Sept. 1930 and she spoke so highly of him. No one could have conducted himself more graciously and gentlemanly than did Akira.

I fear I am not giving you just what you wanted ;
but you may use any of this in any way you wish to.

I can assure you it was a privilege to know Akira.
I wish we had more like him.

I mourn with you and am,
Most Sincerely Yours,

H. M. Hudelson.

Bloomington, Indiana,
January 25th, 1932.

Mr. & Mrs. H. Ohoka,
Kobe, Japan.

Dear Friends :—

I was so glad to receive a letter from you once more. As I only had the telegram, and I answered right away, hoping to hear the cause of his death, it seemed so sudden. I had seen Akira only two months before, here at our home, full of life and happiness. I asked him to stay longer but he said he must go back and do some business. Then we had a card telling of his safe arrival in New York.

Mr. Welch and I had started on a visit to Chester, New Jersey on August 6th and arrived at my daughter's on Sunday Eve. Next day, Monday a.m. the telegram came. It gave the name of the hospital in State of New Jersey, but not the name of the city, so we could not go to him nor write you as I had no address. But I wrote a letter and sent it to George Matsumoto 103 St. Rockaway

Beach, Rhode Island, and asked him to tell us what caused his very sudden death and where he would be buried? but have never had a line until to day, when your letter of January 6th arrived with your address. We have grieved with you all. To give up such a fine son just starting in life, so highly educated and prepared for a good life. I loved Akira like my own son, and have never had any one in my home that was more of a gentleman, and he was always so kind and thoughtful of us.

I missed him so much last year, but as long as he was in U.S., I felt we would see him again. But now it is so different. I wish I had words to express my deep sympathy to you and family and hope that you may some day write and tell us if it was an accident or sickness. January 27th will be just one year since our daughter lost her husband in auto accident and she was left with three little girls, one only 3 years old. So we know how it is to give up our loved ones.

I still read the lovely book you sent me "A Daughter of Samurai" I am glad to write the little I could tell and I surely hope to meet your dear son in Heaven before many years, as I will be 70 years old next year. And please accept our deep sympathy in your sorrow.

Loveingly,

Mr. & Mrs. Frank Yelch.

Bloomington, Indiana.

Jan. 25, 1932.

I have so many happy memories of Akira Ohoka that I hardly know which to write.

He was with us in our home the School Year, and I never had any one in my home that was as fine as he was in every particular.

He was very polite, thoughtful, unselfish, kind, and often tried to help me do my little tasks in the home.

One in particular I remember, just before his graduation week, he had a vacation, we had talked of Japanese Cherry Blossoms whose blooms were pink, and I had an Indiana Cherry Tree, that had white blossoms, and was full of fruit in our yard by the house and he could reach them from our porch up stairs and eat them, so I was glad they were ripe before he left so he could see how fine they were and he liked them. They are very juicy.

One day I had 3 gallons to take the seed out and can for winter use. It is very slow work to seed until you get used to it. He came in and offered to help and we both laughed to see him try to get the seed out. The juice would squirt out on both of us, and I said you are not used to work like this, but he just stood by the table and tried until he could do it as fast as I did, and he helped until all were done smiling and happy to learn any new thing and helping others.

One year later June 8, 1931, he and his friend came to visit us, and they had tea with us. Akira had brought me a little sack of cherries he had bought at market and I put on the table for us all to eat.

He came in a few days in his car and told us "good by." I said be very careful and do not get hurt, and that was my last sight of him.

I loved to hear him play on the piano. He had a beautiful soft touch, and I soon learned to know the, Japanese National Air, I called it. He always played it first. When he graduated (got his degree) I went out to the campus and saw Him March up with hundreds of students and receive his diploma. I was very proud of him, and he seemed to be my boy. May God Bless you all in your sorrow.

Mrs. Frank Yelch.

Indianapolis, Indiana,
Jan. 25th, 1932.

Dear Mr. H. Ohoka,

Please accept from Mrs. Yelch and myself, our heartfelt sympathy for you and yours in your bereavement.

It was not my pleasure to know your son very well, personally. I met and talked to him only twice, and each time only for a few minutes. However it was impossible to meet him even so little and not be impressed with his unusually sunny disposition. His ready smile, and unfailing courtesy must have made for him a host of friends, all of whom will be deeply touched at his passing.

My mother speaks of your son so often, and I doubt if she could have thought more of any boy, not her own son, than she did of Akira. He always remembered her on special holidays, and treated her as always so considerately that her life was made much brighter. I know of no higher compliment to any boy.

Again let me express my sympathy to you and say that I feel the world is just a little better for me, and each of Akira's friends, for having known him,

I remain,

Sincerely Yours,

Harry L. Yelch.

Willoughby, Ohio, U.S.A.
March 1st, 1932.

We first met Akira Ohoka during the summer of 1930, when he accompanied our son John home from school.

We all grew very fond of Akira. His honest, sincere disposition endeared him to all of the family.

We often talk of him when grouped around the dining-room table. When Akira came here, our dining-room furniture was badly in need of redecorating and Akira undertook the task. He enameled the buffet, dining table and six chairs a light green. He worked diligently until the job was complete. We were all delighted with the work and he was proud of the finished task. He then bought a Noratake tea set, which was made in Japan, and decorated in light green and presented it to us. It looks very pretty on the table. We hope to get a picture of our dining-room and send it to you. We have tried several times but failed to get a good picture, thus far.

We were grouped around the dining table when word came that Akira had passed away. We sat in silence, too full of sorrow for words. We had hoped he would recover from his illness and we would meet again. We still hope to meet Akira again, in a world where sorrow never enters.

Mr. P. J. Kennedy.

Mrs. P. J. Kennedy.

Cleveland, Ohio,
March 3, 1932.

May I add my humble bit to your book of remembrance of your son, Akira? Often when my family would be away from our home, I would ask Akira to play for me on the piano, and he always graciously responded, if he were sure there was no outsider to listen to him. He played compositions by the people we consider Masters—Chopin, Grieg, Paderewski, Schubert and played them beautifully, with a delicate, lovely touch—and was so very modest about his proficiency. While I am an actor, I love music so completely and have so long wanted an outlet in the art of the pianist, you may readily understand that the few precious hours I spent listening to your son are, now, a great satisfaction to me—rare moments, filled with golden true art. I truly think that had our friend been spared us, he might have been a foremost exponent of the great art that was Chopin's.

My most heartfelt salutations to a rare soul, my friend, Akira Ohoka,

from his friend,

Cletus Kennedy.

289 Burgess Ave.,
Indianapolis, Ind.,
Feb., 17, 1932.

Dear Mr. H. Ohoka,

I was very sorry to receive the news of Akira's death. I had not heard from him for a long time, so I thought that he had returned to his country and had forgotten all about me.

I had the honor of living in the same house with Akira Ohoka. We soon became great friends, and spent many pleasant evenings together. Mr. Akira Ohoka was a fine student. He studied very hard and made high grades. He was well liked by all who knew him, and I can assure you he had many friends.

I invited Akira Ohoka to visit me at Indianapolis during the thanksgiving vacation, two years ago. He came for one day, and I showed him around the city. He was very interested in everything he saw, and especially Butler University. He took many pictures and I am sure that he enjoyed his short visit very much. He often mentioned the visit to me when school started again.

Mr. Akira Ohoka was very interested in automobiles. He learned to drive, and became a very fine driver. The last time I saw Mr. Akira Ohoka, was at the end of the school term in June 1930. Before I returned to Indianapolis, I took him for a short ride to Bedford, Ind. We were gone about two hours, and I showed him part of southern Indiana. He was very interested and enjoyed the trip. When I left, I told him to write me often, and he did, until about a year ago. I often wondered what had happened to him. When your letter came it explained everything.

I want to again say that Mr. Akira Ohoka was a very fine student, a real gentleman, and a true friend. He often told me about his home in Japan, and although I have never had the honor of meeting you, I feel I really know you. I want always to be remembered to you as Mr. Akira Ohoka's friend, and I wish always to remain your friend.

If there is anything I may do to help, don't fail to let me know.

Yours Truly,
Bloomfield Moore, Jr.

1523 Meriline Avenue,
Cuyahoga Falls, Ohio.
March 12th, 1932.

Dear Mr. H. Ohoka,

I was very much surprised to receive a letter from you and very sorry to hear of the death of your son, the late Akira Ohoka, whom I knew and admired very much.

Mr. Crispin B. Matha, of Ann Arbor, Michigan, and I had written to each other asking if either of us had heard from Akira, and we were both shocked to hear of his untimely death last August.

While attending school with your son Akira at Indiana University I learned to like him and to admire him for his efforts in school work and for his kind and gentle disposition in his associations with his schoolmates. He was very quiet but had a sense of humor also, and laughed at his own mistakes. From observing his attitude and efforts I am sure he would have attained success, had it not been for his untimely death.

Akira liked to talk of his family in Japan and worried for several days when he received a letter saying that his father was ill.

Akira was somewhat shy and bashful but everyone who knew him was his friend. He had no enemies here. I value him friendship very much and shall always remember him as one of my best friends. Any kindness I have shown him was more than repaid by his kindness to me and I was indeed very sorry to hear of his death.

He worked very hard while in school and did not

spend much much time in athletics although he played some tennis. He was determined to make a success in school and I am sure he would have done so had he been allowed to stay.

I hope this letter arrives on time and that it can be of some benefit to you.

Yours Truly,

Doun C. Woods.

Cleveland, Ohio. U.S.A.,
March 6th,, 1932.

Dear Mr. H. Ohoka,

I carelessly mislaid your interesting letter and only this morning came across it, safely tucked in behind some dishes, which I use rather unfrequently. I trust I shall not be too late in contributing to your Souvenir book, my bit in memory of your dearly beloved son.

Had I the time and ability to compile, I could write an entire book of memories to our little lad from Japan.

We loved him dearly and admired so much his determination, and the sacrifices he made in seeking an education in our country.

When he went to New York, he rode in my car, and I had a feeling all of the way, that he should remain amongst us.

I have a wee granddaughter, whom he was very fond of and she loved him; whenever he saw another baby, he would say its nice, but not so nice as your grandbaby.

Our nation is torn with grief at this writing, over

the kidnapping of the little son of our air idol, Charles A. Lindberg; how bitter those parents grief? They do not know where their little one is. But your dear parents know where your beloved Akira is.

Nineteen years ago I laid a darling daughter away, so I know something of the heart aches you have suffered.

May yours be the trustful faith; knowing that somewhere your dearly beloved son is waiting to welcome you to your eternal home.

My son and daughter unite with me in presenting to yourself and family our sincerest sympathy and respects.

May I hope to hear from you again?

Very Sincerely,

Mrs. Mata E. Miller.

Willoughby, Ohio, U.S.A.
March 8th, 1932.

Akira Ohoka was, without doubt, one of the finest gentlemen I have known or ever hope to know. His honesty, integrity, ability and perserverance are qualities for which I have only the highest regard. His well nartured personality grew more striking, as one associated with him. He was rich in friends, because his diligence made lasting, true impressions.

On the tennis court Akira was a player of no small talent. His trained eyes and patient nature encouraged my meager performance to one of fair proficiency. I have never encountered a man who could win or lose with such graciousness and perfect poise. He was a human dynamo when in action, and his spirit of true sports-

manship was always noticeable even in the keenest heat of the player's "battle."

Perhaps I recall most vividly the last time I saw Akira. It was at the International House in New York City late in the autumn of 1930. Never was an unexpected visitor treated with such cordial hospitality. As a host he was incomparable and our chat will always remain in my mind as a most happy memory. We parted not as merely good friends, but more as loving brothers, which more clearly expresses our deep affection.

I promised Akira that I would someday visit his Japan, the Japan he taught me to love and to rever. I intend to fulfill that promise. The trip will not be just as we had planned for I will be without my comrade. Though he will personally be away from me his spirit will still guide my wanderings and direct me to the many wonderful places he described so accurately. I shall not fail to recognize them, and to be as happy in his homeland as he was, I am sure, in mine.

I humbly thank that power that so graciously afforded me the pleasure of the true friendship of the finest of students, the keenest of scholars, ~~and~~ the most noble of gentlemen. His memory will be cherished in my heart forever. My lone prayer and hope, in the words of my countrymen, is that Akira Ohoka, beloved man of men, may rest in peace.

William J. Kennedy.

1433 Armadaleave,
Los Angeles, Calif.
March 4th, 1932.

Mr. H. Ohoka,
Kobe, Japan.

Dear Mr. Ohoka,

Your kind letter, written on Jan. 6th came to me promptly. I was sick for some time after your letter came; but now I am well and I am glad to write to you about your dear son Akira. He was a very fine young man; it was a real pleasure to my brother and me to meet him and get acquainted with him.

I am sure he would have made a noble man and would have been a blessing to his country and his people if his life had been spared. You must miss him greatly; you have my deepest sympathy in your sorrow. My husband and I were missionaries and lived in Kobe and Osaka for six years. We went to Japan in 1883. We liked Japan and learned to love the Japanese people, very much. After we returned from Japan we have lived in, and near Los Angeles; and have always been so interested, in the Japanese people we have met here. My husband died in 1921.

My brother comes from the East every year to spend the summer with me. In Aug. 1930 he and I went on a trip to Mt. Wilson a very high mountain near here. At that time a large military ship from Japan was in Los Angeles Harbor. The Captain and his officers went to Mt. Wilson the same day that we did. Your son also was there, to see the largest telescope in the world.

The first thing in the evening was a fine lecture, with wonderful picture of the sun, moon and stars, by a noted lecturer.

Then we all went to look through the large telescope at Saturn, one of the largest stars, and the only star with a ring of light around it. As your son was there no doubt he wrote to you about it all. We did not see him until the next morning, when we got up very early, to see the wonderful sunrise, when we went to a place where we could get a good view ; your son was already there.

I spoke to him and told him I had lived in Japan and, I was always glad to meet the Japanese people when they came to America. He and my brother and I enjoyed the beautiful sunrise together.

Then he very kindly took some pictures of my brother and me. We spent the day on the mountain top, and he and my brother and I all came back to Los Angeles on the same buss. The following Christmas, he sent me some of the picture ; they were very fine, and I was so pleased to get them.

I sent him a letter of thanks, and also a Christmas greeting. I did not see or hear from him again. I wished he could have lived in Los Angeles, so I could have seen more of him, and been his friend. He was so kind and so lovely in every way, I wished I could see more of him.

I know you must miss him greatly and you have my deepest sympathy in your great loss. If you ever come to Los Angeles I will be glad to here you came and see me.

Very Faithfully Yours.

(Mrs.) C. M. Fisher.

The Fine Arts Department,
Indiana University.

Bloomington, Indiana,
February 23, 1932.

Mr. H. Ohoka,
184 Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

My dear Mr. Ohoka :

I was more sorry than I can tell you to hear the news of your son's death. While he was here in school I had an opportunity to know him quite well, and I was fond of him, as I think all his acquaintances here were, for his simple, kindly, and fun-loving nature.

I asked him once to sit for a portrait, and while I was making the charcoal drawing we had some very happy hours, talking together on many subjects. The picture turned out quite successfully, and it has occurred to me that perhaps you would value it more than any reminiscences I could put into words. I am sending it to you today, separately wrapped, and I hope it will reach you in good condition.

Please accept my very deep sympathy to you in your great loss, and let me assure you that your son left many friends here who feel that loss keenly for themselves.

Sincerely yours,

Harry Engel.

Fourteen East Sixtieth St.,
New York,
March 8th, 1932.

Mr. H. Ohoka,

Dear Sir ;

Our sorrow for the loss of our friend, and the deep sympathy we extend to you in your bereavement, expresses inadequately all we feel in regret for the loss of your noble son.

One evening when a few students enjoyed the sociability of a dinner together, the group came with us to our hotel at the close of the evening.

We went to our dining room for some simple refreshments, and your son sat on my right at the table. It has never been my pleasure to meet a boy with more charming and courteous manners. His face was so happy that I knew he had come from a delightful home where he had passed a radiant childhood.

His sense of humor was very keen and he never forgot to include me-the older woman in the conversation. I was present as chaperon.

Your dear boy was very kind to my young daughter; he sent her cards, and a few letters, and so kindly offered to give her information regarding his country which we hope some day to visit. He seemed most happy when he spoke of his home and his return to his parents.

Even in the face of your deep sorrow, it must fill your hearts with gratification to know your son was loved and admired by all who knew him. Again permit me to extend the deepest regards and sympathies of my husband and myself.

When you came to the United States, will you give

us the honor and pleasure of coming to see us?

Some of the winters we are here ; in the summer we are generally at home in Beverly Hills.

Very faithfully yours,

Grace Lillian Smithson.

(Mr. Fred H. Smithson.)

To
Mr. Akira Ohoka.

14 East 60 Street,
New York City,
March 7th 1932.

Mr. Akira Ohoka was a young man of such high culture that all who knew him recognized in him a representative of a most noble family. His thoughtfulness and courtesy, his gentleness, and his attitude of kindness toward the customs and interests of other nations, impressed all who knew him.

He was the leader of a society for the promotion of friendship and understanding between Japan and the United States. At the meetings, he was a most gracious host and guest. When absent, Mr. Ohoka did not forget his friends, for when on a voyage he wrote interesting descriptions of the places he visited, so that his friends shared his pleasure.

Mr. Ohoka's death is a great, imparable loss to the world, as well as to his own country.

It is a privilege, a great privilege, to have had his friendship, and a great privilege to have known so fine a man. But his memory, and all the high ideals he stood for shall endure, for "To live in the hearts of those we loved is not to die".

(Miss) Marion Smithson.

New York City,
March 2, 1932.

Mr. H. Ohoka,
184 Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

My dear Mr. Ohoka,

When I learned of the untimely death of your son, late Akira Ohoka, I was left with a deep feeling of sorrow. My heartfelt sympathy goes out to you in this time of your irreparable loss.

It was my pleasure to be associated with him in classes several times each week, and my admiration for him grew constantly. Our relations were always most pleasant and although we met only at New York University I was impressed by his sense of humor.

Out of his understanding of American customs and sense of humor we came to have a friendly salutation with which we greeted one another when we met.

It came about in the following manner. One day before a class which we were to attend I was talking to an older lady when Mr. Ohoka came by. Afterwards he and I were talking and he humorously mentioned having seen "my girl". After that we greeted one another with a good-natured "How's your girl?"

Anyone who came in contact with Mr. Ohoka could not but be impressed by his integrity, scholarship and ability. He was highly conscientious and a student who deserved and received the respect of everyone he met, both faculty and students of the University.

I am glad to have known your son and to have been associated with him. I shall cherish his memory and again extend to you my sympathy in the loss of your beloved son.

Sincerely yours,

Frank E. Dow.

New York
International House
January 25, 1932.

My dear Mr. Ohoka,

It is with profound regret I heard of the departure of my dear friend Akira Ohoka and at the same time I feel myself honored by your kind request to write about him, which I am glad to do.

My friend was a very industrious student and his conscientious application to his studies unfortunately left him not as much time as I should have liked to pass in his company. However we had a good many suppers together here at International House and we often had very interesting conversations, mostly of serious nature. Akira's charming personality made these suppers always a source of pleasure, especially when he talked about his native country, Japan. We exchanged our opinions in all phases of learning. The kind way my late friend used to ask me about my own country made it a pleasure to answer. Of course we discussed very often New York, University, The United States, and our respective work, and so on. Thus our meals drew into length which both of us enjoyed.

It is a pity to think now of his plans for the future, as he used to paint them in the highest optimism, and to see how they were so quickly shattered by his premature death. I shall always remember my friend as a kindhearted, studious, broad-minded and quick-witted comrade from whom I have learned much and with whom I spent precious hours. I deeply regret that destiny meant not to preserve him to you and all his friends, of whom he had many.

Permit me to express to you my heartfelt sympathy and to thank you again for allowing me to contribute to the ancestral

offering you are preparing for him. May he dwell in joy among his forefathers.

Very respectfully yours,
Oscar J. J. Hug.

404 S. Fifth Avenue
Ann Arbor, Mich. U.S.A.
January 30th, 1932.

Mr. H. Ohoka,
184 Rikyu-mae-machi, Suma-ku,
Kobe, Japan.

Dear Mr. Ohoka :

I was very much shocked and grieved by your letter of the 6th instant which arrived a few minutes ago, in which you notified me of the death of your beloved son Akira. Please accept my profound sympathy and condence for the great loss you have suffered. Even now, I don't know how to begin this letter and how to express myself.

I used to correspond with him when he was in the International House in New York, but was at a loss to explain why he didn't write me for a long time. Yes, I was his friend and I am proud to call him my friend, for there existed a mutual feeling of friendship between us. He was to quiet, kind, unassuming, and was ever-ready to do anything. In fact, I had to force him sometimes to do things for our Cosmopolitan Club University of Indiana, in connection with our programs, because he was very shy. He was very studious. I was very apprehensive of his health because of it. For

that reason I used to advise him, and even, lecture him in admonishing tone for neglecting his health. Sometimes I would ask him to take a walk in the open take pictures, or go to shows. He didn't like the shows. He wanted to improve his health but the tremendous assignments which he was forced to cover, was another problem. (I think unreasonable assignments are criminal to student life) of course, we don't want to lag behind, because we don't want to get low marks and disappoint our friends and parents. For that reason many students ruin their health. Akira was also compelled to overcome the language handicap. I was very sorry that he had a great difficulty. At the start, although he used to write well in English. Like other shy students he didn't like to talk very much. He was a "Wizard" with the mathematical figures and farmulae. He loved music; he played the piano well. He used to teach me Japanese songs, and I used to teach him Philippine songs. We always had great times joking. In fact, I was the only one who seemed to have aroused his good humor and made hime laugh. I used to teach him how to fence in the European and Philippine styles, and he would show me the difference from the Japanese fencing. We also demonstrated the Philippine wrestling and the Japanese "Jiujitsu". Unfortunately, he was weak so we had to leave the wrestling and Jiujitsu. I learned a lesson on thrift from him. He was careful with his money. In fact, when I was short of funds I got a little loan from him. We were mutual in our helpfulness. I loaned him when he was not prepared for some unexpected payments, and when he left his check at his room. He preferred to purchase by mail because it effected substantial savings. He bought a typewriter from a mail order house and made a good saving. We used to look over the same catalog of wire until he got one.

I would sometimes amuse him by asking him silly questions like these: "Are you engaged, Akira?" "Or, are you married?" "Perhaps you have babies, already." He would just laugh heartily. Whenever, we refer to girls, we call them "geishas", or "dalagas" in Philippine language. I am shy, but he was the shyest fellow I know. He made friends with some of the well-known co-eds in the campus. He was very friendly and was very respectful. He also made many friends among the faculty members and townspeople. I used to teach him to dance. In fact, I had to take my phonograph to his room for that purpose. We ate Japanese, made candies and food during dances. I think he told me that you sent them. He was a good "advertise" of Japan. He gave out post-cards of beautiful Japanese scenes. (I still have some of them in my album) He loved pictures and I do, too. I believe he sent you some copies of our pictures. He used to take very good pictures, too. He took the best pictures I ever had occasioned to pose for. He bought a Kodak similar to mine. One of our most amusing jokes was in connection with titles. I used to call him "consul" "Emperor" "Merchant" "Prince" "Dry-Goods Magnate" etc.

He would call me "count" "Doctor" (the last being my prospect) It would be impossible to give a short composite picture of him, but the following are perhaps outstanding: (1) Quiet, (2) Unassuming, (3) shy, (4) Friendly, (5) Sympathetic, (6) Respectful, (7) Thrifty, (8) Studious, (9) Methodical, (10) Thoroughgoing, (11) Lover of music and the beautiful (in art, nature etc.), (12) His deep religious nature was not fully expressed outwardly, perhaps because of the environment. (13) Intense love for his family, (14) Loyalty to friends, (15) Last, but not the least, he was impressively and intensely Japanese. This means all that is indescribable in

words, but felt only in the tangible contact and observation with him. It sums up the characteristic traits of all that Japan prides in her people, the peculiar traits not found in other peoples. It sums up the preceding points, plus the indescribable qualities in him. He was true to himself to his family, and friends, and to the ideals of Japan. He was forever seaching for something better. Unhappily his health gave out.

I feel that I also have suffered a great loss. Only the memory of him will linger now, but it will always be with me. No doubt you have suffered the shock of his death.

I hope this will reach you safely. Whatever you may desire please feel free to write me. I shall be honored to render whatever services I am capable of doing.

The newspapers have been printing the news about the troubles in China, and the Chinese-Japanese War. It seems that America Great Britain and other powers are also interested. I don't know how the crisis will turn out. Personally I don't like that peoples should quarrel and kill each other. Sometimes, however, circumstances and national destiny seem to dictate the course of action. But peace is better.

Wishing you and your family the best. I hope you are all well and happy. I shall not forget my simple prayer for your loving son. We may differ in religion but the idea of the Hereafter is identical.

With profoundest respect, and condolence for your suffering, I am.

Very sincerely yours,

Crispin B. Matta.

37 Earle Avenue
Lynbrook, N.Y. U.S.A.
February 1, 1932.

Dear Mr. H. Ohoka,

Although I have never had the pleasure of meeting you I greatly appreciate hearing from the father of a young man from across the world whose memory shall remain with me as an emblem of friendship and hospitality.

I first met your son in New York University where I worked with him in an Office management class. I enjoyed several evenings with your son. I greatly enjoyed knowing someone from the far-east and I shall never forget his appreciation of favors and help in his work which I was very glad to do for him. I spent a very interesting evening with your son at a Japanese Restaurant in New York City as his guest. This was the first time I tried to eat with Japanese Chop-Sticks and I know your son enjoyed the clumsy manner in which I attempted to duplicate the skillful manner in which he used them. At a later date the Japanese-American Club met at the Japanese Club in New York City where your son acted as master of Ceremonies and I felt he made a very able leader.

As a missionary of friendship his work was not left unfinished for like his other friends with whom I became acquainted he formed a hand-clasp of friendship which will never break, and may this be an unbroken emblem of unity and friendship between two wonderful nations.

Wishing you all good wishes

Robert G. Mihan.

Bloomington, Ind.
August 8, 1931.

My Dear Mr. Ohoka :-

Having just received the sad news of your son's death, I am writing to express my sympathy to his family.

I knew Akira in Indiana University. We worked together in our Cosmopolitan club and he was splendidly cooperative in everything he did. We missed him when he left Indiana to go to New York.

Again I wish to express my sincerest regrets to all of his dear family and his memory will linger with us all.

I have lost a sincere foreign friend but the loss is greater to you.

In deepest sympathy,

Miss E. Constance Eacle.

512 S. Jordan Ave.,
Bloomington, Ind.,
January 27, 1932.

We join in grief over your great loss in the passing of Akira Ohoka last August 6. We were greatly shocked to know of his demise. He had thoughtfully remembered us at each Christmas season since our acquaintance. He was always genteel and courteous and so interesting that we entertained him several times in our home. He particularly enjoyed taking pictures, snap shots with a camera, and on several occasions while strolling by our home he took photographs of our family and sent us copies of them. He made a warm place in the hearts of all those who knew him.

We join in sincere sympathy in your great bereavement.

Sincerely,

Mr. and Mrs. John A. Hoadley.

Kobe, August 15th, 1931.

Mr. H. Ohoka,
Nishi-Suma, Kobe.

Dear Mr. Ohoka,

It was a great and sad surprise to me to get your card announcing the death of your son, Akira. He had been a very good friend of mine and I had followed his study in America with very much interest. We exchanged letters a few times each year, and he sent me several pictures of himself in America.

I sympathize with you and your family very deeply in this great loss and sorrow, I had always thought of your son as a connecting link between my native country (America) and my adopted country (Japan), and I am sure that the favorable impression he made on those whom he met there will do much to promote friendly relationship between Japan and America.

My eldest son who left Japan two month ago at the age of nineteen was borne and brought up here. He is today beginning his university study in the University of California. Now that your son has passed away, I will think of my son continuing to some extent the work and influence for international good will that your son began.

With the best of wishes to you and your family; I am

Yours Sincerely,

Roy Smith,

(Professor at
Kobe Commercial University.)

The Salvation Army,
Trivandrum,
Travancore,
South India.

25th April 1932.

The late Mr. Akira Ohoka.

It was my privilege and great pleasure to have known the late Mr. Akira Ohoka.

His genial and happy disposition, coupled with his alertness of mind, made him a valuable companion and friend.

He possessed a great thirst for knowledge and availed himself of every legitimate means for satisfying the same. His natural ambition was controlled by high ideals with regard to truth and honour.

Mr. Akira Ohoka held his parents in high esteem, and had he lived would have added great honour to their names, and he would certainly have gained a place among the foremost citizens of his beloved country, Japan.

I count it a great privilege to have known him, and the memory of his life and character will be a source of inspiration to me.

H. Geo. Bowyer
Brigadier.
Officer of The Salvation Army.

A word of gratitude.

It is my great pleasure that all of you have kindly written extending most profound sympathies toward my family, to pray for the repose of my beloved son's soul, for which I heartily thank you, and I presume that my poor boy at long home is also much gratified at your kindness.

I regret exceedingly that I was obliged to omit some more valuable contributions from many friends on account of lack of space, for which please accept my apology.

Taking this opportunity I wish also, to tender my most sincere thanks to all of you who so kindly favored him during his life-time.

Hazama, Ohoka.

Kobe, Japan.
June 10, 1932.